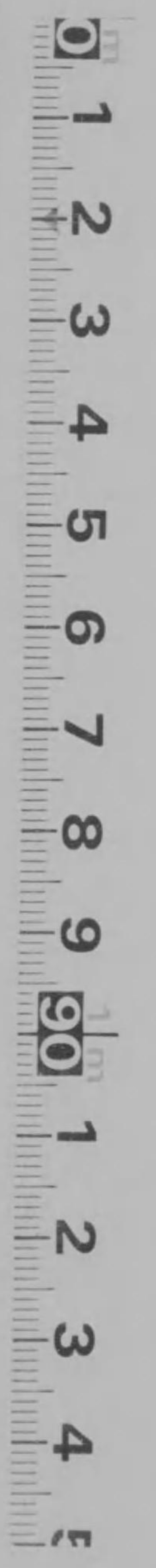




355
84



始

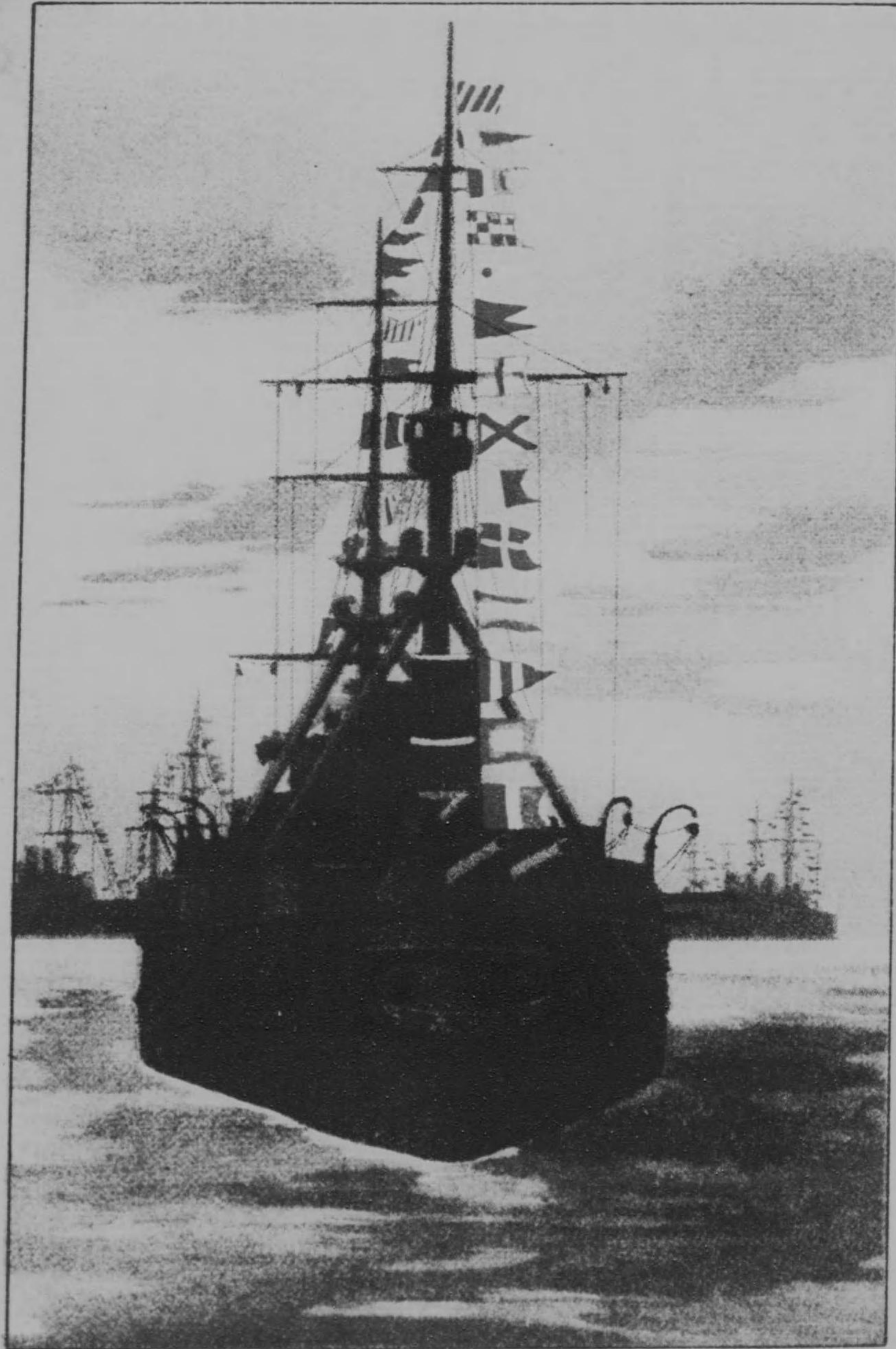


355-84



海上生活

大正
6. 11. 27
購求



表面の繪は觀艦式の御召艦であります。後橋には燦然たる天皇旗が飄へつて居ます。参列の各艦は悉く滿艦飾を施し、その旗は信號旗を吊したものです。前部の防禦甲板からは、三時の禮砲が發射され、御召艦はこれから漸次各艦列を御親閱遊ばされるので、その時には滿艦飾を施さないので、恒例艦觀式は毎年十一月の交に行はせられます。

序

此の書は海上生活と題して、主として帝國海軍の有様を説いたものであります。即ち其上編は巡航記として大正二年度の兵學校卒業生の近海航海に基礎を置き、下編はそれに漏れた雑話を集め、別に附録として遠洋航海其他の實地見聞を集めて一冊としたものであります。

今や世界列國共に海軍の進歩發達をはかるために大努力をして居ります。此の書の讀者諸君のうちから他日數々の海軍將校を出して、日本帝國を守護されんことを神かけて祈る次第であります。

大正六年九月

編者識す

凡例

- 一 本叢書は國民教育に根柢を置き、學校科外に於ける無上の良教科書、青少年に對する絶好の良友たらしめんが爲に發行したものである。
- 一 本叢書は、有益にして趣味ある材料をあらゆる方面に採り、内容の精選充實に努め、知らず識らずの裡に智能を啓發し、徳器を成就し、堅實善美なる性情を涵養せしめんことを期した。
- 一 本叢書は、讀者の自學自習に適せしむべく、其の行文を平易簡明にし、又繪畫をも挿入することにした。
- 一 本書「海上生活」は、木村小舟氏の執筆せられたものである。

海上生活

目次

上編 巡航記

- 一 海軍兵學校……………一
- 二 練習艦隊……………九
- 三 光榮ある卒業の日……………一四
- 四 皇禮砲發射……………一六
- 五 アットホーム……………一八
- 六 軍艦の出港……………二二
- 七 江田内拔錨……………三三

八 士室次官……………三七

九 多忙なる艦内……………四六

一〇 甲板洗ひ……………四八

一一 有明灣入港……………五〇

一二 枇榔島の探検……………五四

一三 軍艦旗上げ方……………六二

一四 志布志の一日……………六四

一五 権現島の口碑……………六八

一六 吊床の夢……………七〇

一七 溺者救助教練……………七三

一八 有明灣出港……………七六

一九 佐多岬の燈光……………七七

二〇 鹿兒島入港……………八〇

二 光榮ある淺間……………八二

三 軍艦の正月……………八五

三 艦内の清水……………八八

四 皇祖御降誕の地……………九〇

五 便所の模様……………九五

六 朝の食卓……………九八

七 軍事點檢……………一〇〇

八 天草灘の眺望……………一〇二

九 霧の海……………一〇五

〇 酒保の買物……………一〇七

一 防火防水教練……………一〇九

三 艦内の入浴……………一一〇

三 雪夜の探照燈……………一二四

三四 佐世保軍港……………一二五

三五 緑の島よ……………一一八

三六 航程五百哩……………一一〇

三七 猛浪襲来……………一二二

三八 バイロット……………一二三

三九 公用使……………一二五

四〇 艦内の郵便……………一二七

四一 半舷上陸……………一二九

四二 荒天準備……………一三一

四三 北馬鞍島……………一三二

四四 吳淞錨地……………一三四

四五 黄浦江……………一三七

四六 上海見物……………一三八

四七 物騒な上海……………一四二

四八 沈没したら……………一四三

四九 スウインギング、ブーム……………一四五

五〇 吳淞出發……………一四七

五一 山東岬角……………一四九

五二 旅順入港……………一五〇

五三 白玉山参拜……………一五二

五四 日没の淋しさ……………一五四

五五 戦歴板……………一五六

五六 深夜の歸艦……………一五八

五七 砲臺廻り……………一六〇

五八 二〇三高地……………一六一

五九 旅順出港……………一六四

六〇 車中の観察……………一六六

六一 金州城外……………一六七

六二 黄海の波上……………一六八

六三 仁川沖の一夜……………一七〇

六四 浅間よさらば……………一七一

下編 海事雑話

一 軍艦の禮砲……………一七三

二 旗艦の話……………一七六

三 軍艦の禮式……………一七七

四 軍艦の風取……………一八三

五 探海燈の話……………一八七

六 軍艦の洗面所……………一九一

七 水兵の浴場……………一九四

八 救命艇の話……………一九九

九 船に弱い人……………二〇一

一〇 海上の屑拾ひ……………二〇四

一一 軍艦の種類……………二〇八

一二 軍艦の日曜日……………二一〇

附録

一 軍艦比叡遠洋航海記……………二二一

二 軍艦阿蘇遠洋航海記……………二三一

三 軍艦淺間遠航挿話……………二五二

四 軍艦香取拜觀記……………二六七

五 横須賀軍港一週記……………二七二

六 海軍参考館を見る……………二八〇

七 旅順の戦跡を弔ふ記……………二八五

八 海上の初日出……………二九六

目次終

挿畫目次

□ 満艦飾の光景……………	口繪……………	□ 総員集合……………	七九
□ 海軍兵學校生徒の呼吸運動……………	三	□ 上甲板沙摺り……………	八三
□ 第一艦隊碇泊……………	一〇	□ 上陸員……………	八八
□ 一等巡洋艦淺間……………	一九	□ 將に載せられんとする魚雷……………	九二
□ 一等巡洋艦吾妻……………	二三	□ 巡洋戦艦金剛……………	九六
□ 戦艦三笠……………	三〇	□ 巡洋戦艦伊吹……………	一〇一
□ 水兵の喫煙室……………	三九	□ 炊事場……………	一〇七
□ 海防艦富士……………	四四	□ 巡洋戦艦筑波……………	一一三
□ 作業……………	五一	□ 炊事場……………	一一八
□ 一等驅逐艦海風……………	六一	□ 甲板掃除……………	一二五
□ ポート下し方……………	六六	□ 銃槍……………	一三〇
□ 鞍馬……………	七一	□ 比叡公試發射の景……………	一三六
□ 厩前……………	七五	□ 同上……………	一四二

挿繪目次

挿繪目次

□ 手旗信號……………	一四八	□ 戰艦攝津……………	一八一
□ 大砲發射……………	一五四	□ 巡洋艦平戸……………	一八九
□ 士官炊事室……………	一六三	□ 將校休憩……………	一九八
□ 治療室……………	一七四	□ 理髮……………	二一〇

挿畫目次終

海上生活

巡航記

海軍兵學校



風光明媚の江田島海軍兵學校

海上生活の物語をはじめの前に、どうしても記さねばならぬのは、江田島の海軍兵學校のことです。一體江田島は、廣島縣安藝郡の海中に峙つて居る一つの小島で、其の風光の明媚な點から云へば、恐らく隣島の嚴島にも譲りません。まい。けれども我が國の將來の提督を養成する、日本唯一の海軍兵學校が、此地に設けられてある爲に、江田島とさへ云へば、誰も先づ兵學校を連想するのであります。

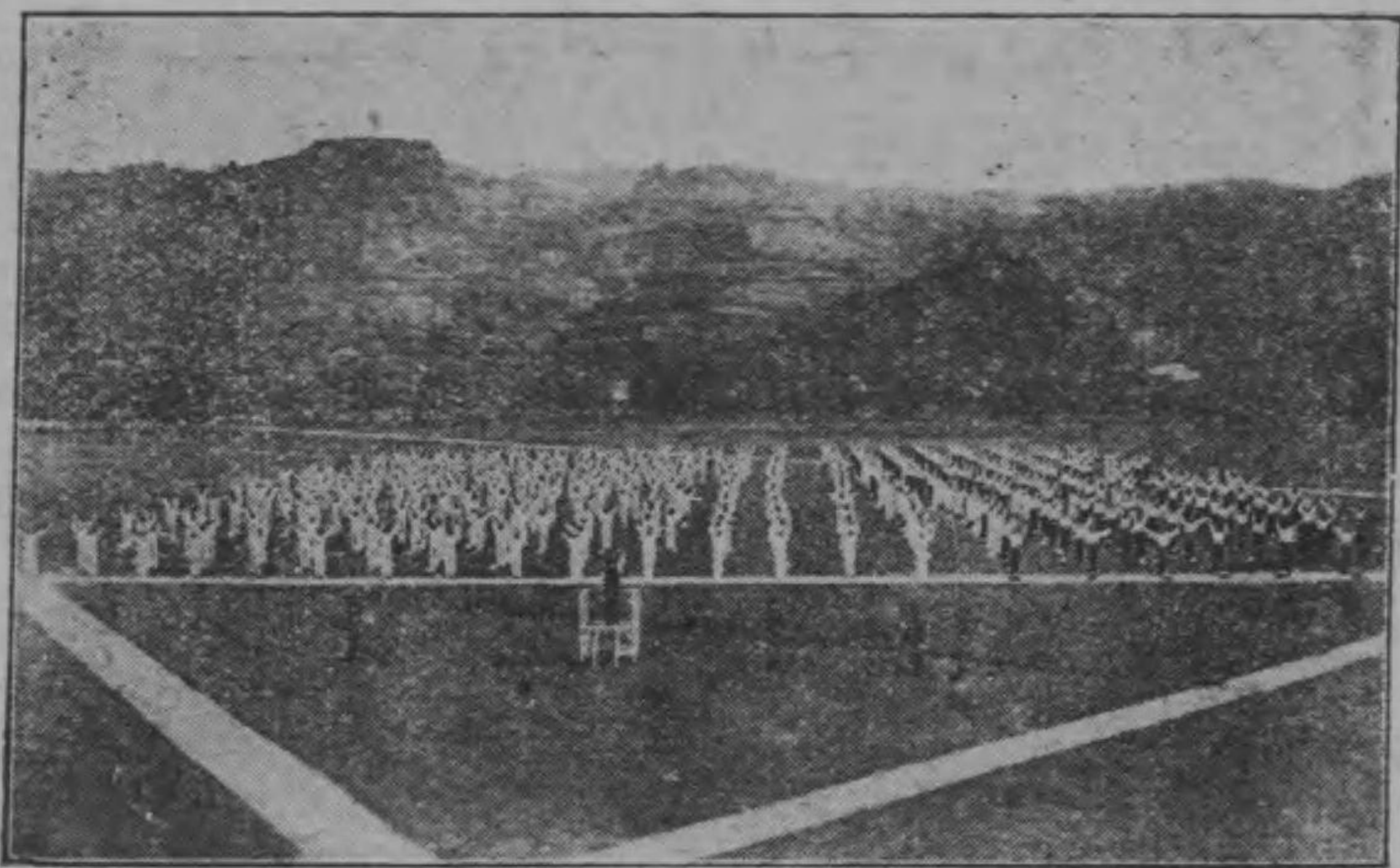
★海軍兵學校

それ程に高名い島でありながら、割合に世の中の人の訪ねる者が少く、随つて其の風光の、遍く知られて居ないのは、一體どうした事かと申せば、それは云ふまでもなく、交通の不便なものにも因りませうし、又實際兵學校以外には、大して見物する程のものがありませんから誰もわざ／＼此の不便の島へ、足を向けないからで、風景はと云へば、此の附近では、先づ嚴島に限られて居ります。即ちさう云ふ點で、殆ど漫遊客がないだけ、それだけ江田島の住民の質朴さは、又驚くばかりで、何所を歩きましたも、まことに居心地のよい所です。で兵學校を別にして、江田島の山光水色、また人情の清く美しいことを申し上げて置き度いのであります。

江田島の住民

此の書の讀者諸君のうちには、將來身を海軍に投じて、海上に雄飛する人も、決して少くありませんが、夫れには先づ此所の兵學校に来て、前後三年間の勉學を積み、其の上で海軍少尉候補生とならねばなりません。未來の東郷と云つたやうな、提督の卵子は、此の海暖き島陰で、雄々しくも其の卵の殻を破り、そし

蜜柑山



(海軍兵學校呼吸運動)

て呱呱の聲を擧げるのであります。

江田内の海上、遙か軍艦の上から、此の美しい島山を眺め見渡せば、天をり立つ古鷹山の峻峰を背に帯びて、北から吹く風を避け、俗に蜜柑山と云つて、満山悉くネーブルの金鈴を懸け列ねた丘に沿つて、丁度屋氣樓でも浮び出したやうに、丘に沿ひ、平地に接して立ち並ぶのが、我が兵學校の校舎であります。

江田内の海は、眠るかと思はれるばかり静かで、魚や蝦の呼吸の外には、小波一つ動かず、遠く列なる銀砂の上に、神の使が來て、挿して置いたかと思はれる松の並木が、千年萬年、春も秋も色を變へぬ縁

八島講堂

色を装ひ、柔かい芝草の廣原、冬はよし其の色が枯れ果て、居ても、見るからに心地よろしく、繪に見るばかりの景色であります。

校内には、いろいろの校堂が建て列ねられ、中にも八島講堂と云ふは、先年日露戦争の最中に、旅順の沖で、敢なき最期を遂げた、戦艦八島の、大きな模型が、静かに横はつて居ります。それは成る程模型には相違ありませんが、艦體の各部各部が、實物と少しの差もない迄に、完全に造られてありますから、之によつて戦艦の知識を得られることゝなつて居ります。

全體此の模型の出来た當時は、軍艦八島と云へば、世界列國の戦艦のうちでも、一ばん新式のよい艦でありましたから、さては特に模型に造つて、教授用の標本とせられたのでありませう。

けれども時代は進歩します。殊に海軍の武器の進歩は、一層目ざましい勢であります。故に八島講堂の舊式模型では、到底満足することが出来ず、近く超ド級艦の模型を造つて、水面に浮べて、運用するやうな準備も出来て居ります。

超ド級艦

温習室

其他温習室の設備が、何所から何所までも、よく行き届いて居ることや、また展覽所が、立派な圖書館と同様、内外古今の書物を集めてあることなど、今更くだくしく申述べる必要もありませんが、こゝに參觀人を最も驚かせるのは、海岸に近く築かれてある砲臺であります。

他の建築物は、大抵赤煉瓦か、又は石造でありますのに、此の砲臺ばかりは、黒くぬられた長い低い建物でありますから、只海上から眺めただけでは、一種異様の形狀を呈して、さながら長蛇の這ひ行く如くに眺められます。

尤も此の建物は、砲臺とは云ふものゝ、矢張り一つの教場であります。而も他の教室へは、大抵靴のまゝで入ることが許されてありますが、此の砲臺に限つては、何人と雖も、屹度靴を脱がねばなりません。それと云ふのは、附近の土地が、一帯に細い砂地ですから、自然砲臺を穢したり、砲の機關部に損傷を與へる様なことがあつてはならぬので、かういふ規則になつて居るかと思はれます。

さて静かに砲臺の中へ入つて見ますと、其の床板は軍艦の甲板と同様に張ら

★海上生活

(六)

れ、三時位から八時位までの大砲が、砲塔もろとも前後左右に、ずらりと並んで居りますので、何のことはない大砲の見本陳列所と云つた観があります。勿論此の大砲を回轉させるには、場所が場所だけに、電氣力や、水壓力を用ふることは出来ませんから、人の手の力だけで、上にも下にも右にも左にも動かします。兵學校の生徒は、まだ乗艦しないのに、此の砲臺で、大砲の扱ひ方を、一通り教はるのであります。

また體育に關しては、擊劍や柔道や、いろ／＼ありますが、それ等の教室は、さすがに完備したもので、殊に其の坪數の多く、豊に取つてあることは、一寸他の學校では見られません。

次に生徒の喫煙室の設備も、なか／＼よく出来て居ますが、こゝは極めて殺風景な、如何にも陰氣な石疊の室に、數個の不細工な桶のやうなものが吊してあるばかりですが、之ぞ別のものではない、煙草盆であります。尤も生徒の中には、まだ丁年に達しない者も大勢あるので、誰でも此の室へ入れば、勝手に煙草を吹

かすと云ふことは、元より出来ないのです。

それ故に、丁年に達した者だけの姓名が、室の一部に、ずらりと列記されてありますので、其の人々だけが、云はゞ木戸御免で、或一定の時間を限つて、こゝへ來ることも出来、且喫煙も自由なのです。勿論丁年未滿で、喫煙したがる様な者は、他の學校ならばイザ知らず、本校に限つては、一人も無い筈です。

斯て水雷講堂、船具講堂と、種々の建物を見廻つて、氣象學堂へ行つて見ますと、こゝにも又種々の目新しいものがあります。其中に就いて、世界の海流を一目の下に示すといふ、一種の模型が、私共のやうな素人には、大に物珍しく感ぜられます。之は一個の大きな箱の中に、世界の海と陸とを、高低によつて現したものがあつて、其の所々から赤や青の管が突き出て居るのです。でたゞ之だけ見たのでは、一向に興味もなく、又面白いこともないのですが、さて説明を聞いてみますと、此の模型の面に水を充たして、更に其の水面に米糠を散らし一方から管を通して風を送れば、水は忽ち運動を起し、それにつれて水面に浮んで居る

米糠が、陸地を遶つてグルグル流れ廻るので、其の米糠の流れる筋道こそ、海流の働きと殆ど相違する所がありません、かう解つて見ますと、如何に智慧のない私達にも、成る程と感心が出来ます。

さて一方の蜜柑山に連る高地には、故有栖川宮裁仁王殿下の御學問所が、空しく建つて居りますし、山の背後には酒保もあると聞きました、時間の都合で見ることが出来ませんでした。

この学校の卒業式は毎年十二月の初旬に行はれるので其日は特に 陛下の御名代が御臨場になり、海軍大臣や、海軍各部長や、其他海軍部内の高位高官の人々が、多数列席して、厳かなる卒業證書の授與式があります。私の拜観しましたのは、大正二年度の、第四十二期卒業式で、此の日は伏見宮博恭王殿下が、陛下の御名代として、御臨場遊ばされたので、之より以下記す所は、主として此の第四十二期の少尉候補生が、海上生活の實地練習に就いての、私の狭い見聞を基として、一般の日本軍艦の有様に、説き及ぼしたいと思ふのであります。

酒保

卒業式

二 練習艦隊

日本の海軍には、第一艦隊（主として有力なる戦艦）、第二艦隊（主として有力なる巡洋戦艦）、第三艦隊（戦艦及び巡洋艦）の三艦隊が、常備艦隊として、専ら日本の海岸海面を警備して居りますが、其他に猶別個の練習艦隊と云ふ二隊があります。之は主として海軍兵学校の卒業生を乗艦させて、第一期には近海航海をなし、第二期には、遠洋航海をして、艦内の生活に馴れさせると共に、各地の風土人情をも見學させることとなつて居ります。

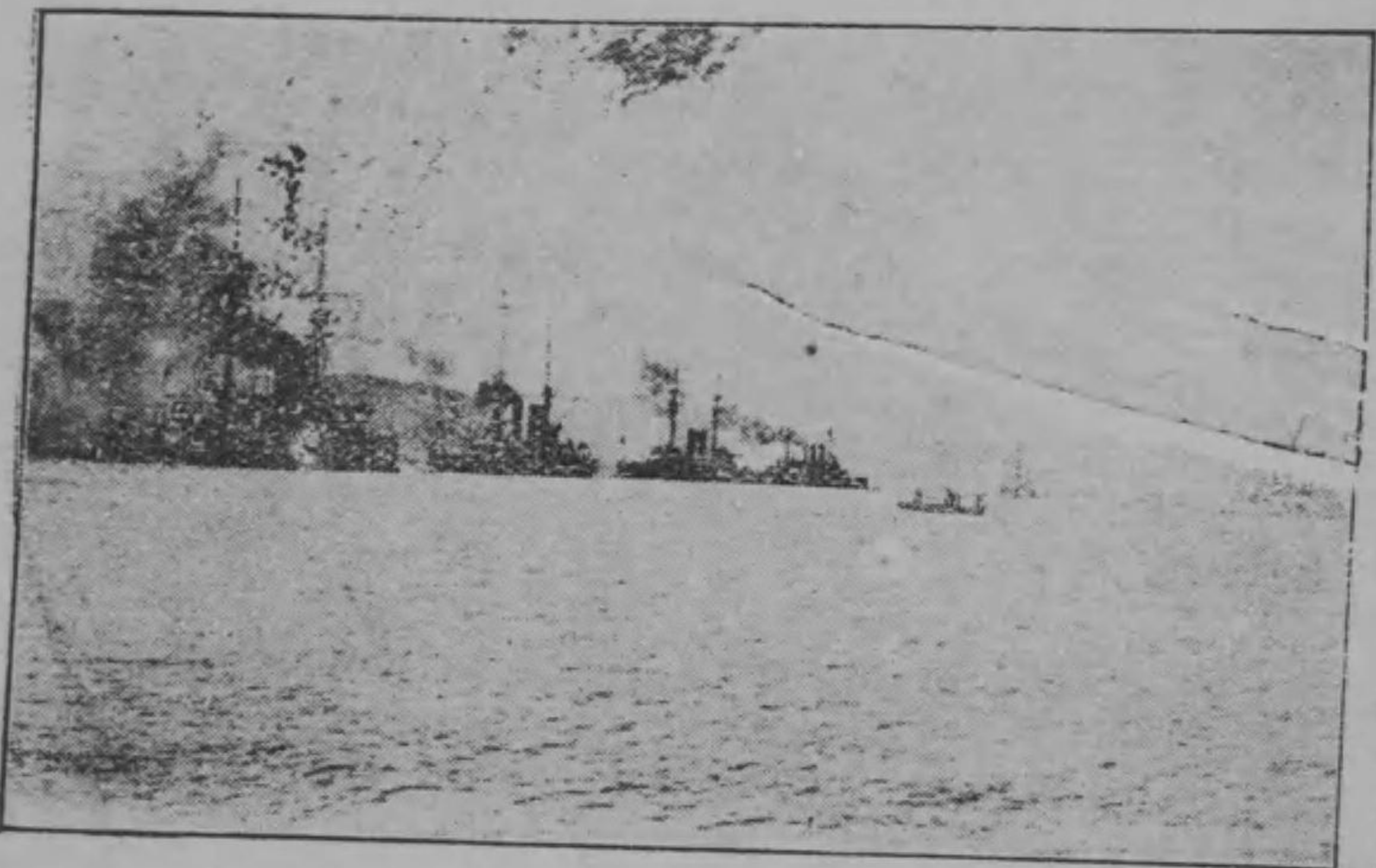
大正二年度の練習艦隊は淺間と吾妻とが其の任に當りました。兩艦はいづれも一等巡洋艦で、過ぐる日露の戦役には、仁川沖に旅順の海に、さては日本海方面に、常に敵艦と戦つて其の度に必ず勝利を博した名譽の軍艦、また之を率ゐるのは、海軍少將黒井節次郎閣下でありました。黒井少將は遠洋航海中に中將に御昇進になり、後には横須賀工廠長、馬公島司令官等を経て、今は旅順要港部司

淺間、吾妻

★練習艦隊

★海上生活

令官の職に在られます。至つて世間の事情に明るい方で、殊に職務に御精勵なされ、練習生の戴く長官としては、まことに無二の好提督でありました。以下記す所は、私の見學した、『近海航海』を基礎として、艦内生活の一般を示すのであります。此の機會に於て、黒井閣下に對して、特に御禮を申さねばなりません。



(泊碇隊艦一第)

さて此の第四十二期の、練習航海に於ける旗艦は、淺間に撰定せられて、司令部を置かれ、司令官旗は常に同艦の前橋高く掲げられたのであります。仍て御參考のために、旗艦淺間及び二番艦吾妻の概要を、ここに記さねばならないのです。

軍艦 淺間。

艦種 一等巡洋艦(装甲)。

長 四百四十二呎。

幅 六十七呎二吋。

吃水 二十四呎五吋。

排水量 九千七百噸。

實馬力 一萬八千馬力。

速度 十八節。

炭量 六百噸。

短艇 艦載水雷艇一隻、汽艇二隻、ランチ一隻、ビンネース一隻、カッター三隻、通船三隻。

製造所 英國ニューカッスル市アームストロング會社。

製造年月 明治三十一年三月二十二日進水。

★練習艦隊

大砲

四十五口径安式八吋砲四門、四十口径安式六吋砲十四門、四十口径安式三吋砲十二門、山内二听半砲四門、麻式六耗五機砲二門。

發射管

五門。

探照燈

四臺。

機械

四笛三段膨脹式二臺。

罐

宮原式水管罐。

軍艦

吾妻。

艦種

一等巡洋艦(裝甲)。

長

四百五十呎六吋。

幅

五十九呎六吋。

吃水

二十三呎八吋。

排水量

九千三百二十六噸。

實馬力

一萬七千馬力。

速力

十九節。

炭量

六百噸。

短艇

艦載水雷艇一隻、汽艇二隻、ランチ一隻、ビンネース一隻、カッター三隻、通船三隻。

製造所

佛國ロワール會社サンゼル工場。

製造年月

明治三十二年六月十四日進水。

大砲

四十五口径安式八吋砲四門、四十口径安式六吋砲十二門、四十口径安式三吋砲十六門、山内二听半砲四門、麻式六耗五機砲二門。

發射管

五門。

探照燈

四臺。

機械

四笛三段膨脹式二臺。

罐

ベルビル水管罐。

以上が兩艦の實力であります。如何に浪が高く押しよせ來るとも、一萬噸に近

い裝甲巡洋艦の、何のビクとも致しませう。之より此の兩艦が、波を蹴り風を凌いで、進航する勇しいお話に移りませう。

三 光榮ある卒業の日

時は大正二年十二月の十九日、忘れもせぬ此の日は、朝から日本晴の上天気、風もなければ、研ぎすました、鏡の面を見るやうに美しい江田内の灣頭に、どつしりと宛然島の俄かに浮び出した如くに、其の雄大の姿を思ふまゝ見せびらかして居るのは、淺間、吾妻の二艦でありました。

午前八時になり、兩艦からは清らかな喇叭がなり出しました。曲は直にそれと知られる國歌君が代、嚟唳として背面の古鷹山に反響して、一入の壯嚴さを覺えさせます。すると艦尾の方には、はや大きな軍艦旗がしづくくと旗竿に掲げられたのであります。

海には淺間、吾妻兩艦の外に、昨夜のうちに入港した、運用術練習艦たる嚴島

が、ゆつたりと錨を下して居ります、三隻共に滿艦飾を施して其の美しさは目もさめるばかり、又陸上には、卒業式場のマストにも、同じ様に滿旗飾を施され、海陸共に燦爛たる五彩の花の咲き亂れた如く、時は初冬の候ながら、ここばかりは早くも春が来たのかと、疑はれるばかりの有様であります。

かうして充分の用意の出来上つた江田内の海と陸とは、御召艦の入港を、今や遅しと待つばかりであります。さる程に時恰も午前九時半、遙かの灣口に、數條の煤煙が立ち登るよと見る間程なく、富士を先頭として、御召艦伊吹は、橋頭高く皇族旗を、折から初冬の風に翻へしつゝ、悠々として入港しました。

私達は此の崇高なる光景をば、淺間の前部シエルターデツキに於て、本艦の將校一同と共に拜觀したので、眼前の三吋砲は、今や皇禮砲の火蓋を切らうと待ち構へて居ります。あゝ何と崇高偉大の光景なるよ、生れてはじめて此の光榮を擔ふ、愉快さは、筆にも口にも盡されませんでした。

四 皇禮砲發射

軍艦の禮砲は、すべて三吋砲を使用致します。むかしは特に禮砲用として、眞鍮製の美々しく飾り立てた砲が備へてあつたさうですが、只今では大抵三吋砲を用ゐます。此の大砲は主として水雷艇などの射撃に使用するもので、淺間には、前後のシエルターデツキに、各三門宛備へつてあります。

又陸戰隊を上陸させる場合には、直に此の大砲を取り外して、砲車の上に載せ、野砲として用ゐますので、砲架や車輪なども、一定の場所に收藏されてあります。

シエルターデツキに備へつてある三吋砲は前部と左右兩舷に向つたのと、都合三門ありまして、左右で交もく打つので、中央の一門は豫備砲として、萬一二門のうち何れか不發の場合には、直に此の豫備砲を打つこととなつて居ります。

陸戰隊

さて私は、單なる便乗者に過ぎませんから、腰に劍があるでもなく、又腕に金筋があるので御座いませんが、淺間の士官次室の一員として、中少尉同様の待遇を受けて居りますから、特に士官室の士官と共に、登艦禮式を行ひ、奉賀を三唱したのであります。

奉賀三唱

かう云ふ場合に、普通民間では、萬歳を三唱するのが例となつて居りますが、海軍では副長の發聲で、奉賀を三唱することとなつて居ります。又登艦禮式と云ふのは、全艦の將士等が、舷側其他の最も見易き場所に整列して、謹んで行ふ禮式であります。

二十一發

天皇陛下をはじめ、皇族殿下に對する皇禮砲は、二十一發を定めとしてあります。甚だお恥かしい話では御座いますが、大砲の側で發射を見たこと云ふことは、私にとつては臍の絡きつて之がはじめて、其の壯快さは又何に譬へんやうもありませんでした、凄じい爆裂のひびきは、耳を打ち心臓を震はせ、砲口を迸り出る火焰と煙とは、すぐ眼の前に展開して、さしも秀靈明媚の江田内の山海も、

一時は各艦より打ち出す砲煙に包まれて、私達の視界から離れ去つたと思はれませんでした。

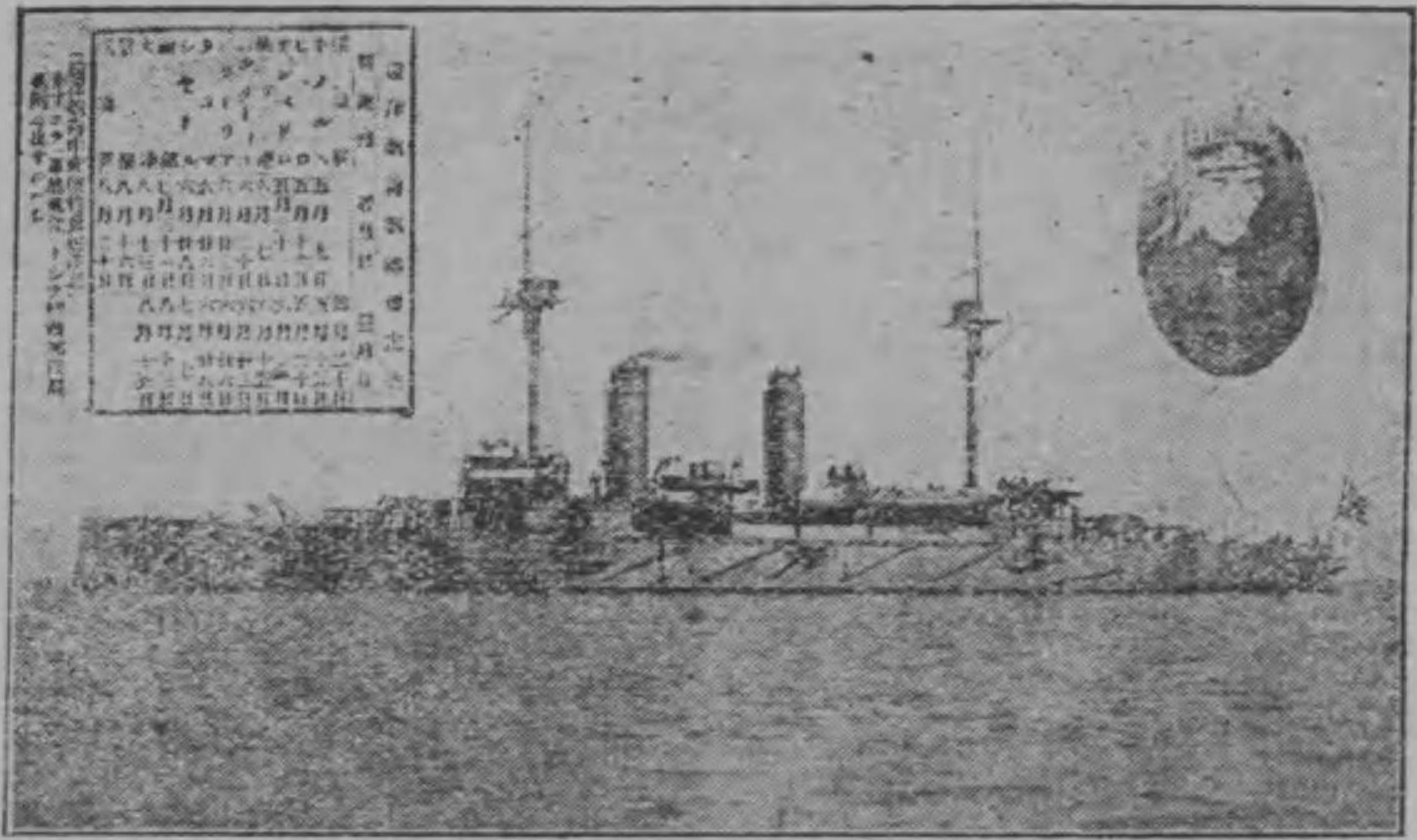
かゝる間に、御名代の宮殿下の御召艦は、悠々として灣内の白波を蹴立て、やがて學校前の棧橋から御上陸遊ばされ、今日の式場へと御臨御になりましたが、私共は夫れ等の光榮に充ちたる景色を、甲板上に佇立して、飽かず眺め暮したのであります。

五 アットホーム

兵學校の卒業式は、此の日目出度く済んで、一百十七名の少尉候補生は、淺間と吾妻との兩艦に分乗し、翌二十日には、いよいよ見なれた江田内を出港して、初航海の途に就くのでありますが、其の前に旗艦に於てアットホームを開設して、多年教導扶掖の恩をうけた、兵學校の教職員、及び其の家族の人々を招待することゝなりました。

初航海

奇想妙案



(まさあ 艦洋巡等一)

例の如く艦内では、朝食を七時に終つて、直に各受持員が其の準備にとりかゝりました。一體水兵の中には、入營前に種々異つた業務に服して居た者が多く、随つてなかく器用な細工をしたり、藝事にかけても、黒人跣足と云ふ様な人が多いので、此の日のアットホームに於ける即席の飾り物などは、陸上の人には、考へも及ばない程の、奇想妙案を凝らした珍趣向のものが少くなかつたのです。

さて午前九時頃になり、艦内の準備も、一通り出来上つて、今ではお客様のおいでを待つばかりの有様となりました。すると間もなく、兩艦の艦載水雷艇

★アットホーム

(一九)

主人役

や、小蒸汽が、ドシ／＼客人を送り届けて、左舷の舷門を賑はして居ります。

此の日の主人役は昨日艦に乗つたばかりの候補生達で、其の連中は舷門の所にお客様を待ち受けて、頻りに愛嬌をふり蒔くと云ふ有様、また上甲板の方々に、いろ／＼な造り物が飾られてありますから、それを仔細に見物して廻るだけでも、なかなか容易なことではありません。

で私の如き居候同然の者でも、何だか今ばかりは、艦の中のお祭でいもあるかの様に、気がツハ／＼して落ちつきませぬもの、ましてお客様の身になつたら、どんなに愉快でありませうか、私は多くのお客様の後方について、先づ艦内の造り物を、一通り見て廻りました。鶴龜の花車もあれば、機關部員が石炭を焚いてる生人形もあり、或は鶏の出生一代記だの、鯉の漉登りだの、古物展覽會だの、日本海々戦だのと、思ひ／＼の物を出してありますが、中にも鯉の漉登りの如きは、真物の水を、艦橋の上から落下せしめると云ふ、活動式の大仕掛のもので、之には來觀者一同がアツと驚いて居りました。

艦内の飾り物

又天幕を張り廻した後甲板には、素敵に立派な舞臺がかゝつて、こゝでは手品、茶番、劍舞などが、のべつ幕なしに演じられると云ふ騒ぎ、又其間を十數人の假装行列隊が練り廻つて、左を見右を見るのに目が疲れる位、甲板上の混雑は、田舎の鎮守祭より以上でした。

中甲板の大食堂

かくて正午に近くなりますと、中甲板に設けられた大食堂を開いて、盛んなる立食の饗應に、女も子供も、髯の生えた紳士も入り亂れて、飲む食ふ、其の騒ぎは大抵でありませぬ。食卓には、正宗あり、鮎あり、鮮あり洋食あり、洋菓子あり果物あり、それ等を思ふ存分に腹へ詰め込んで、一同が上甲板へ出ると、程なく兵學校長の山下中將が退艦せられ、禮砲のひゃきが、突如として江田内の山海を揺がせましたが、之について今日の招待に應せられた教官や、其の家族の方々も續々退艦して、艦内は大水の退いた後の如くに、急に淋しさを感しましたものゝ、それでも昨日からは、從來の乗組員七百名の外に、新たに六十名の候補生を收容して、何所にか生々した氣分が漂うて居ります。

出港用意の
喇叭

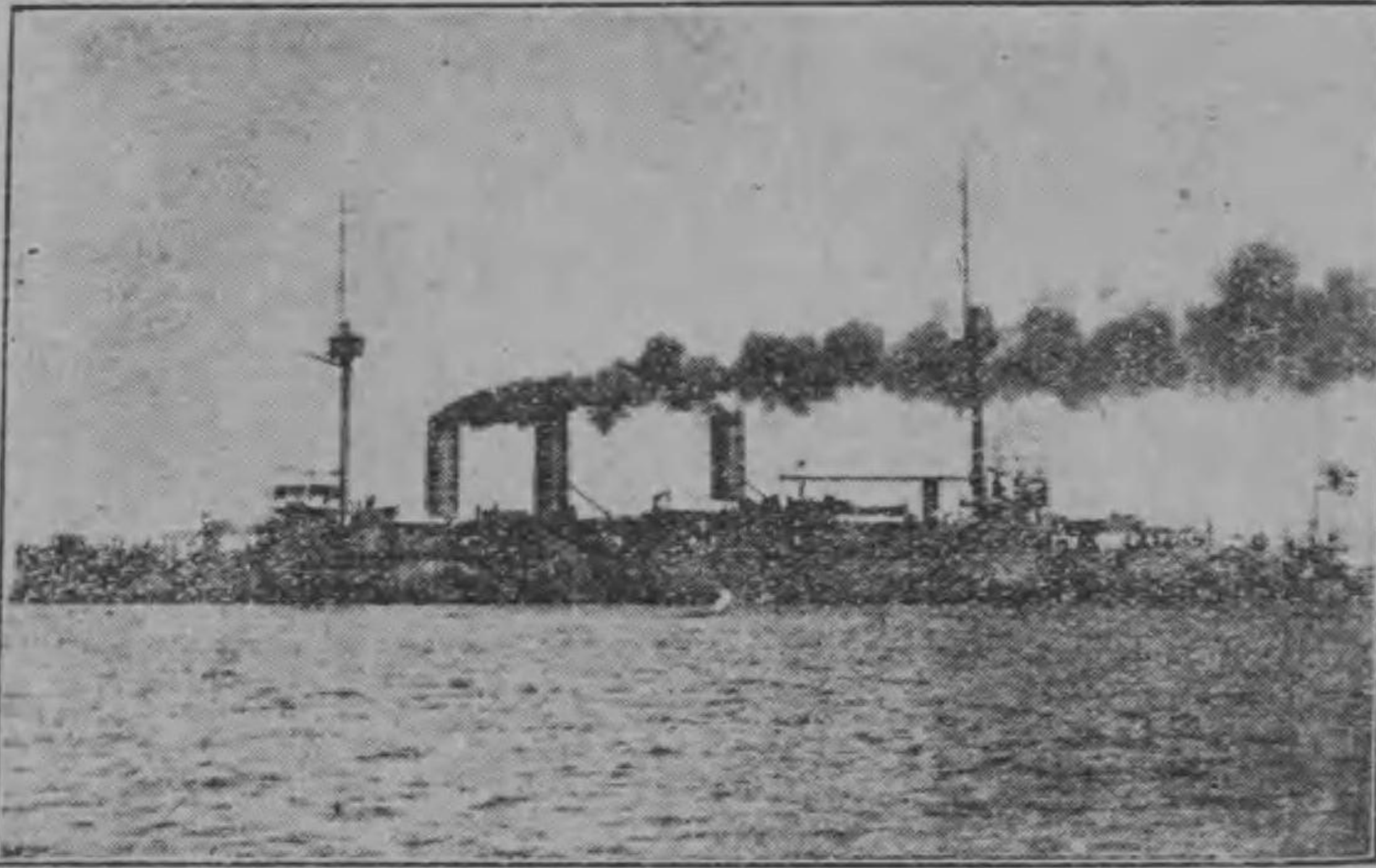
さる程に午後零時五十五分には、最早や艦内の總てが、舊時の如くに整頓せられ、出港用意の喇叭と共に、ツイ今の今まで、藝人既足の様子で居た水兵等も、悉く嚴肅なる命令の下に、それぞれ部署に就きましたが、其の舉動の敏速なる陸上生活の私共には、殆ど神の業ではあるまいかと、疑はれる程でありました。

六 軍艦の出港

出動命令

巡航記の挿話として、こゝに勇しき出港用意の模様を記します。私の乗つて居る軍艦は、俄に明朝午前九時、〇〇軍港を抜錨して、某地點に向ふこととなりました。既に前々から、港内第二區の浮標にかゝつて、いつ出港命令に接する様子もなく、悠然として其の巨體を海波の弄ぶに委せて居りましたが、今出動命令に接すると共に、艦内の各部が色めきたちて、さながら獅子の、新しき眠りを覺した感があります。

先任衛兵
隊長



(一等巡洋艦 吾妻)

て艦橋の下に來ました。時に艦橋の上から、當直將校が威嚴ある音調で、

★軍艦の出港

これより先夕食の箸を置いた士官室の士官は、再び一定の任務に就くべき寸刻の間をば、一服の煙草に暮して居りますと、副長は、折から後部艦橋なる、當直將校に對して、航海の準備に著手すべく命じましたので、同將校は直に呼笛三聲を以て、先任衛兵隊長を呼びました。

さて此の先任衛兵隊長と云ふ役目は、主として艦内の警察事務を掌る、當直衛兵の頭で、多くの場合には、舷門の附近を取締つて居ります。先任衛兵隊長は、今や當直將校の呼笛を耳にすると同時に、直に走つ

『フォールの食事は済んだのか』
と聞きました。一體フォールと申すのは、艦の前部を稱する言葉であります
が、下士卒は専ら前部を住居として居りますから、普通にさう呼ぶのでありま
す。すると衛兵伍長は、

『ハイ、片つきました』

と、明瞭に答へました。當直將校は之を了解して、又もや一聲の呼笛を以
て、掌帆長屬を呼びました。掌帆長屬と云ふのは、主として艦内の傳令を
司る兵曹であります。かう云へば皆さんは、定めし不思議に思召すでありませ
う。近時の軍艦には、帆と名のつくものが御座いませぬ、即ち其の航走には専ら
汽力を用ゆる時代でありますのに、猶掌帆長などと云ふ職名が残つて居るの
は、大いに時代遅れの感があります。然り、まことに時代遅れの感がありま
す。軍艦の進歩は、あらゆる文明の魁をするにも拘らず、其の職名にはかうした
面白い矛盾があります。但しそれは名ばかりで、其の役目とする所は前にも記し

掌帆長屬

た如く、傳令の任を掌るのであります。

さて當直將校の命を受けて、掌帆長屬の傳令は、長い／＼呼笛に現れ、

『水兵部—總員—整—列—』

と來るので、すると今までは、上中下甲板の各所に、それぞれ仕事をして居
た水兵達、ソレ總員整列だと、一大事件の突發したかの如くに、走つて後部甲板
に集りました。若し夫れ下甲板の一室にあつて、此の騒ぎを耳にしますれば、艦
内の作業に慣れぬ門外漢は、何事が起つたのかと、眼の色を白黒させて、胸に波
打たせて驚くであります。

總員整列

何しろ數百人の水兵部が、鐵板の上を疾走して、時を移さず後甲板に集合する
ことゝて、其の騒々しさは並大抵のことではなく、現に私なども、此の總員整列
のある毎に、それと知りながら、幾度も胸をどきつかせたのであります。

今夕の總員整列は、何のために行はれたのでありませうか、それは云ふまでも
なく、明朝出港の準備をするために、事業の割當を定めるためであります。

事業割當

★軍艦の出港

甲板士官

一體軍艦の水兵部は、左右の兩舷に分たれて居ます。そして其數はすべて八、水兵部の各部長は、夫れく受持の水兵が、一定の場所に整列したのを調べ、相次で當直將校に報告します、かくてこゝに愈々事業割がはじまれますが、甲板士官だの、汽艇指揮だの、或は掌帆長などは、各自に自分の受持事業に来る水兵を貰ひ受けやうと、特に當直將校の傍につききりて、貰ひ受けるまで離れやうとはしないのです。

普通の巡洋艦には、艦載水雷艇、汽動艇、カッター、ピンネース、傳馬船などを備へて居りますが、之等の小艇類は、軍艦の碇泊中には、水面に下してスウィングブームに吊し、舷外に出して置いて、いつでも使用に差支ない様にしてありますが、航海中は更に其の必要がないばかりでなく、艦の動搖に従つて轉落したりする恐れがありますから、之をば舷内に吊り入れ、クラッチと稱する臺の上に乗せて、カバーをかけて置くのです。

尤も航海中に、不慮の災難や過で、兵員が海中に落ちる様なこともありますか

スウィングブーム

救命艇

ら、さう云ふ萬一の場合には、ボートを下して極力救助しなければなりません。されば其の用意として、最も堅牢な造り方で、且波浪の力に耐ふるだけのカッターを、特に左右の兩舷に吊り出し、之を救命艇として置くのです。當直將校は今、此の事業をするとして、勵聲一番、

『ボートクルー一步前へ！』

と命を傳へました。すると各ボートのコクソンは、夫れくボートクルーを集めて、人員の調査を致します。又當直將校は、其の事業を成し遂げられるだけの人員を選び取つて、更に力ある聲で、

『第一、第二カッター、クルーは、ボートをライフボートに備へ、其他のボートクルーは、各ボートをクラッチに据え、カバーを掛け』

と命じます。全體此の救命艇は、ずつと腕を伸した如くに、舷外に吊り出されて居ますが、十分堅固に縛りつけてありますから、如何に艦體が動搖しても、毫も顧慮するの要なく、殊にそれが咄嗟の間に、スル／＼と師せる様にしてあるな

★軍艦の出港

ライフジャケット

ど、装置の巧妙さは、驚くの外ありません。
こゝに又救命艇の艇員等は、航海中必ず、ライフジャケットを着用する規定で、それはキルク製の撃剣の胴の如きものでありまして、此のライフジャケットを着て居れば、よしや海中に落ちた所で、容易に水上に浮んで居ることが出来ます。

スクリーン

さてボートの事業が終りますと、次には艦橋にスクリーンを張るので、此の事業は當直の二三人と、信號兵の手で行ふことゝなつて居ます。一體軍艦では、左舷の者と右舷の者とが、互に當直になつて、種々の作業に従ひ、非番直の者は豫備になることゝなつて居ります。

艦橋にスクリーンを張る理由は、航海中には強い風もあたりますし、又煤煙のためにも穢される恐れがありますから、それを防ぐ手段として、帆布製のカバーを張るのであります。

此の作業を行ふのは、主として信號兵の役目であります。蓋し信號兵は、常に

スモークカバー

艦橋にあつて、事業に當るからで、勿論幕を張るのには、相當の人数を要すること故、當直將校、水兵部員を以て之を補ふことゝなつて居るのであります。

艦橋のスクリーンが張られますと、此度は残りの水兵部によつて、スモークカバーかけ方の用意がはじまります、既に記した如く、航海中は煙突から吐き出す煤煙のために、檣だの、桁だの、橋樓などが、著しく汚損しますから、それを防ぐ必要上、スモークカバーをかけるのです。所が之等の作業は、殆どすべて同時に行はれますから、上甲板の混雑さは、外部の人の想像も出来ない程であります。

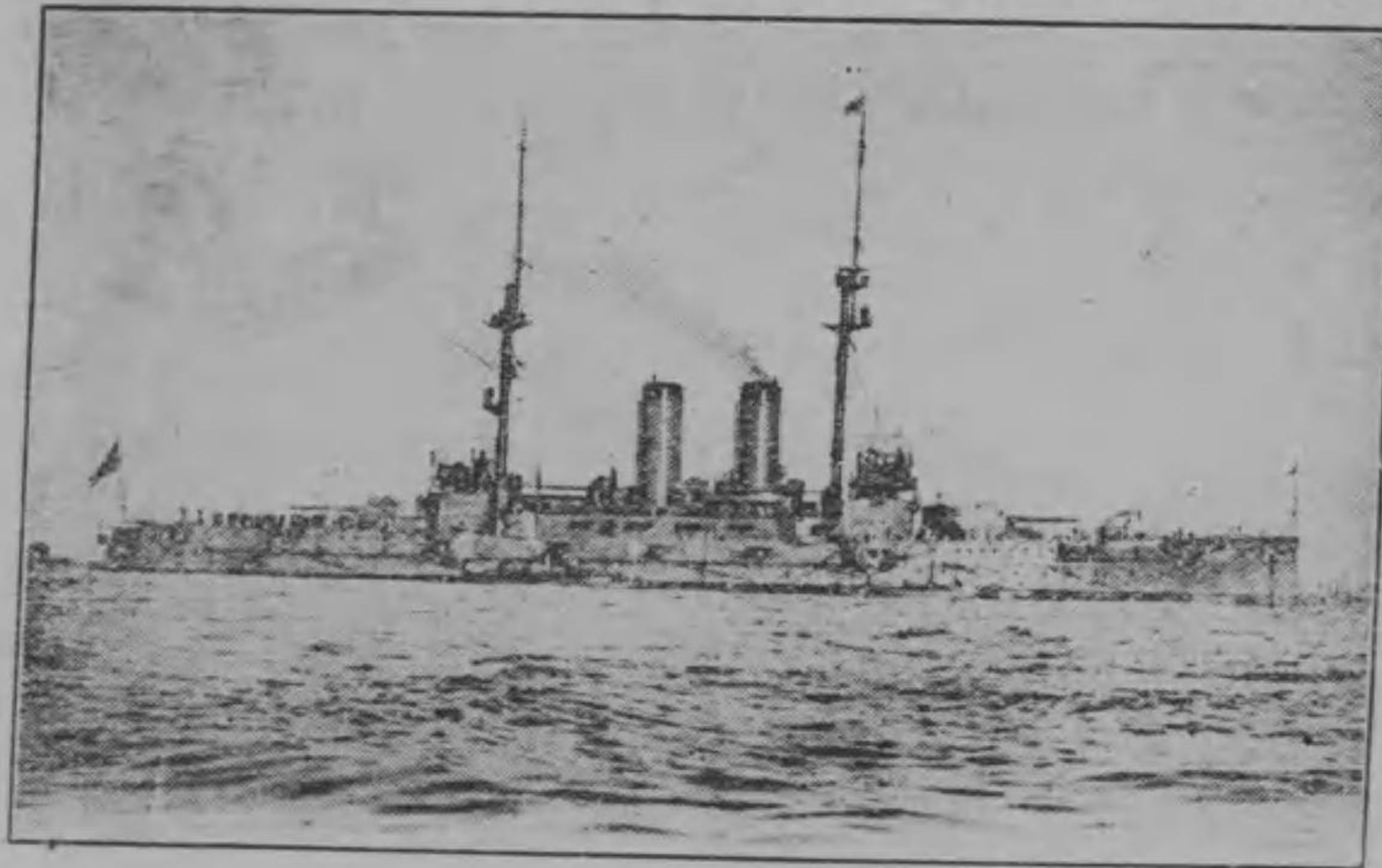
最後に當直將校は、

『當直エンコルギヤ通せ』

と令を下します。最早や水兵部總員の作業は、一段落ついたのでありますから、當直の水兵だけを残り、其の人員を以てエンコルギヤを通させます。海軍で使用する術語が、非常に現代とかけ離れて居ることは、前にも書いた様に思ひますが、一

體エンコルは錨、ギヤは諸屬具のことで、むかし揚錨機の進歩しなかつた頃には、錨を揚げるのに、大きなテークルを使用したもので、随つて『エンコルギヤ通せ』とは、テークルに太い繩を通すことでもあります。所が現今では、専ら機械力を用ゐますが、號令だけは、昔のまゝを襲用するので、即ちエンコルギヤ通せの令は、揚錨機用意と云ふ事になります。

(三〇)



(笠三 艦戦)

忙しい甲板上の作業は、航海の準備に過ぎません。そこでエンコルギヤ通せ！を以て、錨もまた譯なく揚ることゝなつて居ます。明くれば午前八時、嚙腕たる君が代の

奏樂と共に、神聖なる軍艦旗揚げ方の儀禮があつて、それより間もなく、

『總員上へ、出港用意！』

の號令が、副長の口によつて、強く艦橋上から下されるのであります。此の命令の下ると共に、總員は上甲板に疾走し、揚錨の配置に著くので、凡そ軍艦の出港用意ほど、勇しく壯快を感じるものは、他にありません。

折から艦長は雙眼鏡を手に、威風凜凜として、艦橋上に立ち、航海長は羅針儀を守つて、艦の進退に細心の注意を拂ひ、各分隊長等は、夫れぐ上甲板の要所要所に配置せられます、そして又副長は、艦長を輔けて號令のことを掌るのであります。

出港に際して、先づ第一に取除けるのは、舷梯とスウインギングブームとで、舷梯とは云ふ迄もなく、艦への出入の梯子、スウインギングブームは、碇泊中に艦の前部にありて、右左の兩側に長く突出して居る桁で、こゝから索梯子と索條とを吊して、ボートを繋ぐ用をしますが、是等は航海中には、無論無用の長物な

(三一)

ので、出港用意の令の下ると共に、直に一定の場所に收藏することとなつて居るのです。

されば艦に弱い人のことを、スウィングングブームだと嘲笑します、其の故は航海中にはいつも奥深く潜んで居て、入港用意と同時に、急いで顔を出すからであります。

又ジャコブスラダーに就いても、古い傳説があるので、何でもジャコブが昇天する時に、天まで届くやうな梯子を用いたさうで、それが今日のジャコブスラダーであると申すことです。

餘談はさて置き、上甲板に於きましては、皆々大忙を極めて居るので、續いて起る號令は、

『ケーブル縮め!』

と響きます。

此のケーブルと云ふのは、取りも直さず錨鎖のことで、上甲板前部にある先任

入港用意で
強くなる

ケーブル

ダビット吊
るす

分隊長は、此の令の下ると共に、揚錨機を回轉させて、漸次錨鎖を縮めるのであります。何しろ重い錨を揚げるのですから、分隊長の苦勞は一通りではなく、ケーブルが縮まると共に、艦は次第に錨のある位置に接近して、遂には垂直となり、それより更に錨鎖を縮めれば、今まで海底の泥土の中にもぐつて居た錨が、はじめて頭を擡げて、しづくくと揚つて来るのです。

さてかうして揚つて来ました錨は、ダビットに吊るし、臺の上に收めて、更に十分に固縛し、如何なる狂濤激浪が襲来しても、少しの心配もない様になります。艦が出港するのは、いよゝ之からで、艦長はじめ航海長、按針手、測鉛手等は、何れも所定の位置に著いて、悠々と巨艦を進行させます。

七 江田内拔錨

さるにても風光明媚の江田内に、三年間の勤學を終へて、昨日は御名代伏見若宮博恭王殿下の御臨場の下に、壯嚴なる卒業式を擧げられた、百十六名の未來の

★江田内拔錨

アドミラルは、練習艦隊淺間、吾妻の兩艦に配乗を命ぜられ、今日はいよいよ其の第一期の、近海航海の程に上ることになりました。あゝ愉快！ 大鵬は今、新たに羽を伸ばして、雲霧はるかに天翔らうとするのです。

併しながら此の人々も、漸く海軍初歩の學問を授けられたばかりで、まだ實地に就いての経験は、必ずしも深いとは云はれません。殊に今までは、俗世間とあまり關係の少い、塵外の別天地で、専ら修學にいそしんだだけに、世の中の有様にも、通じて居るとは云へません。つまり今度の航海は、一つには艦内の作業を修得すると共に、又他の一つには、各地の風俗人情を視察して之から世の中へ出る準備を、授かるためであらうと思はれます。

されば候補生としては、いやが上にも元氣を振り起し、艦の内外に論なく、熱心に作業に従ひ、雨降り、風荒るゝ夜には、怒濤とも戦はねばならず、時には困苦缺乏にも打ち克ち、そして他日一朝事ある時には、先に立つて皇國のために、力の限り盡さねばなりませんから、今よりして其の固い立派な精神を養ひ置くの

風俗人情

です。

候補生の責任のどんなに重いものであるかを、自覺したならば、恐らく一分一秒も、どうして安心して居られませう。さるにても十二月二十日、候補生の人々は、此の日まで、朝も夕も、學校の庭からも、温習所の窓からも、飽かず眺めくらしした江田内の島山に、もう別れを告げなければならぬのです。過ぎ來し三年の月日の、今となつては、却つて短いやうな氣も致しませう。あゝ此の人達は、もはや生徒ではありません。腕の金筋の燦として輝くを見、また帽子の徽章を見上げて、最早や昨日の人ではなく、包みきれぬ愉快をば、五體に包んで、今、江田内の島山に、別れを告げようとするのであります。

出港用意の信號と共に、上官や水兵が、それ／＼持ち場持ち場に立ち働くのも勇しく、やがて淺間は、先づ動き出し、ついで二番艦の吾妻も、また悠々として其の後に従ふ勇しさよ。

見渡せば空も清く晴れ渡つて、千波萬波遠くに連り、艦首に碎くる波の花や、

温習所の窓

原速八節

煙突から叢り出る黒煙の色にさへ、云ひ知れぬ嬉しい姿が見ゆるもの、況して此の名譽ある艦に乗つた若い人々の、其の嬉しさは如何ばかりでありませう。

艦は原速八節の速力を以て、悠々と進航して居ります。慈愛深き教官の方々や、又其の家族の人々は、小蒸汽を仕立て、今日の艦出を送られ、母校の生徒達も、數隻のボートに便乗して、あかぬ別れを惜まんと、津久茂の海峽近くまで、送つて来て呉れました、艦上の私達と、艦上の人々と、互に眺めつ眺められつ、ハンドレールに身をのり出して、

『帽を取れ！』

の令と共に、また互に打ちふる帽と帽、今は艦の進むのが、何だか却つて怨めしくもなりました。

嚴島神社

さるにても廣島灣内の浪の美しさよ、輝き目だつ宇品の町も其の後方に峙つ山も、折から初冬の日を受けて、さながら蜃氣樓の浮び出した如く、名高い嚴島神社の鳥居は、相憎く島山にかくれて、艦上の人々の目には入りませんが、此の邊

四百米突の距離

一帯は、海の色も山の姿も、晝にもして見まほしい好風景であります。

わが僚艦なる吾妻は、旗艦と四百米突の距離を保つて、同じ針路を取つて居ります。美しい海の上に、鮮かな大軍艦旗を翻して進む艦の、如何に勇しき姿せるよ、私達は甲板の上になちて、此の光景を眺め見渡すに、何とて快哉を叫ばずに居られませう。

ハ 士官次室

話は横道に外れます。軍艦の乗組員には、それぞれ室があります。艦長の公室は、ケビンと申しまして、中甲板の最後部にあります。此の室は最も華麗にして、且つ最も広い所であります。又副長や砲術長、航海長、水雷長、機關長及び各分隊長のためには、士官室と云つて、之もなかく廣くて美しい室があります。

所が中少尉及び同相當官のためには、公室と私室の兼用で、所謂士官次室と云

★士官次室

ふ、あまり廣くもない室があるばかり、こゝで食事もすれば、事務も執ると云ふ次第、それが大尉以上になりますと、各自に私室が貰へますから、身の廻りの物品も、ちやんと一定の箆筒の中へしまつて置くことが出来ますし、寝る時も矢張り私室のベツトに横はり、舷窓から外洋の景色を見ることが出来ますが、士官次室には、私室と云ふものはありませんから、中少尉及び同相当官は、一般水兵と同様、吊床の中で寝なければなりません。

私は旗艦淺間の士官次室で、約一ヶ月ばかり暮しました。随つていくらか次室の気分を味ふことも出来ましたから、こゝには一寸其事を記して置き度いと思ひます、蓋し兵學校卒業後に、少尉に任命された人達は、誰でも一度ならず二度三度まで。此の士官次室の人とならねばならぬのです。

さて午前の六時と云ふに、下甲板スチャレージの吊床を出て、衣服を改め、洗面して、草履のまゝで、中甲板中央部の士官次室へ来て見れば、細長い卓子の上には、もうちやんと白布が敷かれてあつて、箸だの皿だのが、行儀よく列べら

れ、ポイーが



(室 煙 喫 の 兵 水)

★士官次室

『食事よろし』
と、傳へて居ります。

其のうちにだん／＼人員が揃ひ、甲板洗ひに従事した人は、膝から下をまくつて、洗足のまゝで、威勢よく飛び込んで来て、

『ポイー、飯食はセツ！』

などゝ怒鳴ります。イヤ怒鳴るのではない、之が此の人達の言葉で、如何にも生々した氣持のよい言動が、私達の様な部外の者の眸を見張らせます。

朝の食卓は、比較的簡素であります、それでも彼等は、平氣で五六杯を平げま

所朝食後の
士官

す。中には菜が足らぬので、
『ボーイ、卵を焼いて来い』
と、命じたりする人もあります。
朝食が済みますと、間もなく四分五裂して、水雷艇の指揮に行く人、當直に立つ人、教練に出る人など、軍艦では、此の若い士官達に對して、一刻の餘裕すら與へませんから、新聞を読む暇も、手紙をかく時も、日中は殆ど無いと云つてもよろしい。

日曜の気分

けれども日曜日などには、大抵午後には教練がないだけに、餘程ゆつたりした気分が漂ふので、毎土曜日には、艦内の大掃除があつて、次室は次室付のボーイの受持で、棚から舷窓から床まで、綺麗に掃除を致します。又其の翌日の日曜には朝から例の卓子の上に、海老茶色の羅紗布が被はれて、一方では蓄音機がいろいろの妙曲を演ずると云ふ有様。
久しぶりに故郷への手紙を、セッセと書いてる人もあります。次室會の下相

日のんきな一

談をしてゐる連中もありません。長椅子によりかゝつて、軽く華胥の國に一遊を試むる人もあります。或は古い新聞の綴込を引張り出して来て、何かしら熱心に讀む人もあると云ふ風に、此の日ばかりは、餘程暢氣であります。が併し日曜日だからとて、全然遊んで暮すことは出来ません。どうかすると其日に、重要な教練のある如きことも、決して珍しい出来事ではないからです。

こゝに此の人達の最も愉快とする所は、所謂士官室會なるもので、つまり次室の懇親會を開催する事でありませう。勿論此の場合には、士官室の方からも、客分の人に加はれることもあれば、場合によると艦長か副長か出席して、若い者達と同じ様な気分になつて、愉快に一夕を、大に飲み、大に語る如きこともないではありません。

次室會

横須賀、吳、佐世保と、さう云つた軍港へ、艦が入りますと、殆ど必ず次室會が催されます。幹事に當つた者は、豫め會費の豫算を立てる必要がありますが、其の交換される言葉は日本語でも外國語でもない、海軍士官通有の隠語だけに、

側で聞いて居ても、何のことやら少しも判断がつかないのです。

若い士官達はよく飲みます、痛快と云ふ言葉がありますが、全く此の人達は痛快に飲むのです。尤もそれ程盛んに飲み。よく騒ぎ廻りながら、午後十一時の、最終の定期艇で、歸艦する頃には、もう酔つた様な顔も見せず、平氣な風をして居りますが、それで翌日は又朝早くから、平氣で部下の兵員を統督する手腕力量に至つては、全く人間はなれがして居ります。

イヤ人間はなれがして居ると云へば、此の人達は、普通世間を娑婆々々と云つて居ります。そして世間の人をば、娑婆の人と呼んで居ます。部外の者が聞きますと、おかしな事の様には思はれますが、あながちさうでもありません。と云ふのは、此の人達は實際娑婆氣がないので、全く浮世離れがして居ます。陸上ではあります、殆ど海の上も同様の、世間から遠ざかつた江田島で、専らスバルタ式の教育を受けて、漸く金筋入りの士官とはなつたものゝ、確乎たる精神教育は、其の根ざしが深いために、一人前の立派な男になつても何所かにのんびりした所

娑婆の人

スバルタ式
教育

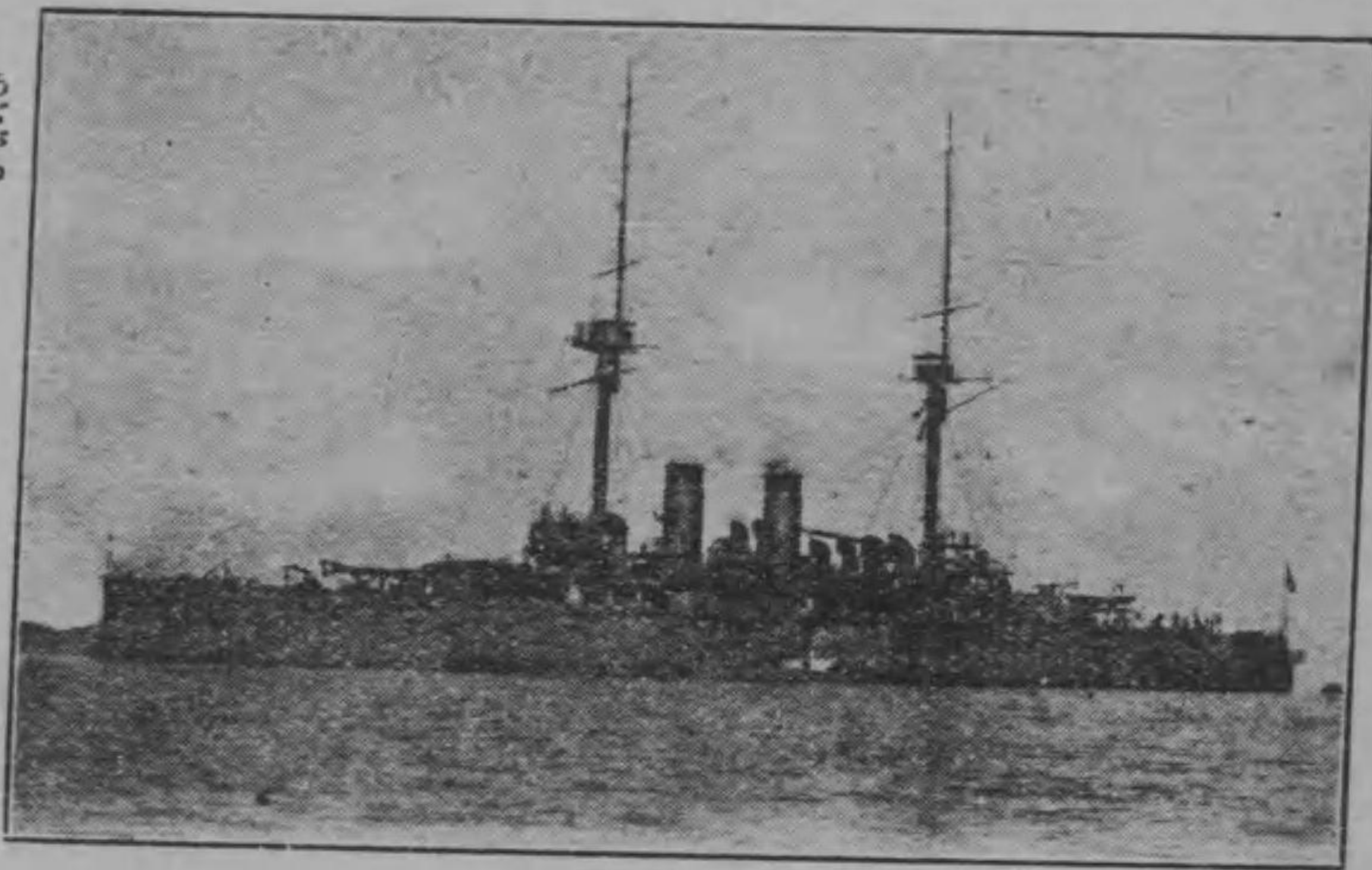
があつて、生活上の煩ひが無いだけに、世間離れをして居るので、決して悪い意味の言葉ではないのです。

私はかう云ふ連中と、可なり長い間共同生活をして、再び黄塵萬丈の都門に立ち歸つてからは、俄かに周囲の煩ひの多きに苦しみました、即ち二度目に所謂娑婆へ出て来て、はじめて海上生活の有難味が、つくづく思はれてならず、折角軍艦で太らせて貰つた體が、二三月の後には、げつそり目方が減つてしまつたのです。

話が横道へ外れましたが、航海中の次室は、可なり遅くまで賑かたで、艦内の電燈も、碇泊中は十一時を限りとして、一時に消燈する規定でありますから、其後は陰氣な蠟燭を用ゐる外ないのですが、航海中は之に反して、終夜煌々たる電氣がついて居りますので、非番の人達は、まことに愉快なる談笑裡に、時を過すことが出来ます。

『さア今度佐世保へ入港したら、早速例の次室會を催さうでないか』

海上生活の
有難き



(士 富 艦 防 海)

『味粥であります』

(四四)

と、A中尉が口を切りますと、B少尉が、

『左様、アルハの樓上で痛飲してから、もう半年以上になるからなア』

と答へて居ます、其所へ前艦橋から降りて来た航海長付S少尉が、身を慄はせながら、

『オ、寒い、佐世保入港は明日の午前八時だ、何か旨いものでもないのかなア、オイ、ボーイ、今夜の夜食は何が出来る？』

聲に應じて出て来たボーイは、恭しく手を下げて、

S少尉は顔をしかめて、

『何だ味粥か、汁粉でも作ればよいに……』

などと云ふ罪のない問答が、交換されます。

一體航海中には、初夜巡檢が済んでから、即ち午後九時と云ふに、一般に夜食が出ます。夫れを又非常に楽しみにして居る連中が多いので、こゝらも娑婆氣のない無邪氣な所でありませう。

午後六時になりますと、次室備へ付の黒板に、當番の食卓長が、『今夜夜食九時』などと書いて置きますので、其の夜食には味粥、饅頭、汁粉と云ふ様に、それ／＼異つたものを食べさせる事となつて居ります。

併し夜食の出る晩、即ち航海の夜は、大抵艦がガブリしますので、私は最初のうちは、此の夜食黨のお仲間外れをして、巡檢がすむと間もなく、吊床の中へ潜り込むのを、殆ど規則のやうにして居ましたが、日を経るまゝに次第に馴れて、可なりひどくガブル時でも、平生あまり好まない饅頭を、二杯位平氣で平げたこと

★士官次室

(四五)

★海上生活

(四六)

もありません。其様に海上生活は、食慾を増進して、健康を保つ利益のあるものです。

勿論海上の生活に経験がないからとて、必ず酔ふと定つたものではありません。兵員の中にも士官の間にも、航海中は意氣のあがらない人が、稀には無いこともありません。殊に艦長室や下甲板の寢所などは、氣味の悪い程大動搖を感じましても、浅間の次室は丁度艦の中央部に位置を占めて居るだけに、比較的抵抗力が強く、随つてガブリ方が少い様に思はれました。

巡検をすまして来た甲板士官が、カアテンの間からヌツと首を出して、『今夜はなかく、ガブリさうだよ、上甲板の前部は大洪水だ』

と、こんな話をして居る時でも、その上甲板や艦橋に立つて、夫れぐと與へられた任務に服して居る士官、兵員の勞苦は、また大抵のことではないのです。

九 多忙なる艦内

波を蹴つて進行する艦を、遠くで眺めたり、或は碇泊中の軍艦を外部から見ると、艦内はひっそりして、さまで忙しい仕事のある様にも思はれませんが、一度足を上甲板に運んだならば、上は艦長より、下は一兵卒に至るまで、其の多忙さは、目の廻る程のものであります。

陸上の一大工場よりも、猶複雑して居る軍艦内は、整然として一糸亂れず、號令一度下るや、如何なる運動作業も、瞬間に成し遂げられますのは、數百の人々が、それぐ自分の持ち場を固めて、寸刻の油斷もしないからであります。

實際かう云ふ風でなければ、一朝有事の場合に當つて、何の役にも立ちません。事ある時に遺憾なく其の目的を遂げようとするには、平素の訓練が何よりであります。外國の軍艦の例はいざ知らず、日本の海軍では、平時も戦時の覺悟を以て、奮勵事に當つて居るのですから、見るからに其の作業が忙しく、且つ活潑の氣に充たされて居ります。

全體軍艦内の生活は、比較的少數の人員で、大きな艦體を活用するのであります。

★多忙なる艦内

(四七)

すから、巧みなる分業法が行はれて居ます。例へば大砲に著くもの、水雷を掌るもの、機關部の事に従ふ者、其他信號やら、當直やら、數へ来れば實に細かに分たれて居ますので、早朝から夜に入るまで、殆ど寸毫の餘裕もなく働きますので、されば若し外部から、艦内に入り来る人があつて、此の多忙なる作業を實地に目撃したならば、只啞然として、何の言葉も出ないであります。

10 甲板洗ひ

軍艦の甲板は、誰も知つてゐる通り、質の堅い木を張り合せたもので、其の継目には、ビッチと申して、丁度コールターを固めたやうなものが塗つてあります。

それ故どんなに烈しい雨が降りましても、又大きな濤が来ましても、水の漏つたりするやうな心配は更にもありませんけれども、併し其の手入れを怠る時は、板と板との隙間が出来たり、ひびが入つたりして、早く破損する恐れがありますか

ら、軍艦では武器の手入れと同様に、甲板を大切にすることも一通りではありません。

一體どこの家でも、毎朝必ず座敷を掃いたり、縁側に雑巾をかけたたりして、綺麗に掃除をすることですが、軍艦もそれと同じ事で、吊床を收めると同時に、甲板を洗ふこととなつて居ります。夏は兎も角嚴寒の時には、身を切るやうな潮水を流すことですから、随分冷たいには相違ないのですが、併し命せられた業務に忠實なる水兵の、何とて之を意としませう。各員共に跣足のままで、作業服を身に纏ひ、威勢よく洗ひ清め、拭ひ去るので、何しろ大勢の者が、力に任せてやる事ですから、後は靴のままで歩くのが、惜いほど綺麗になります。

尤も軍艦の甲板は、たい綺麗にするだけが決して其の目的ではないので、實はかうして毎日水にあてませんでは、前にも云つた如く、隙間が出来たり、ひびが生じたりして、永く現状を保たせることが困難ですから、それで年が年中、毎朝必ず一度宛は、此の大仕掛の作業をしなければなりません。即ち諸君の家の雑巾

かけとは、聊か其の目的を異にして居る譯です。

二 有明灣入港

さる程に本艦隊は、江田内から大隅の有明灣まで、航程實に二百三十浬、八節の速力で、一晝夜と五時間の豫定で進航致しました。此の日の日没時に、一同が上甲板に整列して、勇壯なる軍歌を歌ひました。試みに其歌を記して見ませう。

軍艦マーチ

守るも攻むるも黒金の、

浮べる其城日の本の、

御國の四方を守るべし。

眞金の其艦日の本の、

仇なす國を攻めよかし。

石炭の煙はわたつみの、

龍かとはかりなびくなり。

彈丸うつ響はいかづちの、

聲かとはかりとよむなり。

萬里の波濤を乗り越えて、

御國の光りを輝かせ。

何と勇しい軍歌ではありませんか。副長

が指揮者の役目で、候補生も士官も水兵

も、殆ど全員が、左右兩舷に分れて、一句

づゝ歌ふので、さしも一萬噸に近い軍艦

が、其のすさまじい足踏のために、ゆらゆ

らと揺ぐばかり、しかも此の歌に答ふるの

は、夕刻から俄かに威力を加へ來つた波のひゞきでありました。

指揮者



(業作)

見上ぐれば空には早や星の二つ三つさへ出で、私達の行手に、希望の光りを投げて居ります。天候は夜に入ると共に、急に變調を呈して、冷たい雨を降らせました。併し航海者が比較的難所とする豊後水道を通過してからも、艦體には、殆ど動搖を感じません。勿論こゝからは、海も外洋であります。

夜の明けると共に、左舷側の舷窓から眺むると、見渡す限り島もなく、煙霧渺渺として、雲は低く垂れ、浪のうねりも緩く大きく襲うて來ます。其中を何に狂ふか一群の海豚の、頭を現はし背鰭を出し、或は尾を以て強く水を跳ね飛ばすなど、千態萬狀を極めて、我艦の艦側に附いて來ます。

廣き大洋上に於て、かう云ふ海魚の跳り狂ふ有様を、目のあたり見るのは、海上生活の人だけが受くる樂みであると云はねばなりません。少年諸君！海は決して怖い所でもなく、又心配すべき點もありません。萬噸の巨艦は、いかなる大濤に遭ふとも、斷じて覆へる恐れはないのです。いざ來れ海國日本の若き人々、廣き海洋の波の上に。

さて右舷には雲の如くに、九州の陸地が見えて居ります。四時すぎになつて、はじめて左舷に島山を認めましたが、それは日向の都井崎でありました。私達はかうして江田内から、だん／＼西南の方へと轉じて來ましたが、殊に此の附近は、暖流の通路に當つて居りますから、氣候の暖かさは、東京邊の三月末頃の如く、外套を用ゐたり、火鉢を要する様なことはありません。

本艦隊は、午後五時過になつて、無事有明灣に入港しました。之より先加藤(定吉)中將の率ゐる第二艦隊が、こゝに入港して居りましたので、兩方の旗艦から禮砲の交換があつて、私達の氣を引き立たせました。空はだん／＼晴れ模様になりました、見渡せば、前面には、志布志の町が、松林の間に隠見して居ます。右舷の枇榔島は、全島熱帯植物の繁茂に任せた無人の島です。思ふに南洋から來る潮流と共に、彼の地の植物の果實や種子が漂ひ著いて、こゝに茂つたものでありませう。私達は此の神仙島かと思はれる島を、目の前に見ながら、種々の操練に、約一週間はかり碇泊するのであります。

三 枇榔島探險

蒲葵島

枇榔島は、有明灣の灣口に峙つ小さい島で、一名を蒲葵島とも呼びます、固より無人の孤島ではありますが、恰もそれが南洋から来る暖流の衝路に當りますので、内地ではあまり見ることの出来ぬ珍奇な植物が、晝猶くらき迄に繁茂して居ります。

私達は有明灣にあつて、淺間の後甲板から、いつも目の前に近く見ゆる此の小島に、憧憬の眼を見張つて居りました。鷗ならば空を翔けて、行つて見るものを、魚ならば水を泳いで達するものと、明け暮れ變る島の姿に、どんなに大きい希望を有つたでありませうか。

十二月の二十七日は、空も心地よく晴れて、室内の温度は、七十度にも昇りました。藍を融かしたやうな海には、一波起らず、強ひて鷗が其の海を掻き亂さうとする位、淺間は静かな其の海の上に、浮城の如き姿して、泰然と錨を下して

居ます。

高千穂の峯

午後一時頃、艦内の重なる人々、即ち艦長、機關長、參謀、水雷長、軍醫長、主計長などと共に、撓艇を操つて、數日來楽しんで居た枇榔島へと志しました。見返る彼方に峙つは、雲に聳ゆる高千穂の峰、群山を威壓する趣が一入高崇で、薄い白雪を戴いて、眞晝の日に輝く美しさは、何に例へん様もありません。

かゝる間に私達の乗つた撓艇は、はやくも島の沿岸に到着いたしました。固より巉岩絶壁の間に、波は猛獸の吼ゆるが如くに、荒れ狂ふことゝて、殆ど艇を寄せつけることすら出来ません。

そこで已むを得ず、艇と沿岸の岩との間に、かねて用意して来た、板橋を架け渡して上陸しましたが、其の危険さは又此の上もありません。萬一にも足を踏み込らせようものなら、それこそ最後、荒れ狂ふ波の中へ轉落して、角張つた岩で怪我をするか、さうでなかつたら、體中冷たい水につかる恐れがありますので、餘程身の軽い人でも、此の一枚の板橋を渡るには、戦々兢兢たる有様であります。

大いなる軽石

した。
 さて上陸してみますと、一面の砂濱で、所々に大きな岩があつて、それには豆牡蠣が隙間もなく附著して居ます。又此の砂濱には拳の大きさある軽石が、眞白にさらされて、見渡す限り散り布いて居ります。これは、全體どこから来たものか、問ふまでもありません。霧島山から吹き出したものが、流れ／＼して此の濱に漂ひ著いたので、一寸手に取つて壓して見ますと、譯もなく碎けて粉微塵になるので、云はゞ石の泡の如きものでありませう。

島の探検

さて撓艇をば、比較的安全な、大きな岩の間に繋いで置いて、いよく島の森林を押し分けて探検に着手しました。探検と云へば、聊か大袈裟のやうですが、事實私は其の考へでやつたのです。勿論島には、道らしい道もなく、人も住んでは居りません。只時々小鳥が奇聲を發して、枝から枝に飛び移るばかり、満山の老樹は、殆ど其のすべてが、私達の目には、目新らしいものばかりです。最早や身は、日本の内地に居るとは思はれず、遠く數千里外の、話に聞いて

命の綱

ある南洋の孤島も、恐らくこんな所であらうとさへ思ひました。
 土の少い岩や石の多い所に、しかも勢よく諸種の植物が茂つて居るが、それ等は何れも太い根を、土の上に露して居ますので、之を命の綱として、だん／＼上へと攀づる仕末、何の事はない器械體操でもして居るやうなものです。

所がだん／＼手が疲勞れて來ますと、忽ち足の方へ力を入れるから堪りませぬ。土や石がズル／＼と下つて、五六間づゝ押し返されませんが、其の都度屹度掌や腕に、蚯蚓ばれが出来たり、すり創を帯びたりします。併しこゝまで來ながら、頂上を究めることも出來ず、又何も採集しなかつたとあつては、後々までの名折れだと思つて、又もや勇氣を出して攀ぢ登る苦しさ。

かう云ふ有様で、島の頂上へ達する迄には、全く左右を顧るの餘裕もなく、體を安全に保つことにはかり氣を取られて居ましたが、さていよく頂上へ來て見ますと、森々たる木立を距て、前にも後にも、漫々たる海の水が湛へて、しかも其の反對の側は、立壁と云はうか、石堀と云はうか、足のかけ場所もない様

頂上の模様

な、急斜面になつて居て、一步足を踏み違へようものなら、どうしても下まで眞倒様に轉落するの外ないのでした。

私達はさう云ふ危険な頂上に、僅かに一路を求めて、植物の採集を試みましたが、何れも平生見なれぬものばかり、それが何と云ふ名の植物であるか、又何の科に屬するものかと云ふ事さへ、明かにすることが出来ないで、今少し此の方面の知識があつたらばと、甚だ残念に思つたのでありました。

唐木屋の店先では、よく見かけますが、本物の檳榔樹が、しかも亭々として、自然に繁茂するばかりか、その大きなものは、立ち枯れになつて、木と木との間に横はり、芽生えは足の踏むに委せて、地面も見えぬ程に、大きな葉を擴げて居りませけれども、之等の芽生えは、殆ど親木の枝葉に遮られて、日光を拜むことが出来ませんので、葉も青白く、見るからに弱々しくて、日蔭の草らしい様子をして居ます。

聞く所によると、此の島に生えて居る植物は、他へ移植すると直ぐに枯れてし

まふさうで、對岸の志布志まで持つて行つてさへ、もう成長しないと云ふ事です又此の島には、檳榔樹の大木がありまして、其の一本もで非常に高價なものですから、今では島全體が保護林として、猥りに之を伐り出す者は、嚴罰に處せられる事と成つて居ります。

で土地の漁夫などは、常に盜伐者の監視をして居て、見つけ次第、官に訴へて出ます。さすれば其の發見者には相當の賞與があるとかで、随つてそんな不心得者も、殆ど今は無くなつて、珍奇の樹木が、安全に成長を續けることが出来ま

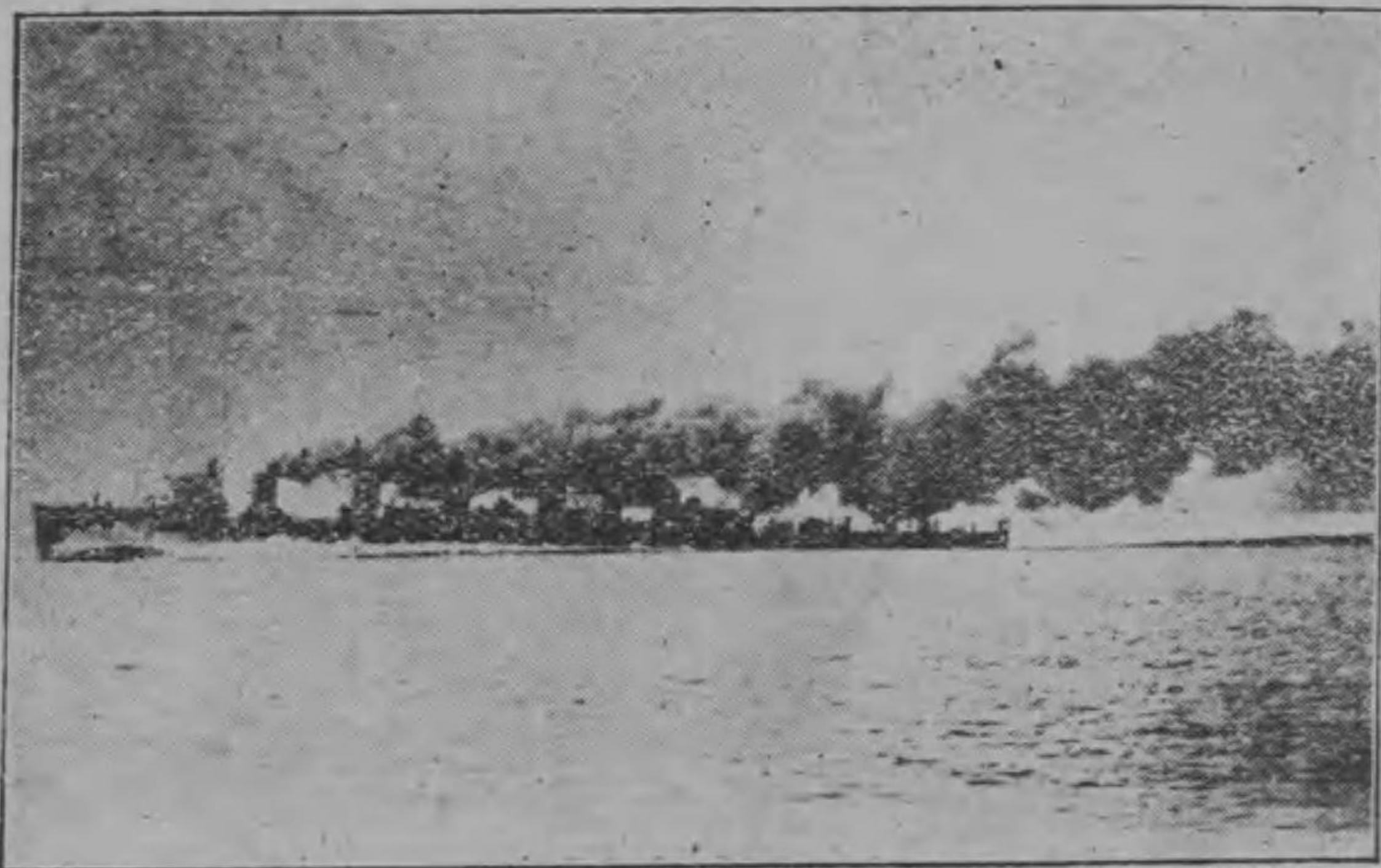
す。

私達は、道のない所に、強ひて道をつけて、頂上の細徑を危みく／＼辿りました。大木の枝には、風蘭と云ふ珍しい植物が寄生して居ました。之も元は満山の樹木の枝毎に附著して、綺麗な花を、人に知られず咲かせて居りましたのが、一株何圓と云ふ價でいくらでも賣れて行きますので、吾もく／＼と取り去つたために、今では餘程熱心に見歩かないでは、容易に發見することが出来ません。

島の西方に當る中腹の所に、一つの小さな祠がありました。いつ頃建つたものですか、拜殿も鳥居も、潮風に曝されて、眞白になつて居ますが、不思議や今朝捕つたばかりの、うるめ鰻が三尾、竹の小串に貫かれて、拜殿の欄間から吊してありました。

みれば其の鰻は、如何にもよく太つて、うまさうでした。推察する所大方漁夫が、今日の網にかゝつた鰻の中で、一ばん大きいのを選んで、神様にさし上げたのでありませう。固より洋中の一孤島とて、狐も狸も棲んでは居りませんから、神様にさし上げた鰻は、かうして乾からびてしまふでせうが、私等の如くに、長く海上に生活しながら、新しい鰻を口にするこの出来ぬ者には、此の献上物を見て、思はず涎を垂らしたのも、口ぎたないためばかりではありません。

さて又此の祠の周囲には、蓬々たる雑草が茂り合つて、足の踏み立て所もありませんが、其の草の中から、大きな蘇鐵が、ニヨキ／＼と太い幹を突き出して居る所など、どうしても他では見られない景色です。



(一 等 運 送 船 海 風)

祠から麓までは、太古の人が造つたかと思ゆる、不細工な石段が、凡そ五六十段もあります。漁夫は其所を平氣で登つたり、下つたりするのでせうが、私達には此の石段を下ることが、非常に困難でありました。なせならば石段のある所に限つて、木が伐り拂はれてありますから、全く手ばなしの曲藝を演じなければなりません。所が此の石段には、圓い石やら稜の多いのやらがあつて、それがツル／＼と迂るので、危く前へのめりさうになるからです。

いろいろの採集を試み、暗い森を抜けて、再び撓艇中の人となりました。

三 軍艦旗上げ方

神聖なる軍艦旗

軍艦のうちで、最も神聖なものは何でありませうか、それは云ふ迄もなく、軍艦旗であります。軍艦旗は軍艦の碇泊中には、必ず毎日午前八時を以て、掲揚する規定でありまして、此の間には、君が代の曲を吹奏することとなつて居ます。軍艦旗掲揚の際には、司令官艦長はじめ、各士官一同が、いづれも後甲板上に整列して、此の神聖なる旭日旗に對し、恭しく敬禮を行ふので、其の間は艦内の如何なる場所に居ようとも、何人も直立不動の姿勢を以て、静肅を守らねばなりません。

毎朝八時五分前になりますと、番兵が、隅から隅まで、透き通る様な美しい聲で、

『軍艦旗あげ方——五分前』

と呼び歩きます。そこで急いで後甲板に上つて見ますと、艦尾の旗竿の下には、一人の兵員が旗索を執つて、命令の下るを待ち、數人の喇叭手は、此の旗竿に對して、磨きすました喇叭を握つて、さながら木像の如くに立つて居ます。かくて八時になりますと、

『揚げ——イ』

時鐘番兵

の號令と共に、時鐘番兵が、カンカン！ カンカン！ と、時の鐘を八つ打ちます。國歌の曲は喇叭として、廣い海に響き渡り、それにつれて鮮かなる軍艦旗が、悠々としづかに展べられ、曲の終ると一致して、高く竿頭に翻りつゝ、四海を雄視するので、其の壯嚴さは、思はず涙がこぼれる程です。

今、朝日は東の海を出て、清鮮なる空氣中に、其の温いめぐみの光を放げ下します。私達は、陛下の御艦の上に立つて、神々しい軍艦旗の掲揚を拜して居ります。あゝ之が人の手によつて、開展されつゝあらうとは、誰れか又思ひ及びませう。正に、國を護りの現神が、朝毎朝毎こゝに上りまして、其の尊い神の御手により、我が艦の御旗は、自らに展べられるのではありますまいか。

★軍艦旗上げ方

よし如何ばかり、濁つた心のある者とても、此の軍艦旗掲揚の刹那には、云ひ知れの崇高の念に打たれて、身中一點の穢れをも止めないであります。かくて尊い御光の下に、朝のつとめは始められるのでありますが、由來我が海軍々人の、一般に天空快調の氣象を帯びて居るのは、實に斯くの如くにして、日毎日毎に、美しい廣い心を養はれるからであります。

☆海上生活

(六四)

四 志布志の一日

南洋の熱帯地方から、押しよせて来る、黒潮の影響を受けて、有明灣の冬は、まことに暖かでありました。時は十二月の末であるのに、漁民の子供等は、大抵單衣か、又は袷一枚と云ふ様な、薄著で以て過して居ります。

艦首のシエルターデツキに立つて見ますと、志布志の町の炊煙も、手にとるばかり近く見え、又権現島と云つて、やゝ其の形が相州の江の島に似た、緑の色あざやかな小島も、誰れを招くか、呼べば答へさうに眺められ、海岸に近く連互す

る山々を距て、遙かに霧島山の高峰が、僅かに雪を頂いて、嶄然として群山壓する如くに見ゆるのも、一段の好景と云はねばなりません。

又艦尾右舷の後方には、枇榔島(前節参照)と稱して、普通の地理書には、あまり記されてはありませんが、學問上から云へば、中々貴重な小島が、美しい波に洗はれながら、廣くも人に知られないで、暖い海水中に峙つて居ります。鬱蒼たる熱帯性の樹木が、全島を被うて、海のみどりとその色を競ふ様は、見る目も心地がよろしい。

志布志の町には、其の成績に於て、縣下第一と稱せられる中學校もあります。又島津家の菩提所もありますが、其の交通機關は、殆ど見る影もなき舊式の圓太郎馬車によつて、十里を距たる都城と、國分に通ずるの外ありませんから、隨て市況はあまり振ひませんが、それでも漁業によつて得る利益が多いので、早朝から正午頃にかけては、沿岸一帯の砂原は、鱈や鯖の山を築く有様で、其の壯觀は、一寸他では見ることが出来ずまい。

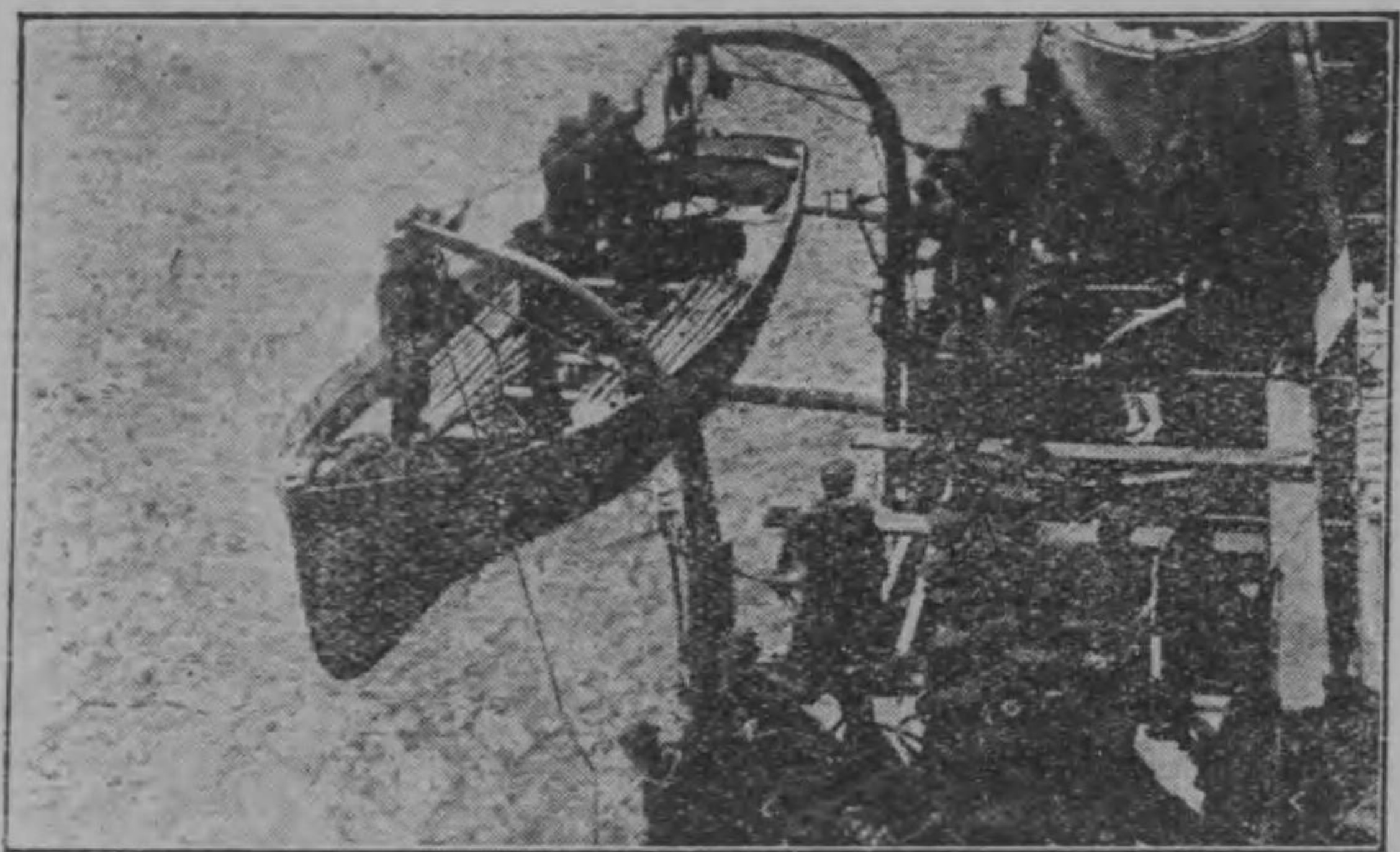
★志布志の一日

(六五)

★海上生活

即ち此の地の住民は、専ら夜の間に海へ出て、網を引いたり、釣を垂れたりし

て、夜の明けると共に、陸岸に歸著するのを、殆ど不休の業務として居るのであります。



(方し下ト一ボ)

また此の町の或豪家の庭には、正月早満開すると云ふ、世にも稀なる櫻の木があると言きましたので、或日上陸の序を以て、彼方此方と捜し歩き、やつと夫れを見つけ出しましたが、残念ながらまだ蕾が固くて、急に開きさうもありませんでした。尤もどの家の庭にも垣根にも、柿や蜜柑の類が、眞赤に染め出されて、春の花より美しいのが、殊に私達の目を喜ばせて呉れ

冬の櫻

ました。

所が此の漁村に来て、先づ第一に不思議に思はれるのは、俗に志布志の鰯目と云ふ通り、漁民の子供等の殆どすべてが、赤い目をして、一人として清々しい所謂明眸の子の居ないことです。

これは思ふに此の土地が、前にも云つた如く、あまり世すれて居ないために、衛生思想が遅れて居て、トラホームの如き恐るべき流行性眼病が、盛んに猛威を振ふからのことでありませう。

蓋し眼病に限らず、一般の流行病や傳染病も、公德心の重んぜられ、衛生思想の進歩した都會ならば、思ふまゝに、其の手足を伸すことも出来ないのですが、かう云ふ土地へ入つたが最後、勝手氣儘にはびこることが出来るのでせう。で志布志の漁村には、たゞ眼病ばかりでなく、他にも危険な傳染病が、方々に頭を擡げて居ましたので、我が艦隊も此の土地では、生糧品の積込みも、兵員の上陸も禁止して、只遠巻にして居ただけです。

志布志の鰯目

傳染病

一五 権現島の口碑

志布志の海岸に、一つの美観を添へるものは、権現島であります。其所には又面白い口碑が残つて居ますから、序にこゝに記して置きませう。

むかし、志布志の漁師の家に、一人の美しい娘がありました。漁師の娘と云へば、先づ大抵は見苦しい女ときまつて居ますのに、これは又海邊には稀な美しい子で、それこそ竹取のかぐや姫か、三保の松原の天人の、生れ變りかと思はれるばかり、親爺は頻りに鼻を高くして、獨り得意になつて居りました。

さア斯うなると又、同じ漁師の仲間で、いろ／＼と噂を立てるもので、或男の云ふのには、

『なんぼあの子が美しいからとて、まさか権現島の天女の像には敵ふまい』

と、一寸冷かしました。すると親爺はこれを聞いて、一時は向ッ腹を立てましたが、併し考へて見れば、どうやら理のある言葉ですから、ちつと腕組みをして

考へました末が、恐いことを工夫して、ボンと横手を打ちながら、
『ウン、よい事があるぞ、かうなつたらもう仕方がない、あの天女の顔を燻してやらう、あれさへ見にくい顔にしてしまへば、最早や天下に誰れ憚る者もないのぢや』

と、流石我が子の可愛さに、あさはかな智慧を絞つて、親爺は夜更けてから、たゞ獨りで権現島の険しい岩を攀ち上り、頂邊にある御堂の中の、天女の像を引きすり出し、其の顔をば青松葉で、ドン／＼燻しましたので、今までは雪よりも美しかつた天女の顔は、墨よりも黒くなり、逆も再び見られぬ態と交りましたから、親爺は之を見て喜ぶまいことか、

『ヤレ／＼嬉しや／＼、これで先づ安心した、己の娘は矢ッ張天下第一の美人であるツイ』

と、夜明けぬうちに、獨りテク／＼我が家へ歸つて来て、さて娘の顔をよくよく見るのに、之はしたり天罰觀面、先刻までは花を欺くほどの美しい顔が、見る

からに氣味の悪い醜婦となつて居ましたので、流石の漁師もアツとばかりに吃驚仰天、二の句も出なかつたと云ふことです。

志布志の町に、今も目の赤い子供の多いのは、やつぱり天女の恨みが、まだ解けないためであらうと、今でもさう思つて居る者があると聞きました。

一六 吊床の夢

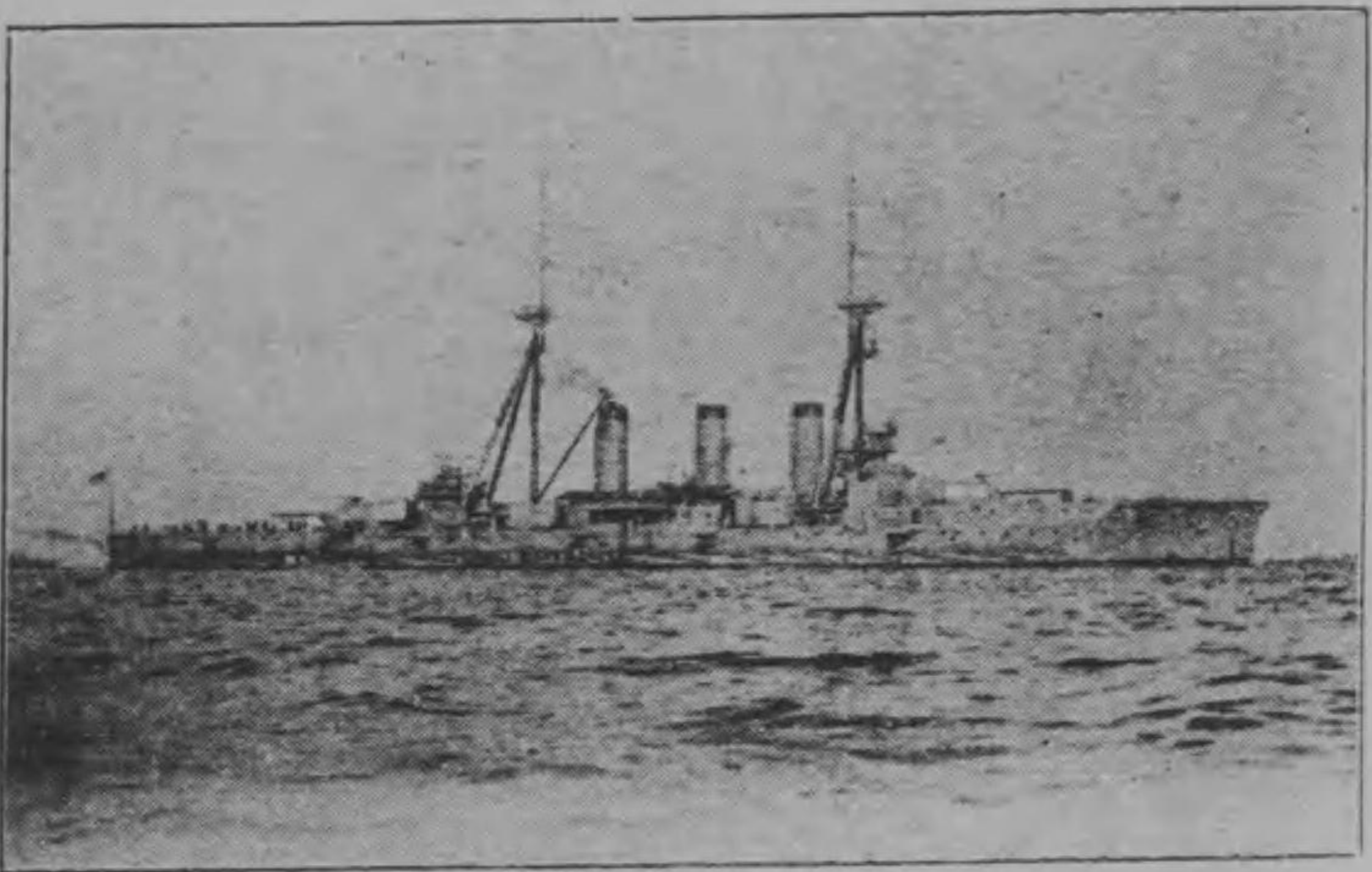
士官次室の人々が、一日の疲れを休めるべく、楽しい夢を結ぶ所は、やゝ後部に偏した下甲板にありますので、之をスチャレージと呼ぶのは、其室が舵取室になつて居るからであります。

浅間のスチャレージの鐵壁には、大きな弾痕が残つて居ます。勿論今では少しも解らぬ様に修理が施してありまして、此の名譽ある戦傷を、永久に記念すべく、特に其の旨を記してありますが、聞けば日露海戦の、しかも有名なる日本海海戦の時、我が浅間はこゝに一弾を蒙つたので、見る／＼うちに浸水して、一時

舵取室

防水工事

吊床



(馬鞍 艦 戦 洋 巡)

は頗る危急に陥つたのを、艦内必死の大活動で、首尾よく防水工事が出来たと云ふ、本艦にとつては、永世不忘の絶好記念物であります。

少年諸君！ 諸君はまだ吊床の中で寝た経験がありますまい、軍艦では中少尉、及び同相当官も、候補生も水兵も、すべて吊床の中に寝るのですが、誰れでも最初は少からず困らされると云ふことです。

一體此の吊床なるものは、カンパス製の至つて丈夫な物で、兩端には十数本の麻紐を通し、これを一括して天井から吊すので、下方の裏面には、黒い丸の中に、『い』だの、『ろ』だのと、一々記號をつけ

海軍毛布

て、一目見ただけで、誰れの使用するものかと云ふことを、見解けるやうにしてあります。

又内部には、藁蒲團の上に、海軍毛布と云つて、錨の印のついた毛布が一枚布かれ、上著は毛布二三枚で、嚴寒を凌ぐのでありますが、勿論陸上の普通の家とは違つて、隙間を漏れ来る風もありませんから、寧ろ暖か過ぎて汗ばむ程であります。

夕方の軍事點檢が済んで間もなく、吊床はもう定めの場合に吊られます。中甲板の通路などは、所狭きまでに並べられますから、夜中其の下を通行するには、餘程注意をしなければ、ゴツン／＼頭をうたれるばかりか、折角安眠して居る人を驚かす様なことになります。

さて吊床に、身を横へようとするのは、恰も水上に浮んで居る小艇に、無心の小兒が乗らうとするのと同じく、最初はどうしても、思ふ様に乗ることが出来ません。例へば片足かけて、布を手で抑へますと、スーツと彼方へ移動します。ウ

吊床ののり方

ンと力を入れると、ブラブラ動きます。強て一氣に飛び込まうとすれば、天井が低いからゴツンと頭を打つと云ふ始末、之に乗るのは一寸した呼吸で、何の造作もありませんが、慣れるまでは始末に負へない代物です。

そこで先づ腰を横にして、半ば體を入れた機會に、逸早く腹部以上を横たへれば、吊床が安定しますから、後でゆる／＼足を伸ばして、毛布を著ることも出来ますが、之は少くとも一週間の練習を要するのです。尤も一旦寝たが最後、普通の床よりも、遙かに寢心地が宜しいが、たい仰向いただけで、少しも寢返りの出来ぬのが、聊か苦しい様なものです。で若しも忘れて寢返りをしやうものなら、忽ち平均を失して、毛布も體も鐵板の上へ轉落して、それこそ大怪我をしないとも限りません。

一七 溺者救助教練

甲板又は外舷で、作業に従事して居る者が、風波や其他の事故のために、過つ

て海中に墜落することがあります。さう云ふ時には、何を措いても、落ちた人を救助しなければなりません。溺者救助教練が時々行はれるのは、全く此の不時の出来事に備へる爲に外ならぬのであります。

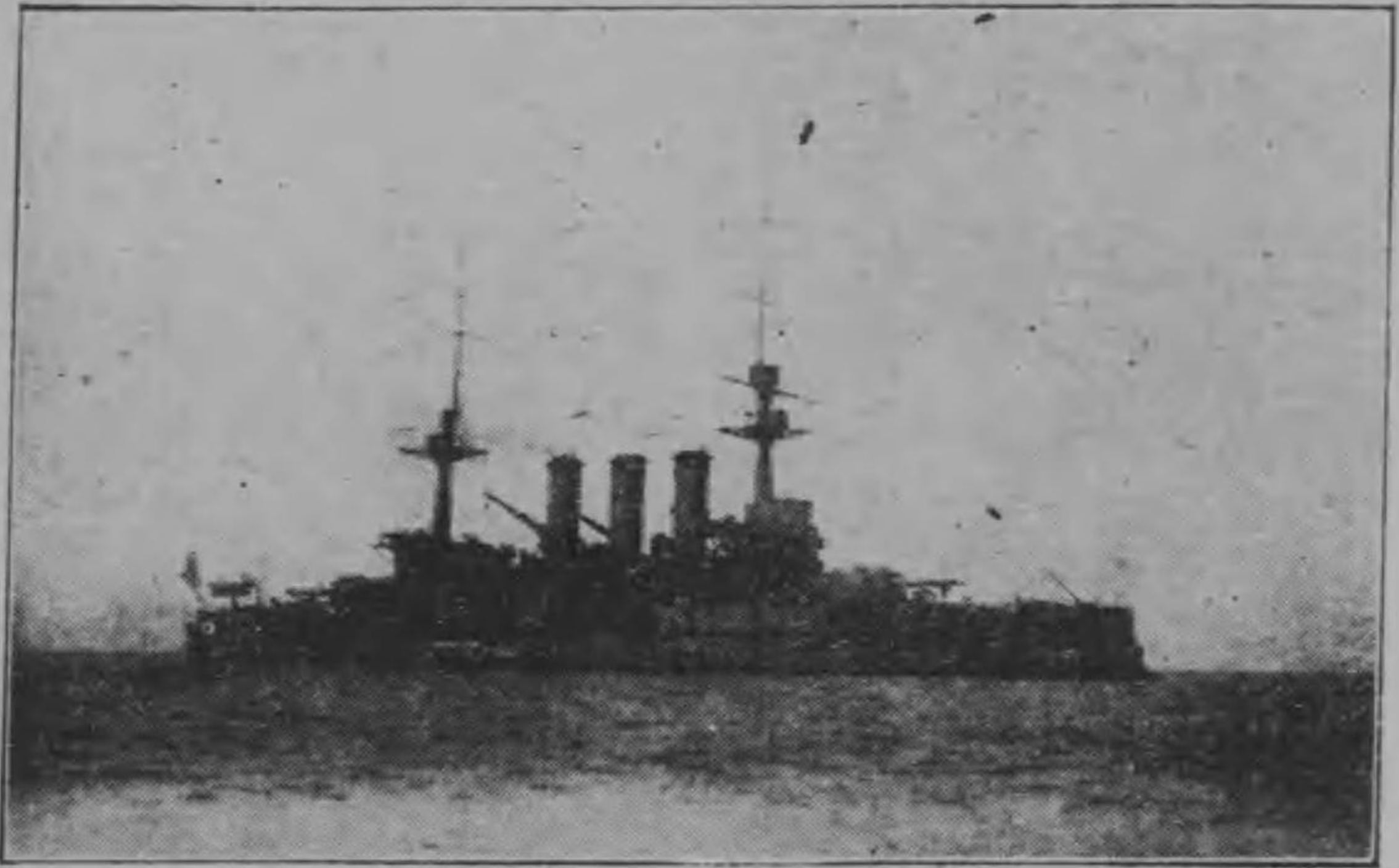
浮標

勿論教練でありますから、實際人が海中に落ちた譯ではなく、艦尾の方にある大きな浮標が、電気装置によつて、矢よりも猶速かに、ザンブとばかり海中に轉落します。所が此の浮標は、或種の薬品の作用によつて、水に浸かると同時に、猛烈なる煙と焰とを噴出する様に出來て居ります。

救命艇

諸君は、よく寫真などで、御覽になつたことがあらうと思ひますが、軍艦の中央部の左右兩舷に、著しく外方に突出して、各一隻宛のボートが吊してあります。これをば救命艇と申しまして、軍艦の進行中に於ても、一命の下ると共に、直に豫め定めてある人員が、之に乗り組んで、左右兩舷から同時に出發し、浮標を目的に漕ぎつける有様の勇壯なる、木の葉の如き小艇は、一上一下、見えつかくれつ、波に揉まるゝオールの、危く折れはせぬかと、手に汗を握らせるの

航速力で進



(前 肥 艦 戦)

です。されど本艦は、航速力を以て、依然進航を續けて居ります。見る／＼うちに、艦とボートとは、遠く相距つて、只舷側に碎くる波のひびきの、濤々と耳に入り来るばかり、已にして浮標の在所に達した二隻のボートは、首尾よく其の目的を達して再び本艦に歸つて來ますので、此の作業は、主として海洋中の、しかも進行中に催はされるだけに、一入の愉快を感じる次第であります。

スケツトと火酒とが入れてありますから、溺者はどうかして浮標にさへ取りつ

けば、いくら嚴寒の折りにも、溺死する様な心配は、先づ無いと云つてよろしい、況やライフボートが、必死の覺悟を以て、赴き救ふに於てをやです。

一六 有明灣出港

今日は十二月の三十日、一年の暮れではありますが、艦内に生活する身には、陸上の人の如き、特別に忙しい氣分を味ふことは出来ません。それでも既に二三日前に、餅も搗けました。松飾りの用意も出来ました。かくて我が艦隊は、前後九日間も碇泊して居た有明灣に、グッドバイを告げて、波靜かなる錦江灣に、大正三年の新春を迎ふることゝなつたのです。

午前八時軍艦旗の掲揚と同時に、錨鎖を巻いて出港したのですが、相憎空がどんより曇つて、冷い雨がしよぼ／＼降つて居ります。淺間吾妻の兩艦は、降る雨の中を、先づ微速力で運動を開始しました。そして一日中別れ／＼になつて、各自獨立の作業に従事したのでありましたが、意外にも風浪が高くて、艦體の動揺

も亦甚だしく、其のために豫定の作業が、思ふ様に進行しなかつたと聞きました。

かくて午後四時半頃には、聊か晴天の兆候が見えぬでもありませんでしたが、兩艦は火崎東方の海面に集合して、いよ／＼前進を開始しましたが、その五時半頃には、一時晴れ模様であつた天候が、再び怪しくなつて、黒い雲が低く垂れ、自然前途の難航海を思はせて居ります。

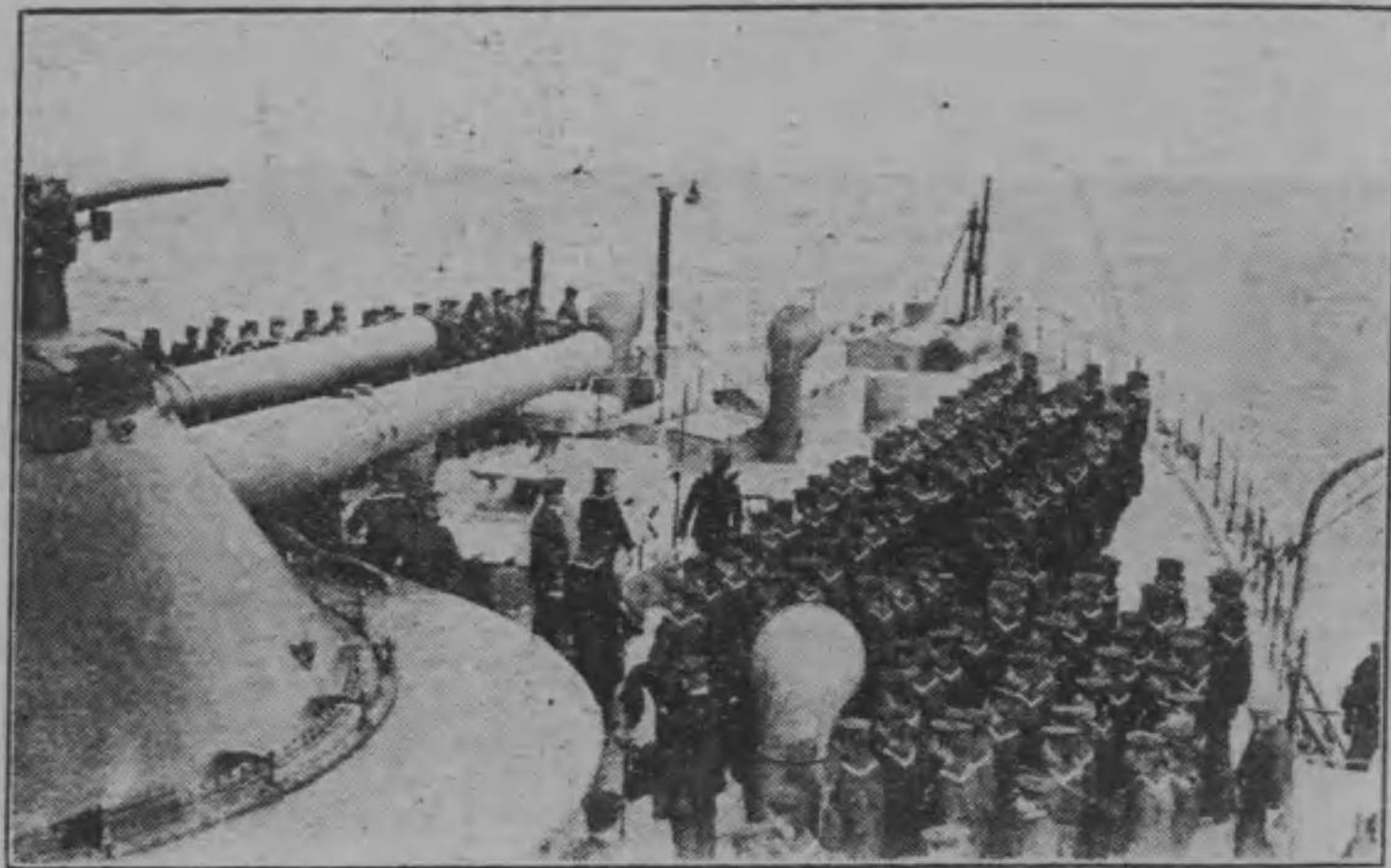
見よなつかしいあの枇榔島は、いつしか早や後方になつてしまひました。火崎の空高く明星が一つ、雲のきれ目から美しい光りを放つて、私達の行手を見守るやう、あゝそれにして有明灣の波よ、永久にその美しい碧の色を變ふるな、私達は今これから、遠く西の方へ向ふのだが、其の波の靜けさは、いつまでもいつまでも忘れることが出来ないものを……。

一九 佐多岬の燈光

思ひ出多き有明灣を抜錨して、鹿兒島に向ふ一夜は、艦の縦動も可なりに激しくありました。蓋し此の日は、既に朝の間から、北西の烈風が、強く／＼橋頭を掠めて、且つしば／＼驟雨を伴ひ、天色轉た荒涼たる有様を呈して居りました。が、果して夜に入ると共に、風力は、一層加はり、波も次第に高くなつて、夫れが舷側にたけり狂ふ響きは、さながら猛獸の吼ゆるにも似て、寧ろ其の雄大に痛快を叫ばずには居られませんでした。

萬噸の巨艦も、靜かなる海上に、碇泊して居る所を見ますれば、所謂動かざること山の如しとも云はれますが、一度海が荒れ出して、波浪の高低一様ならぬ所を走れば、其の波のために、思ふ存分に掀翻せられて、或は巨大なる其の體軀を深く水の中に沈め、或は又高く波上に押し上げられて、一上一下、呼吸さへ苦げに見ゆるものです。

時は今陰曆十一月の二日、有明灣出港の當時密雲の鎖して居たのが、いつの間



(合 集 員 總)

多岬の燈臺が、其の鮮かなる光りを放げて、私達の艦の道しるべとなつて居ま

★佐多岬の燈光

矢よりも早く、右舷に近く見ゆる筈の、大隅半島の一角さへ、殆ど認むることが出来ないのです。さるにても、勇敢なる水兵等は、かゝる暗夜を物ともせず、徐ろに艦を進めて居ります。前艦橋にある司令官、艦長、航海長の方々は、寒風を厭はず、不眠不休の状態で、前路の安心を望んで居られます。

下甲板なる吊床の動搖は、殊更はげしく、爲に安眠を破られて、寢衣のまま、で、前部のシエルターデッキに登り、夜の航海の景觀を眺め見渡すのに、右舷はるかに佐

す。暗夜の燈光！それは文章の上の形容詞とばかり思つて居ましたが、今此の佐多の燈光を望むに及んで、私達は心中に云ひ知れの安堵をしたのでありません。既に此の光あり、艦は豫定の航路を進み、波美しき錦江灣に、疲れた體を休むるのも、明日の午前中であるかと思へば、どうして勇まないで居られませう。あゝどうして愉快を叫ばずに居られませう。

三〇 鹿兒島入港

さしものに荒れ狂うた海も、黒潮の流れ最も急なる種子島海峽を航過したのを名残りとして、風も収り、波も幾分静かになりました、上甲板に立つて眺め見渡せば、左舷に近く海門嶽が、宛然西海の芙蓉峰かとはかりに、其の秀麗なる姿を、高く半空に聳えさせて居ります。此の山は一に薩摩富士とさへ呼ばれて、我が西海の鎮護とも見られるものです。

また右舷の方には、櫻島も、霧島の峰も、峰頭に雪の薄化粧を凝らして、私

達の入港を祝福するかの様でありました、艦は狭く長き鹿兒島灣の入口より、歩

一歩毎に、其の動搖を減じて、遂に市街を距ること約一千米突の沖合に投錨致しました。これ正に大正二年の最終日の、午前十一時頃のことでありました。見上げるとあの櫻島は、近く私達の頭上に仰がれます。頂上には聊か雪を被つて居りますが、其の雪の間から、濛々たる白煙をはいて、静かなる眠りに入つて居ります。又其の麓の村々には、畑に青い菜の葉の色も濃く、蜜柑の林には、金の鈴をかけ列ねたる如く、小馬を曳いて往來する農童の姿さへ、手に取るばかりに見えて居ります。

こんな静かな平和な櫻島が、それより僅かに二週間を距てて殆ど全滅に近い大爆發を來し、蜜柑の林も、農家の人々も、熔岩の中に埋め盡してしまはうとは、誰れか亦思ひ及びませうや、私達は此の驚くべき報知を、支那海の中央に於て知つた時、慄然として肌粟を生じたのであります。

さても美しき櫻島の風姿を右にし、左舷に鹿兒島市一帯の連叢を控へて、私

達の二艦は、泰然として動かさず、日の西海に没するや、美しい歳晩の燈の光りの、舷窓に流れ入りて、陸地は人々の足もいそがしげに歩くでありませうを、艦内にはそれらしい景色も見えませぬ、しかし橋頭にも舷門にも、各公室にも、はや松飾りは出来ました。大きな鏡餅も供へられました。かうして年を迎ふるの用意は、此の別天地にさへ、残りなく整へられましたもの、私達の氣も心も、聊か正月が来ると云ふ喜びを感じて来りました。

三 光榮ある淺間

其の名も雄々しい淺間艦、いでや光榮ある淺間の艦歴を物語つて、我が海軍の誇りとし、また此の年を送り迎ふる記念とも致しませう。淺間は前にも記した如く、明治二十九年十月二十日、英吉利國ニューカッスル市なる、アームストロング會社の手にて起工、三十一年三月二十二日日出度く進水の式を挙げ、翌年三月十八日、艦體全部を受領し、こゝに首尾よく帝國軍艦の一つに加はりましたが其

松飾りと鏡餅

英吉利製

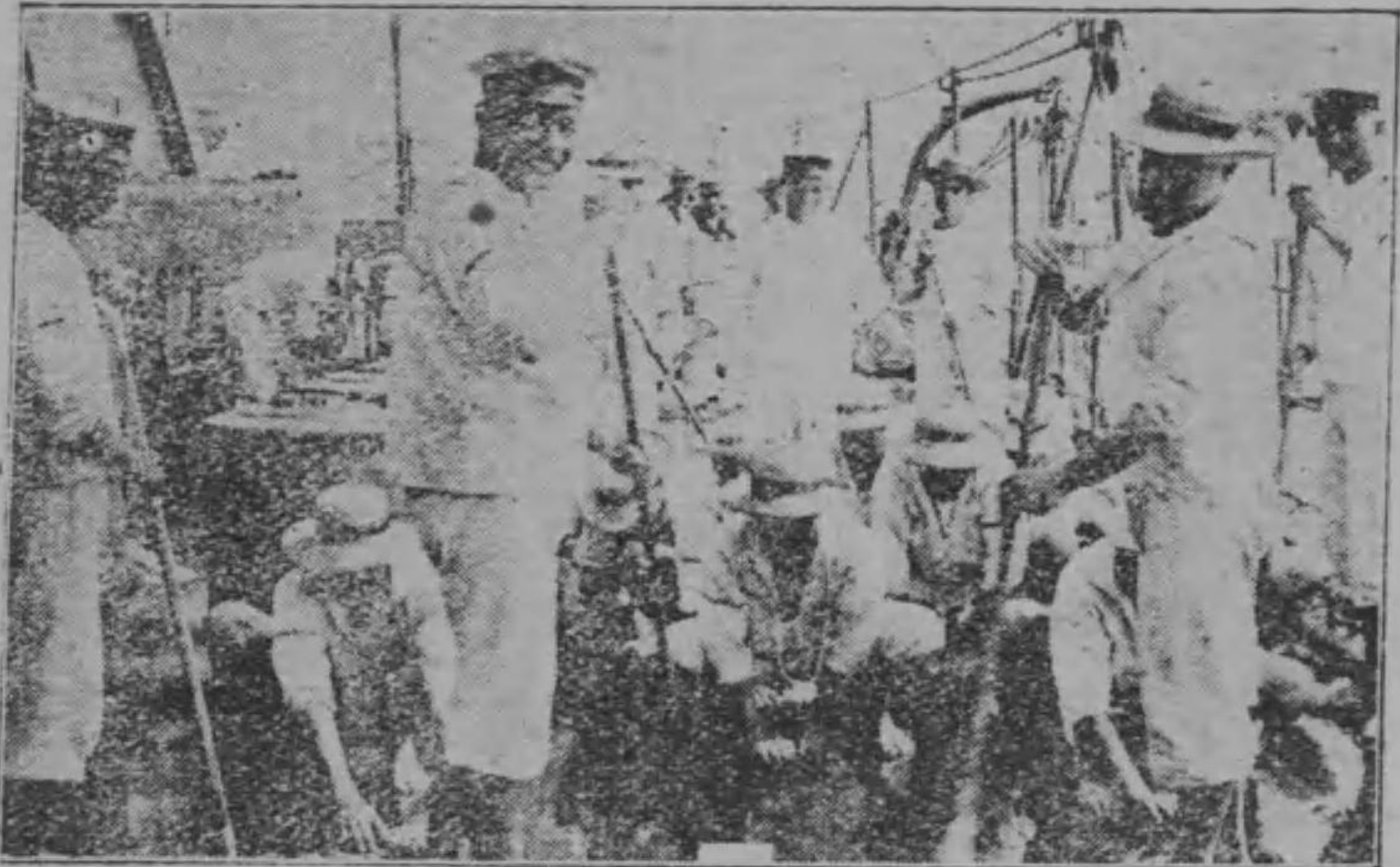
の雄姿堂々として、横須賀海灣を威壓したのは、實に同じ年の五月十七日、若葉

も薫る頃でありました。

本艦のケビンは、他艦に類なき善美を盡したもので、随つてしばしば、明治天皇の御召艦たるの光榮に浴して居ます。即ち明治三十二年十月十三日には、陛下舞子廣島へ行幸につき、御召艦を命せられ、同十一月十五日、陛下沼津御還幸により、明石より御乗艦、三十三年四月二十八日には、陛下大演習御統監のため、本艦に乗御遊ばされ、明石拔錨黒江灣に向はせられました。かくて三十三年四月三十日には、神戸沖觀艦式御親閲、御召艦となり、三十六年四

角力と遊戯

清水



(リ) 摺砂板甲上

★光榮ある淺間

月十日にも、矢張り神戸沖に於て、諸艦艇御親閲につき御召艦を命せられ、三十八年十月二十三日には、横濱沖に於ける凱旋觀艦式に御臨幸御召艦となり、四十年十一月十八日には、神戸沖に於て觀艦式御親閲につき御召艦となつて居ます。

戴冠式

以上列記の如く、本艦は先帝陛下の御召艦となること前後實に七回、其の他英吉利先帝の戴冠式には、高砂と共に彼の地に派遣せられ、また、北白川大妃殿下が、臺灣神社御參拜の砌にも、同じく御召艦となつて居ます。而して本艦の戦歴はと云へば、明治三十三年の北清事變にも、眞先きに太沽に向ひ、次で日露戦役には、先づ仁川港外に、敵艦ワリヤーグ、コレーツを破つて以來、或は旅順口閉塞隊の援護に、或は旅順港外海戦、或は黄海海戦等に參加し、或は又千島方面の海峡監視の任を承り、その日本海大海戦には、最も勇戦奮闘して、多大の損傷を帯びたにも拘らず、敵艦アリヨールを捕獲して、舞鶴軍港に廻航せしめ、兩國の平和克復までは、専ら對馬海峡の哨戒に任じて、遺

光榮ある淺間

算なからしめたのであります。あゝ光榮ある淺間よ、汝は今や老後の事業として、未來の提督の搖籃となつて居るが、思ふに適材を適所に用ゐたものでありませう。

三 軍艦の正月

練習艦隊が、大正三年の新年の曙光を拜しましたのは、鹿兒島灣頭でありました。これより先き有明灣に於ける十日の碇泊中に、餅も搗きましたし、松飾りの用意も出来ましたから、鹿兒島では悠然として、新年の初日の出を拜し、聖壽の萬歳を奉賀したのであります。

讀者諸君のうちには、將來或は海軍少尉候補生として、練習艦に乗り組み、其の何れかの海上に於て、新年を迎へられる方々があらうと思ひます。依つてここには少尉候補生の身分になつて、此の軍艦の新年の模様を記して見度いと思ひます。

聖壽萬歳

先づ未明に吊床を收めて、元旦の上甲板洗ひ、上甲板洗ひは毎日の定まつた仕事の一つであります。分けても元旦のそれは、一層勇しく、一層愉快に行はれます。何しろ氷水のやうな、冷い水、ザアザア流して、兵員と一緒に、ゴスリく腕を揃へて摺るのでから、眠気なんぞはいつの間にか、何所へやら去つてしまひます。陸地の山も海も家も悉く眠つて居る時に、勢ひのよい軍艦では、早くも目を覺して、顔を洗つて居るのです。

候補生室には、ちやんとお正月のお飾りが出来まして、正面の卓子の上に並べられてあります。定時にはお雑煮が出て、お目出度うの交換をやるなど、殆ど陸上のそれと、相違あるを見ないので。

さて禮服を着用して、上甲板へ出て見ますと、此所にもお正月と云ふ嬉しい愉快な気分が満ち満ちて居ますので、常には目の廻る程に忙しい下士卒が、こゝに一團、彼所に一團になつて、海上の初日の出を、さも嬉しげに待つて居ります。東京では芝の愛宕山、上野の臺、神田明神、品川と、さう云つた所で、初日の

禮服着用

新しい軍艦旗

遙拜式

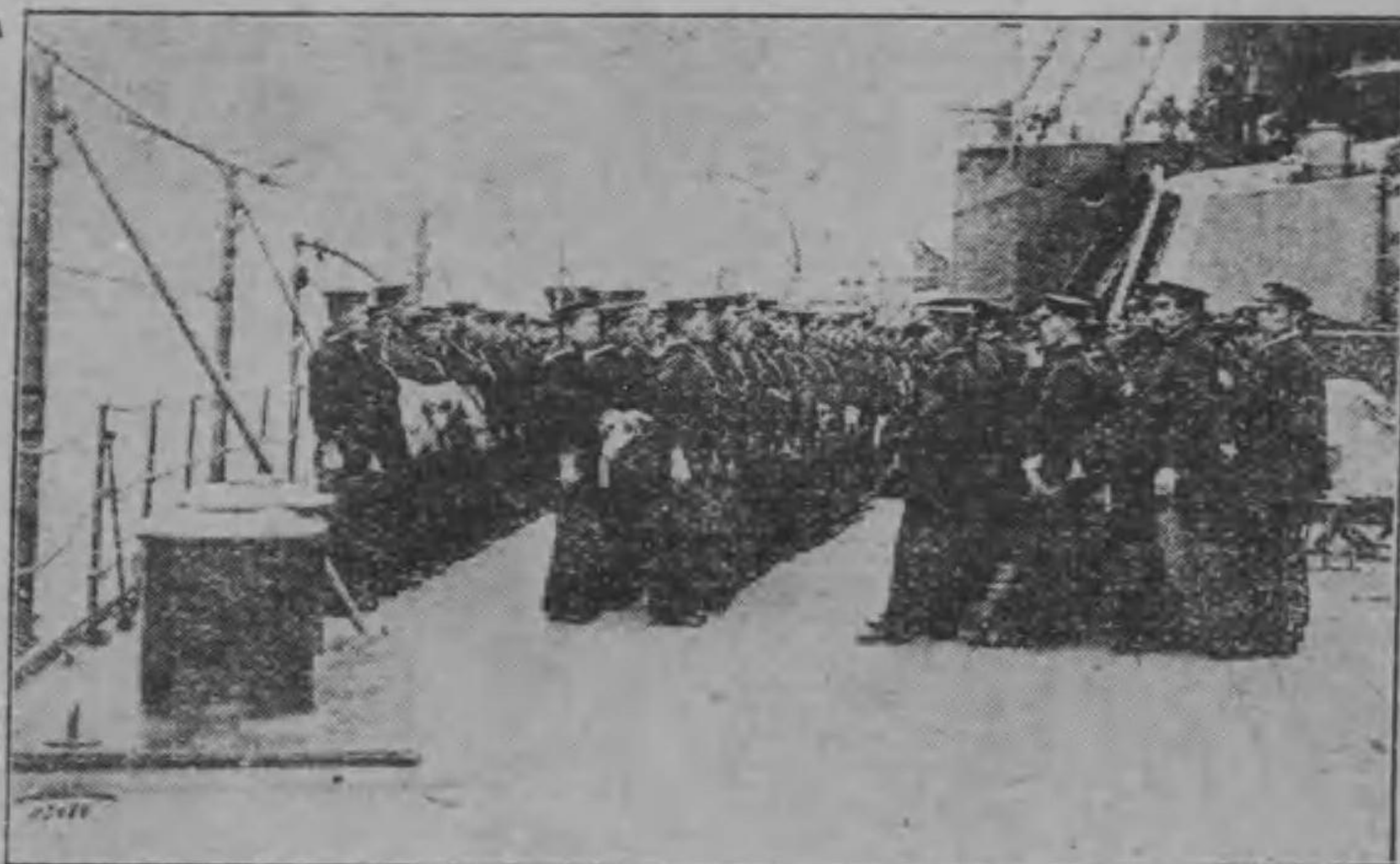
出を拜むと聞きましたが、私共の艦隊は、大正三年の第一日を、鹿兒島灣のたゝ中に迎へたのですから、東の空には、霧島の連山が、雪の化粧をして、霞の中からポーツと浮び立つて居りますし、手近い櫻島も、愉快な形をして、今日の初日を迎へて居るのです。

さる程に美しく清々しい初日の光りは、悠々として東の海から上りはじめました。艦尾の新しい軍艦旗は、ゆつたりと海面に垂れて、朝日に映じて居る、あゝ何と云ふ神々しい光景であります。

又大砲の上には、それく白いお供へやら、赤い橙やら、或は青い松竹などが飾られ、檣頭の飾りも、満艦飾の旗の隙から、小さく見ゆるのです。

かくて九時になると、遙拜式が行はれます。常には聞かぬ喇叭の曲、夫れが如何にも長閑に人々の心を澄ませます。式後には候補生以上と帶動者とは、將官室に向いて、陛下の御眞影を拜しました。これが終ると候補生以上の者は、士官室に集つて、目出度き新年の杯を上げ、司令官の音頭で陛下の萬歳を三唱した

先帝の御召艦



(上陸員)

のです。

艦内には、隅から隅まで、愉快なゆらぎの光景が溢れんばかり、兵員も今日は休業で、一杯の祝酒に、元氣よく騒いで居ます。角力もあれば遊戯もある、午後からは上陸を許されて、陸上の新年をも、十分に味ふことが出来ました。

三 艦内の清水

軍艦の内部で、何が一ばん不自由であるか。かう人に聞かれたら、私は即座に『清水』でありますと、答へねばなりません。寝ても覺めても、水の上に浮んで居る軍艦、それが水に不自由するとは、一寸お

かしい話ですが、實際ですから致し方がありません。

水兵などは一日に、約五合程の水を貰ふに過ぎませんから、陸地に居た時の様な心地で、之を使用すれば、殆ど顔一つ満足に洗ふことも出来ないのです。私の経験によると、士官次室の洗面所と、浴室とは、私達の寢所の直隣りに、相對して居りました。

そこで私は吊床から飛び下ると共に、先づ洗面所へ走るのです、こゝには四つ連續した流しと、眞鍮の金盥が三個ばかり、一方には大きなトタン製の金盥に、大切な水が豫め充たしてありますから、私達は自分の使用する金盥に、約七分目程、即ち柄杓に二はい半ばかりの水を汲み取つて、夫れで朝の洗面をしたもので

勿論此の水も、可なり前に、艦内の水槽に汲み置かれたものなので、其の生温いことは、とてもお話になつたものではなく、何度手拭を絞り直して顔面を拭つても、所謂清涼なる氣分を夫れに依つて求めることは、全く出来ないものであり

★艦内の清水

洗面所

艦内の水槽

蒸餾水

併しながら、航海が長く続く時は、かう云ふ不愉快な生温い水でさへも、そろ／＼缺乏して來ますので、毎日三度三度用ふる食事の時の湯茶なども、全く蒸餾水によるの外なくなるので、之が又一種不快な臭氣を有つて居て、何とも云ふことの出來ぬ臭がブーンと鼻を衝く、更に夫れが十分に沸騰して居ない様な場合には、一層たまつたものでないのです。水の上に居て水に苦しむ、凡そ世の中にこれ位の矛盾は、他にあまりなからうと、私はしみ／＼感じたのです。

二四 皇祖御降誕の地

大正三年の新春を、波靜かなる、錦江灣で迎へた我が練習艦隊は、司令部、艦長以下將校、候補生一同が、二日の早朝を以て、鹿児島市を出發し、神武天皇を祀れる狭野神社に參拜し、且つ皇子原に天皇御降誕の舊跡を訪ふこととなりました、そこでかく云ふ私も亦此の一行に加はることを得て、二千六百年前の、高千

狭野神社

穗朝廷の遺蹟を親しく拜したのであります。

午前七時鹿児島驛を出發した汽車は、左窓に鹿児島灣と櫻島とを侍らせて、ド／＼走つて居ます。櫻島の頂上には、深く雨雲が懸いて、十分に其の雄姿を眺めることが出來ませんが、昨日艦上から見た時には、幽かなながらも煙を吐いて居たのでした。

重富、加治木、國分、牧園の諸驛を過ぐる頃に、殊更不思議に思はれましたのは、畑の隅に、菜の花や大根の花が、霜にも恐れず、其の美しい花瓣を見せて居たことです。

都城

鐵道は吉松から分岐して、都城へ達して居ます。私達はこゝで、都城行の列車に乗替へねばなりません。京町を過ぎて加久藤へ來ると、もう其所は日向國に目ざす霧島山も、すでに靈姿を現して來ました。即ち私達の向ふべき、神武帝御降誕の地は、正しく此の霧島山の麓にあるのです。

日向國が一般に、人口稀薄の地であることは、豫て聞き及ぶ所ですが、成る程

★皇祖御降誕の地

汽車の沿道にも、殆ど人家らしいものがなく、全く無人の荒野を行くに等しい思

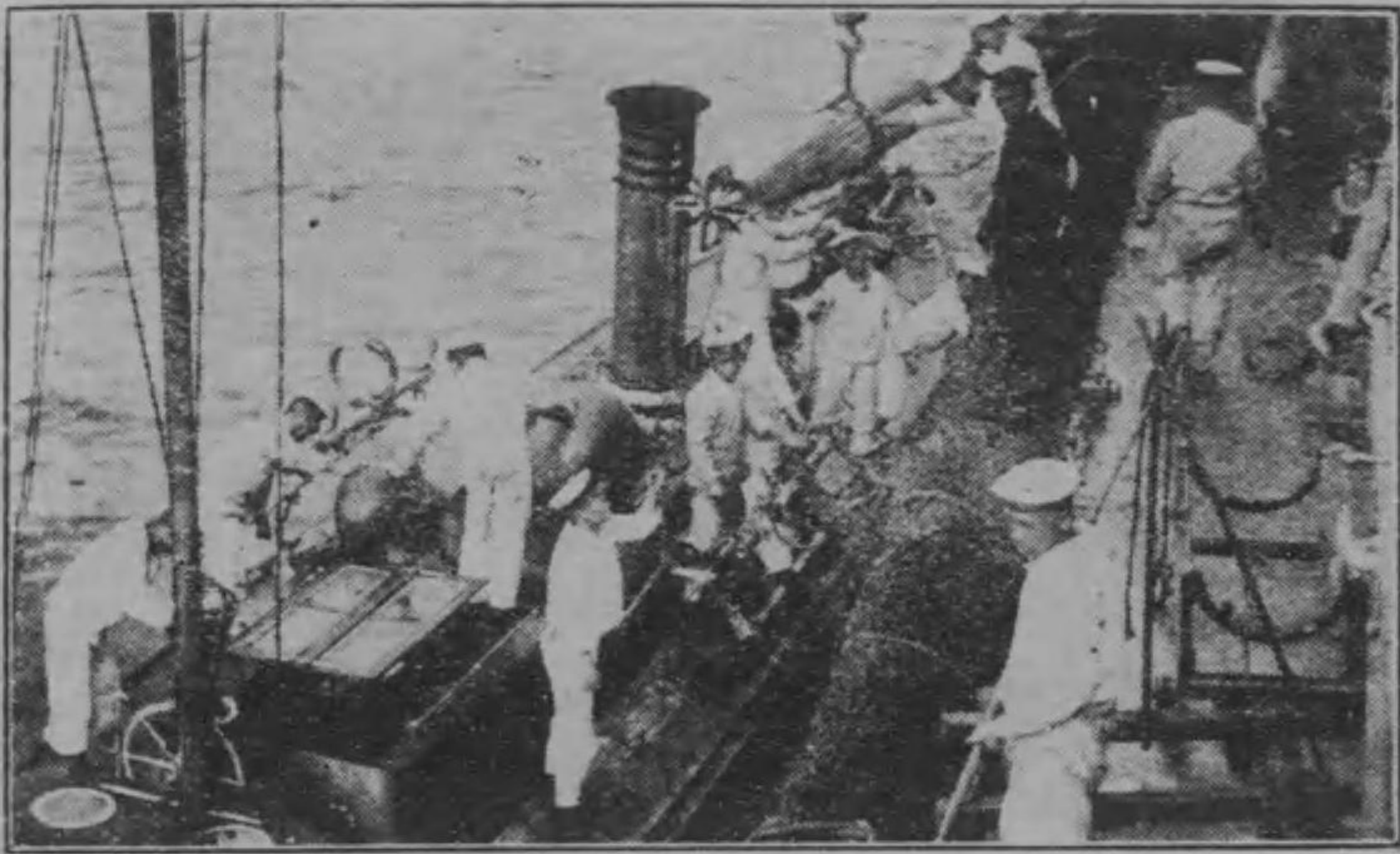
ひがあります。

かくて一行が、高原の驛に著いた頃は、寒いく霧島嵐が、あたりの薄原を薙ぎ倒すのではあるまいかとばかり、強く吹いて居ります。私達は今や此の高根風を、平氣で正面に受けながら、一里餘の強行軍を試みるのです。蓋し此の一行は、悉くこれ帝國海軍の勇者であります。常に怒濤と烈風とに抵抗して、平時も猶戦時の如くに、勇闘を事とする人、陸上の寒風を冒す位は、殆ど意とするに足らないのです。

淋しい田舎道には、車一つ通つては居り

霧島嵐

帝國海軍の勇者



(雷魚るすとんれらせ載に將)

太平の氣

ません。けれども路傍の枯草の中からは、既に蒲公英が小さい蕾を見せ、又菜の花が咲いて居たり、少しばかりの水の流れには、簡単な水車が設けられて、人も居ないのに、麥を搗いて居るなど、何所かに太平の氣が充ちて居るやうに感じました。

やがて一行は、狭野神社の一の鳥居に達しました。勿論此のお宮は、縣社であるだけに、社殿の結構も、目を驚かす程ではありませんが、豊臣時代に植ゑたと云ふ杉の並木が、今では三抱もある様な大木となり、而も樹勢頗る盛んに、緑の色を變へない所は、見るからに壯觀で、且つ崇高の念に打たれるのでした。

さて當社の祭神は、云ふまでもなく神武天皇と吾平津姫命とで、相殿には瓊々杵尊、木花開耶姫命、彦火々出見尊、豊玉姫命、鸕鷀尊不合尊、玉依姫命の六柱の神々を祀つてあります。又當社の境域は、一萬九千六百坪に餘り、玉の如き眞清水の、珊瑚として流れ流れて池となる所には、緋鯉や眞鯉が、勇しく尾緒を振つて居ります。さても夏ならば、どんなに涼しいでありませうに、今は其水を

祭神

掬ふさへ、手の凍る思ひが致します。
 神社の背後十數町を距て、皇子原と云ふ丘陵地があります。即ちこれぞ往古高千穂朝廷のあつた所で、神武天皇御降誕の靈地であります。天皇の御幼名を狭野命と申し上げたのも、實に此の高原村字狭野の宮でお生れ遊ばされたからでありませう。

皇子原の眺望は、實に雄大のもので、見渡す限り茫々として、今も猶鐵の音を知らぬ不毛の地に、丈なす薄が、どこ迄もく連つて、それが高千穂山の山嵐に靡きつゝあるので、謂ふに天皇は、朝な夕なに、宮殿の御階に立たせられて、或は高千穂の峻峰を仰ぎ、或は千里の薄原を見渡し給ひて、後日中州平定の御雄圖を、徐ろにお定になつたことでありませう。私は寒い風に吹かれながら、皇子原の頂上に立ち、思ひを二千六百年のむかしに馳せて見ましたが、今更ながら天皇の、御英武に渡らせられた事が、しみぐくと感じられてなりませんでした。

削るが如き霧島の峻嶺は、近く眼前を歴して、千古不變の姿を横へ、麓に廻ら

す椎と杉との古代林は、蒼鬱として日光をも漏らしません。我が皇子原は、かゝる雄大なる光景を背景として、廣くも人に知られずに在るのです。
 記念の松二本、碑石一基、別に天皇の御降誕の節、御産所の跡として傳へられる所には、比較的質の硬さうな火成岩の大石が一つ、千萬年の後までも、動かぬ如くに置かれてあります。

聞けば上古以來、霧島山の神火は、しばぐ此の野原を襲うて、石も土も其の色を變へたに拘らず、此の御産所の靈石ばかりは、緑の松と諸共に、永久不變であつたと云ひます。さて又歸りに高原の驛まで来て、來し方を見返れば、霧島は再び黒い雲に包まれて、一大爆破をする前兆でないかと思はれました。

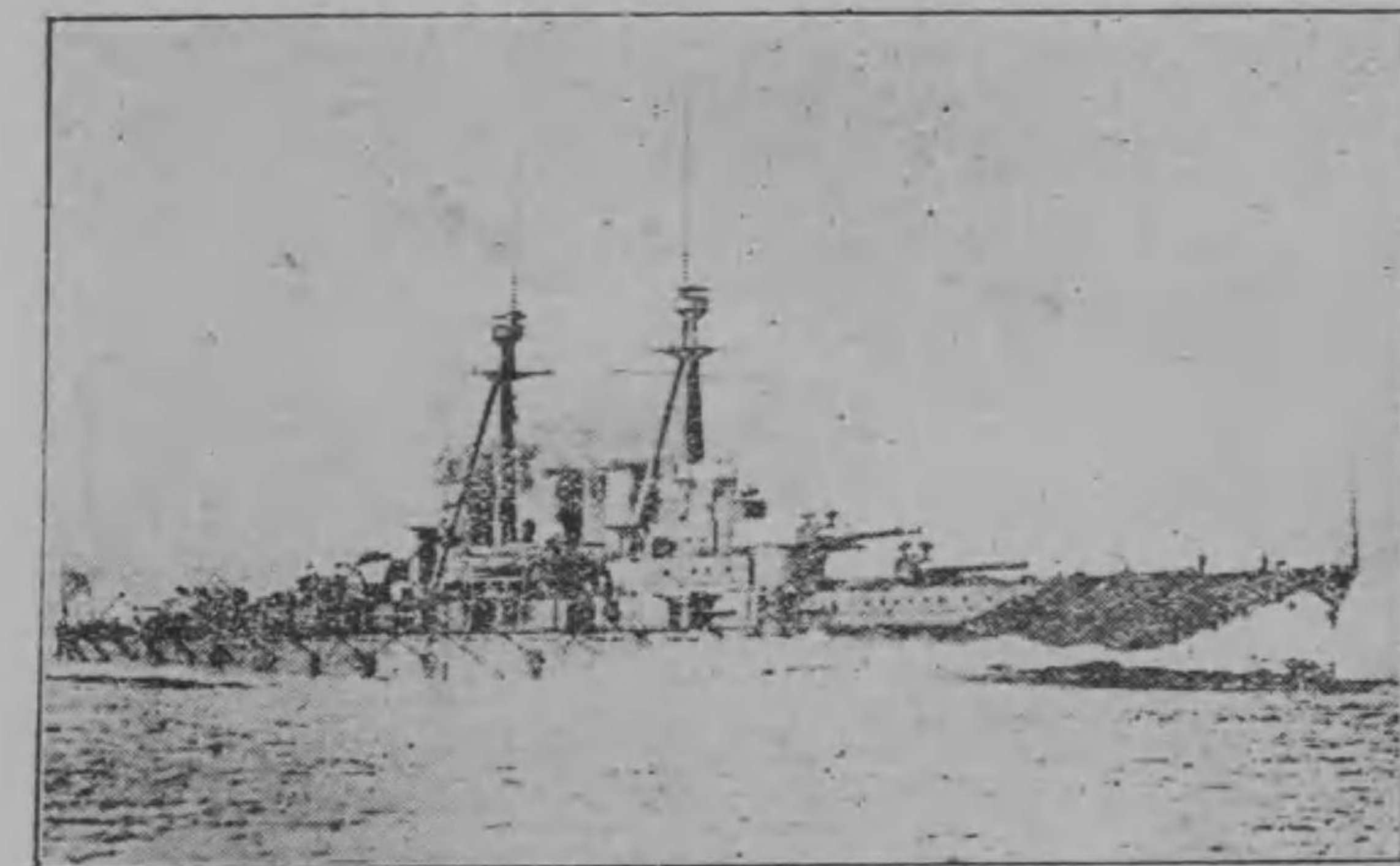
三 便所の模様

私達の専用便所は、中甲板中部の、次室の隣に設けてありましたから、カーテンをまくつて一歩外へ出て、更に一歩進めば、其所が便所の入口です。少し

★便所の模様

穢い話ではありませんが、順序として、

之も書かねばなりません。



(剛 金 艦 戦 洋 巡)

大小別々で、小便の方は至つて簡単ですが、大便の方は其の仕方がなかく、むづかしいのです。何しろ尻をまくつて腰かけて用をたすと云ふ事は日本人の習慣として、どうも心地のよくないもので、寒中などは、一層寒く不愉快なばかりでなく、底部のポンプ口から外氣を吹き送る響が物凄くて、逆も落ちついて居られません。併し何事でも、慣れると不思議なもので、艦内の便所はかうしたものだと、陸地のことに未練が残らぬ様になれば、此のをかした便所も、夫れ程不愉快でもなくなります。殊に

腰かけて用をたす洋式

禁便

スカーフ

後は綺麗さつぱりと、不快なものは、一つも残らぬ様に、排水口から出る瀧の如き水を以て、洗ひ流してしまふのですから、陸地の夫れよりも、甚だ都合のよい譯です。所がこゝに一つ、困つたことには、一週一回の大掃除の時と、毎夜副長の巡検前とは、如何なる者も、禁便！、さう云ふ辭句はないかも知れませんが、絶対に入ることが出来ないのです、之をはじめ一寸困るやうなもの、何事も規則で押し通すだけに、日を経るまゝに左程苦でもなくなりません。

さて便所から出ると、先づ普通の水で手を洗つた上に、消毒水の湛へてある器物に浸し、同じ布巾で十分に拭ひ、靴の如きも入口に備へ付けてある消毒用のスカーフ（麻繩の靴拭）でこすつて出ると云ふ譯。

なせ此の様に、便所の消毒が嚴重であるかと申すのに、傳染性の病氣、例へばチブス、赤痢、コレラと云つた様な、恐しい病源は、大抵此の便所にあるので、萬一、さう云ふ病氣が芽を萌さうものなら、夫れこそ一艦内大混亂を生じて、如何な軍醫も、殆ど施すべき策がありませんから、さては此の如くに、便所の清潔

★便所の模様

を保ち、以て病源を未然に抑へつけて置く次第であります。

三 朝の食卓

便所にも行き、洗面もすまし、寝衣を脱いで服を改め、士官次室に来て見ると、もう朝の食卓の用意は、遺憾なく整へられてあります。次室の舷窓からは、清涼なる朝の空気が、云ひ知れぬ快感を、私達の心の底まで送つて來ます。次室士官の多くは、朝の甲板洗に出てゐて、何れも、膝から下の太い肉を現しながら、勢よくかけこんで來ます。そして彼等の或者は、

『ボーイ、飯食はせ！、ボーイ早く飯食はせ！、オイ、ボーイ』

と叫びます。午前七時になりますと、ボーイはつゝましやかに、且つ明瞭な音調を以て、

『食事よろし』

と報告します。皿や其の他の器物には、一々姓名が記されてあるばかりでな

清涼なる朝の空氣

味噌汁の茶碗

く、著席の順序も一定して居ますから、在室者は一々設けの席に著く。ボーイは味噌汁の茶碗と、洋皿の一品とを順次各員の前へ運びます。

飯のお代りをする時には、ボーイは一々、何中尉、何少尉と云ふ様に、主厨の方へ報告に及びます。私は中尉でも少尉でもありませんから、只『木村さん』と呼んで、申し受けて來るのでした。

遠慮なしに云ふと、次室でも、士官室でも、朝食の料理は、最も殺風景です。併し晝間の洋食よりも、此の朝食に於ける一碗の味噌汁は、たしかに旨いと云はねばなりません。私の如きは陸上に居た時よりも、殆ど倍額の分量を攝取して、猶胃袋の餘裕を覺ゆる程で、随つて吊床にある間から、朝の食卓の美味を夢想して、夫れに偉大なる楽しみを感じる一人でした。

かくて、食事が済んでしまひますと、夫れぐ事務を取る人、或は上甲板、或は下甲板などの受持ち區域に赴くのですが、碇泊中に於ては、午前正八時に、軍艦旗掲揚の儀禮がありますから、非番の人々は、夫れより五分まへに、上甲板後

食卓の美味

部の、首砲の邊に位置して、國歌の吹奏裡に、日の大御旗の掲揚に、敬禮を表することとなつて居ります。

猶軍艦旗掲揚のことに就ては、既に詳記しましたから、茲にはわざと省略することに致します。

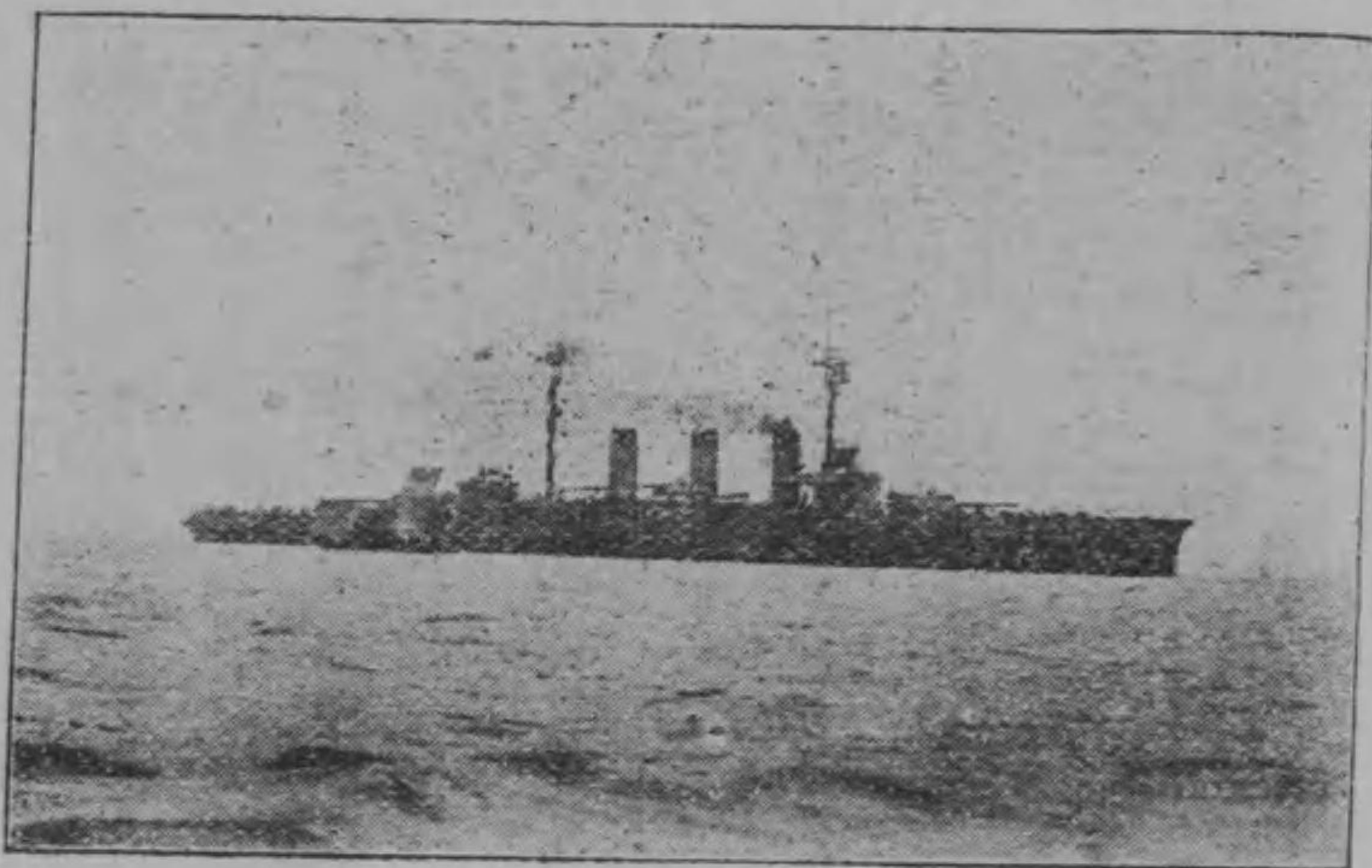
三 軍事點檢

軍艦に於ては其の碇泊中と航海中とに論なく、毎日一度宛、軍事點檢と云ふことが行はれます、軍事點檢とは、全艦内の人員が、それ／＼持ち場持ち場に就いて、各分隊長の點檢を受けることで、其の配置は全く戰鬪開始の場合と同一であります。

蓋し艦内の全員が、一齊に其の部署にばかりついて居ることは、事實上出来ないので、毎日に此の點檢を行つて、平時も戰時と同様の覺悟を有たしめ、かねて各兵員の動作等にも注意するものと思はれます。

戰鬪開始

午後四時半



(吹 伊 艦戰洋巡)

されば此の軍事點檢の際には、戰鬪部署を有たない主計官、軍醫官なども、悉くシエルターデツキ上に整列して、點檢に参加するので、かく云ふ私もまた、後部のシエルターデツキ上に於て、前記の諸官等と共に、謹んで點檢を受けましたが、旅順口外の寒風はげしき夕暮を、波間に消えゆく殘照を浴びつゝ、勇しい喇叭の音を聞いた其の愉快、今思ふさへ身中に力が漲るばかり。

此の點檢は、毎日午後四時半に行はれますので、即ち夕食後間もないことであります。すが、つまり艦上での作業は、これを以て一段落を告げるのですから、大砲其の

★軍事點檢

他の夜露にぬれてはならぬ様な金物の類には、此の際ケンパス製のカバーをかけることゝ成つて居ます。又艦副長、參謀などは、前部のブリツチに在つて、指揮命令を下し、各分隊長の報告を聴取されます。

軍港などで、夥しい軍艦が在泊する場合には、前後左右で同時に同音の喇叭が鳴りひびきますから、外の人々が聞いたなら、嚙かし賑かでもあり、又勇しくも聞ゆるでありませう。けれども航海中の、波著しく高く、艦の動揺はげしき時に、四面茫茫として、眺め見渡す限り、島も山もない太平洋の夕暮に、高き甲板の上立ちながら、海國男兒の勇氣を示す彼等水兵が、よし艦の動かばとて、泰然自若として、受持ちの場所々々を固めつゝ、徐ろに號音の下るを待てる有様を見ましたら、儒夫も又起たすには居られますまい。

二六 天草灘の眺望

さる程に、さても鹿兒島灣に、新年の曙光を拜した我が艦隊は、其の三日には

最早やこゝを出て、佐世保軍港へと向つたのであります。即ち本艦は西北の進路を執り、風に向ひ波に逆ひながら、九節の速力を以て頻りに進航を續けました。艦首に碎けて散る波の花は、雪よりも猶白く、随つて其の動揺は、なかくに激しかつたのです。

艦尾の方から、美しい光りを放つて、さながら無事の航海を祈る！とでも、信號して居るのではあるまいかと思はれた、あのなつかしい佐多岬の燈臺も、右舷にうすくぼんやりと眺められました。薩摩富士の雄々しき姿も、いつとはなしに、夜の黒幕に包まれて、もう見えなくなりました、かうして私達は、遂に錦江灣の波に別れを告げてしまつたのです。

有名なる頼山陽先生の詩に、雲か山か吳か越か、水天彷彿青一髮、萬里船を泊す天草の洋、煙は蓬窓に横はつて日漸く没す、瞥見す大魚の波間に跳るを、大白舟に當つて明月の如しと云ふのがあります。これは天草夜泊の詩と申して、誰れ知らぬ者もありますまい、私達は今丁度そこにさしかゝつたのです。尤も山陽

天草列島

先生は夕景を見て讀まれたのですが、私達の通過したのは朝でした。正月四日の朝は、相憎くの曇天ではありましたが、不思議なほどに波もなく、亦風も起りません。遙に東方の水面に、それこそ雲か山かとばかりに、點々として散在するのは、所謂天草列島であります。

海の彼方からさし出た朝日の光りは、島々の山の頭を、ボーツと赤く染めて居ます。みんな同じ様に、赤く染めて居ます。自然には少しも不公平と云ふことがありません、あゝそれにしても何と云ふよい景色でせう。廣い海の上に出てこそ、はじめて斯うした雄大なる光景をも眺め得るのです。

長崎

かくて午前八時頃には、もう長崎港の入口が、遙かに見え出して來ました。長崎と云へば、日本最初の開港場で、徳川氏の二百五十年間と云ふもの、我が國外交の門戸をなした土地で、文華燦然として開け、諸國より笈を負うて、新文明の光に浴するとしてやつて來た學生も、決して少くなかつたのであります。此の思ひ出の種つきぬ長崎を外に眺めて、鹿兒島以來の足を休めようともせず、猶北航し

て佐世保軍港に入り、悠々と眞水の湯につかる覺悟で、楽しい希望を有つて進んだのであります。

二元 霧の海

航海の困難

曾て日露戦争の時に、上村艦隊が、日本海の濃霧のために、時々浦鹽艦隊を見逃したと云ふので、殺氣に充ちたる國民は、上村中將の無能を罵倒したりなどした事がありました。さて實際霧の海ほど、危険で、且つ航海に困難な所はありません。私など其の経験のない時には、

『たかゞ無抵抗の氣體である、之が風浪の如き艦體を覆滅させる様なものなら、夫りや恐しいかも知れぬが、霧などに心配するのは男らしくない』

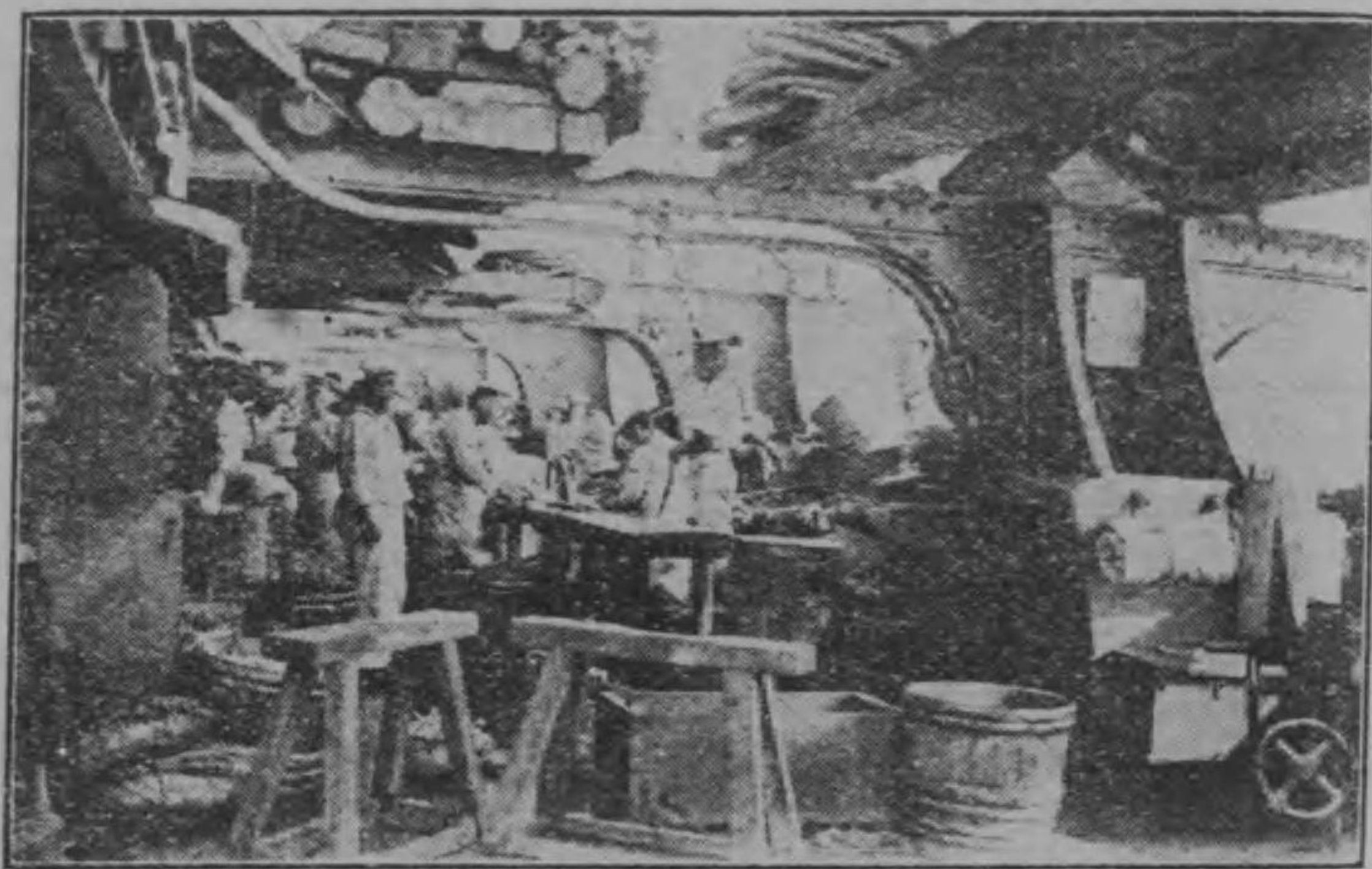
とかう云ふ考へを有つて居りましたが、實際洋上で濃霧に襲はれてみると、曾ての大言が、甚だ皮想であつたと云ふことを、つくづく恥かしく思つたのです。

★霧の海

『どうです君！霧の海と云ふものは、實際恐しいでせう。いくら熟練な航海者でも、之で艦を進めることが出来ませんが、強て進めぬこともなからうが、編隊航海の時には、僚艦と衝突する事もあらう。場合によつては暗礁へ乗り上げる事もあ
る：霧中信號を吹いた所で、味方同士なら兎も角、敵に對した時には何の役にも立ちますまい』

かう云つて、一人の將校は、私に説明して呉れました。私は霧の海の、夜の航海よりも、一層悲惨なのを見て、往年の上村艦隊に同情を寄せると共に、萬一のことが無ければよいがなと、少なからず心配したのです。一寸先は暗の世、板子一枚下は地獄、さう云つた觀念は、艦に乗つて、大洋に出て見ると、しみじみ味はれるので、勿論只今の如くに、航海術の進歩した時には、そんな心配は全く無用の如くに思はれますが、霧の海に介在して、天地四方、只自分の外には、何者も見えない所では、心細さも一人で此の先どうなる事かと、親艦に乗つて居ながら、聊か心細く感ずる事さへあるのです。

下は地獄



(場 事 炊)

★酒保の買物
手拭 四錢五厘

- | | | | | | | | |
|------|----|----|------|------|------|------|------|
| 敷島 | ペン | 服卸 | 封筒 | インキ | 鉛筆 | 手帳 | 筆 |
| 八錢八厘 | 五厘 | 八厘 | 一錢二厘 | 三錢八厘 | 二錢八厘 | 三錢五厘 | 二錢八厘 |

(一〇七)

酒保の買物

酒保にはどんな品物を賣つて居るか、其の價はどうか、左に重なる五六點を記して置させよう。

ライオン歯磨	一錢六厘	仁丹	六錢六厘
サイダー	六錢八厘	朱墨	七錢
麻裏	十一錢	シトロン	九錢
海苔	五錢		

また此の外に、種々雑多の品物が用意してありますから、實に便利なこと此の上もないのです。所で酒保の品物は、前記の如く非常に安價であります。夫れでも猶、約一割ほどの利益があるさうで、其の利益金は積立て、置いて、公事に使用する聞きました。

私は在艦中に、幾度も酒保へ行つて見ましたが、何しろ狭い艦内の事ですから、十分に餘地を取ることも出来ず、随つて店も甚だ殺風景ですが、流石に軍人が商賣をして居るだけに、萬事整頓してゐて、如何なる品物でも、客の需めに應じて、一言の下に取り出して渡して呉れることは、餘程慣れないでは出来ぬ業だと、大きに感服したのであります。

一割の利益

三 防火防水教練

火と水

實戦の時には、しばし敵艦の巨弾が命中炸裂して、夫れがために火災を起すこともあれば又水線を破られて、潮水が漲り来る恐れもあります。又實戦でなくても、平時の航海中、或は碇泊中にもかうした不時の災厄が、絶對に無いとは云はれません。故に軍艦では火と水を防ぐことには、一方ならぬ苦心を要するので、之が陸上の出来事であつて見れば、他からいくらでも應援に來る人もありませんが、全く人手を待つことの出来ぬ軍艦では、艦内の者が必死になつて、之を防ぐの外には、執るべき手段もないのです。

夫れ故艦内では、一週に二三回宛必す防火教練と防水教練とを行ひ、以て萬一の時の用意を致します。御承知の通り艦内は數區劃に仕切られて、それぐ厚い鐵の扉があります。火災や浸水のあつた場合には此の鐵扉を必め切つて、成るべく他に害の及ばない様に工夫をします。

水上生活

元より教練のことですから、本當に火災や浸水があるのではなく、或部分を假想して、何々室火災！、と云ふけたまはしい號令が響き渡りますと、豫め定められた人員が、それ／＼防火の器具を手にして向ひますし、副長も分隊長も、分隊士も皆之を督勵して専ら消火に盡力しますが、其の活動の目覺しさは、並大抵ではありません。

是について感じますことは、水上生活のものに、防水教練は不思議とも考へられません、防火教練は意外ではありませんか。けれども、何事でも見たり聞いたりする事と實際とは、大に違つてゐる場合が多いものであります。

三 艦内の入浴

各種の浴室

軍艦内では、淡水に乏しいために、いつも潮湯が立ちます。それも艦長浴室、士官浴室、士官次室浴室と云つた様に、各階級によつて、それ／＼場所が異つて居ります。

教育日誌

毎日夕食が済んで、軍事點檢が済んで、軍艦旗下し方が済みますと、もう吊床がつられます。すると當直將校の外は、多少閑になりますので、各兵員の行狀やら、分隊の配置やら、教育日誌やら、其の他の事務に従ふので、手のすいた者から、順次入浴することゝなつて居ります。

淺間の浴室は、例のスタレージの一方に、士官室のと、士官次室のものが、隣り合つて設けてありますので、夫れには毎夜一人宛の、バス當番と云ふものが附きます。

バス當番

さて湯が沸きますと、其のバス當番から、

『何々中尉バス宜し』

と報告して來ます。此の時若し其の中尉が、忙しい用事でもありませんと、更に又、

『何々少尉バス宜し』

と、次の人を指命します。

★艦内の入浴

かう云ふ風にして、段々手隙の者から入浴しますので、浴槽は西洋式の瀬戸引のもので、パイプから蒸気と冷水とが、自由に出る仕掛けとなつて居りますから、熱ければ水を出し、温ければ蒸気を入れますので、しかもさう云ふ手数は、みんなバス當番がして呉れます。

バス

軍艦では入浴のことを『バス』と云つて居ます。

『サア己は之からバスをぞ』

と云つた調子です。

尤も兵士の方は、毎晩入浴すると云ふことはありません。即ち一週間か五日目に、上甲板の中央部で、大きな共同浴槽を、臨時に造つて、そこで盛んにバスの事となつて居るのです。

ケンバスの浴槽

此の浴槽はケンバス製のもので、平生は或る一定の所に、細かくたゞんで格納してあるのですが、いざ使用する場合には、それを開いてドン／＼海水を充たし、そして蒸気を通すのですが、何しろ強烈なる蒸気を以て水を温めるのですか

ら、忽ちにして熱湯になつてしまひます。

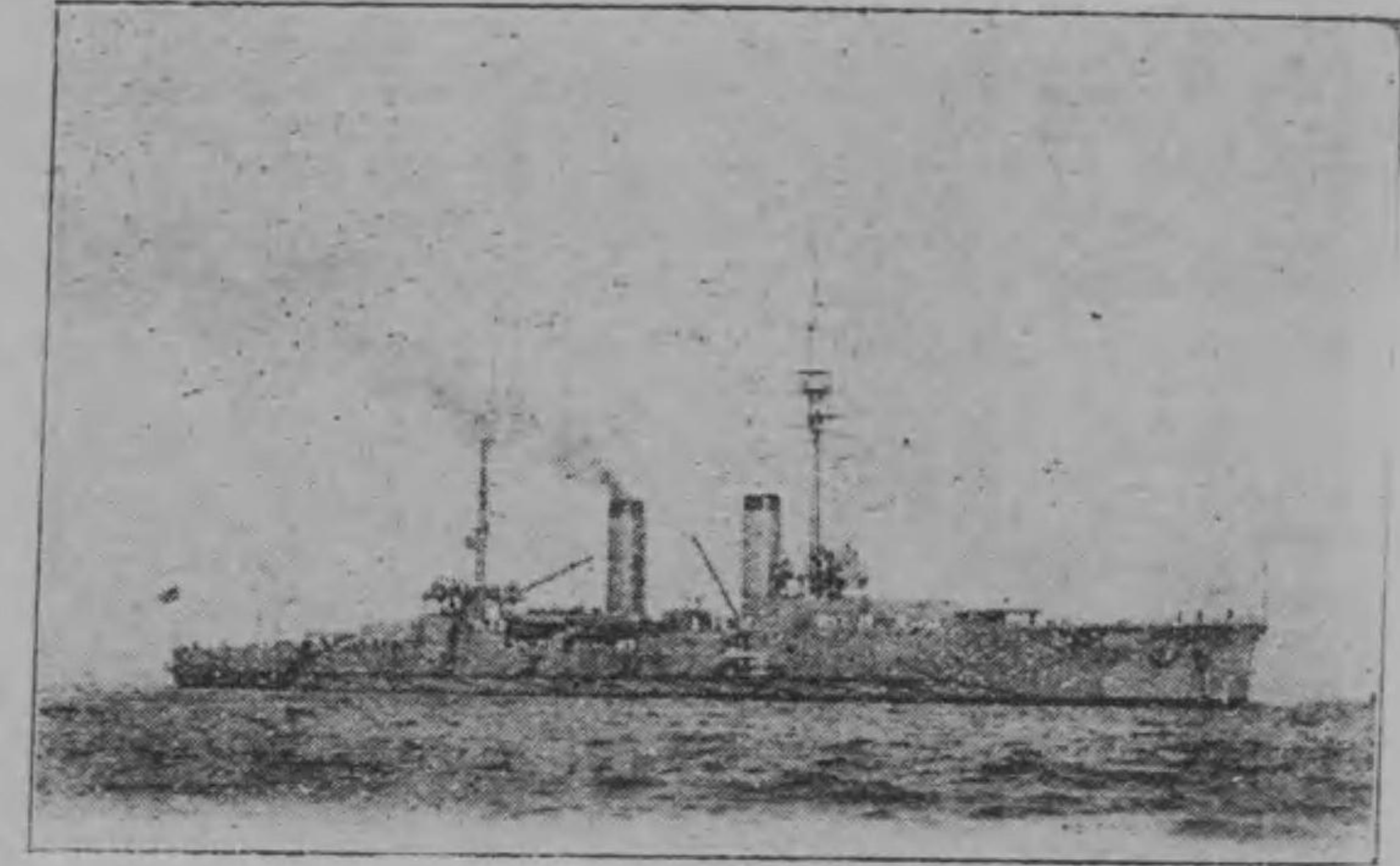
かう云ふ便利なことは、陸上の人の、到底想像も及ばないことでありませう。

(波 筑 艦 戦 洋 巡)

一體士官は、入浴と同時に、日本服を着用してもよい事となつて居ます。一日中の汗や垢を流して、體の疲れを休めた上に、ゆつたりした日本服を着て、煙草をのんだり、茶を飲んだり、菓子を頬張つたりする愉快は、又格別なものであります。

三 雪夜の探照燈

毎週水曜日の晩には、約三十分ばかり、丁度私達が佐世保に碇泊して居た時の



日本服

水曜日

★雪夜の探照燈

ことであります。一夜空が黒く曇つて、はげしい吹雪を來たし、殆ど咫尺をも辨じない時がありました。それは即ち水曜日之夜でありました。

如何に強い力のある探照燈でも、雪に逢つては、餘程其の光鋒を減ずるものです。併し四方たゞ暗々として、何物も見ない所に、在港の各艦から逆り出る其の光りの、如何に壯美の極であるかは、實際に見たものでないと、其の眞を傳へることが出来なからうと思ひます。

雪中の艦橋

甲板でも艦橋でも、凡そ雨露にさらされる部分は、すべて眞白に雪が積つて、ともすれば足を踏み外しさうです。私は此の雪の夜の燈光を見たいばかりに、わざと外套を著ないで、雪の中を艦橋に飛び上つて、見れば既に此所からも彼所からも、或は太く或は細く、閃々として光りを投げて居ます。

殆ど米糠を蒔くやうに降つて來る雪が、光りの部分を透して、金色に輝く美しさ、降り來る先と、落ちゆく先とは、暗にかくれて見えませんから、一層壯大に、且つ美麗極りなきものであります。

夢の如き光景

探照燈受持のS中尉が、外套目深にかぶりながら、艦橋に立つて指揮を取りつつも、隙間に説明して呉れます。私は腕を胸に組んで、寒さのために武者振ひをしながらも、永く々々此の夢の如き光景に見惚れて居たのです。

併し此の美しい光景も、約三十分の後には、各艦一時に消燈して、眞の暗に包まれましたが、シエルターヂツキの上には、此の時もう一寸以上も雪が積つて、明かに靴の痕を印して居ます。幸ひに風が烈しくありませんから、舷側に打ち寄する波の音も、極めて靜かに聞かれます。佐世保の雪の一夜は、かうしてだんだん更けてゆきました。

三 佐世保軍港

佐世保の軍港は、之を横須賀、吳のそれと較べると、著しく大きく、且つ又其の或種の設備も、餘程よく整つて居るかと思はれます。試みに上甲板に立つて見渡しますと、港内には敷島、肥前、淀、沖島などの堅艦が、その巨艦を浮べて居

軍需品の倉庫

ます、陸岸の方には、軍需品の倉庫が、所狭きまでに建ち並び、市街は丘に接してたてられ、しかも市況は甚だ賑かであります。

思ひ回せば既に十年の昔語りではありますが、日露の風雲漸く急なるに及び、東郷中將（今の元帥）の聯合艦隊は、こゝに集合して、當局の命令を俟つたと云ひます。聞けば現在私達の艦が、繋留されて居る浮標の、すぐ西隣りに、旗艦三笠が繋かれ、更に其の南には、第一戦隊の初瀬が、司令官旗を掲げて居り、續いて朝日、富士、八島、敷島の六大戦艦が、舳艫相啣みて扣へ、第二戦隊の装甲巡洋艦出雲、磐手、浅間、常磐、八雲、吾妻の六大巡洋艦は、すつと沖の方まで、其の軽快なる體を相連ねて居たさうです。

のみならずその他、當時日本海軍の各艦艇は、擧つて此の港内に集つて、盛んに煤煙を吐いて居たと云ふからには、其の光景が、どんなに勇しくも又、どんなに壯大なものでありましたらう。

佐世保の軍港は廣く、波も穏かで、實に理想的の根據地であります。私達は

理想的の根據地

四海の鎮守府

この港内に約十日間も居て、海上下の作業にも、陸上での教練にも従事しました。山は緑の色いよく濃く、口は暖かにして、波更に立たず、かくて帝國西海の鎮守府をば、思ふまゝに見盡して、いよく外洋に乗り出すこととなりました。

一月十二日、今朝は珍しく風もなく、空は心地よく晴れて、ちり雲一つない、その日の午前十一時と云ふに、私達は佐世保軍港にグッドバイを告げて、波路はるけく、數百哩を蹴破つて、異郷の月を眺めることとなつたのでした。

肥前や敷島の乗組員も、甲板に立ち並んで、私達の出港を送つて呉れました。で此方も又甲板に整列して、先方に答禮しました。あゝ見送る艦、見送られる艦、よしそれが、ほんの暫時の別れとは云へ、遠く故國を辭する旅だけに、胸中の感慨も無量でありました。

日本の内地を出はなれたが最後、もう美しい緑の島山もなく、海の水さへ濁つて、心地が悪いと、豫て聞いても居りましたから、私は其のみどりの島山が、見

★佐世保軍港

ゆるる限り、何時までもく、ハンドレーに身をまかせて、飽かず眺め入つたの

(二一八)



(場 事 状)

であります。艦の速力は、此の日も原速八節でありました。風もありませんので、煤煙は、一直線に馳いて居ます、其の煙の盡きる所が、日本の内地であるが。時の經つにつれて、遂に其のなつかしい島影さへ、見失つてしまひました。雙眼鏡を取り出して見ましても、どうやらもう目には映じません。

三 緑の島よ

少年諸君！私は今から、いよいよ日本の土地と別れるのです。緑の松が、一めんに

茂つて居る日本の美しい島、夫れが私共の目から、だんく遠ざかつて、やがて水と天と相接する彼方に、消えうせてしまひました。名を聞けばなつかしい五島列島！

空は清く晴れて、風もあまり御座いませぬ。併し夫れでも、さすがに外洋ですから、波も相當に高く甲板の上で見ると、見渡す限り、千萬無量の小さい白い蛇が、波の上から、湧き出しては消え、消えては又湧き出します。何とよい景色でせう。私等の艦は、此の蛇の群の中を、突破して、艦首に白い波を立てながら、例の如く原速八節を保つて居ます。

煙突から噴き出す黒い煙が、西の方から吹いて来る風に送られて、海面に長い筋を引張つた様に見える、其の煙の方には、まだ日本の五島列島が見える様ですから、雙眼鏡で見ましたが、矢張り海ばかり、何も見えません。

何と広い海の景色でせう！！
何と壯大な海洋の有様でせう!!!

★緑の島よ

(二一九)

私達はさう云ふ感歎の辭を發する外には、何とも云ひ現はし様のないことを知つたのです。

二番艦の吾妻は、今本艦と約一千メートルの間隔を置いて續航して居ます。煙ばかり見えて、日はやがて暮れました。

三 航程五百哩

遣唐使

むかしの遣唐使や、遣明使は、不完全な船に乗つてかう云ふ大海を渡つたのかと思ふと、其の勇氣に驚きます。さればこそ彼等は、或は途中で覆没し、或は再び日本に歸ることが出来ないで、空しく彼の地に止まり、日本の空を望みながら、果敢なくなつた人もあります。今私共の乗つてるのは一萬噸近くの裝甲巡洋艦ですもの、どんな大きな波が来ようとも、どんなに天地が荒れようとも、動搖こそすれ、波や風のために、沈没する憂ひはございません。佐世保から上海までは、航程實に四百八十哩、漫々たる支那海を突破するだけに、内地航海より

西部標準時

航海日記

は、どんなに面白いかしれません。翌日の朝になつて、時計は西部標準時を用ゆることになり、随つて一時間だけ遅れました。今日もよい天氣かと思ひの外朝からどんより曇つて、無線電信には、絶えず警報が傳へられます。

さては雨師風伯が、力を協せて、吾等を支那海の中央で惱ます所存かと、私はあまりよい心地も致しませんでした。

丁度此の日の晝食時に、私は士官次室の机にもたれて、航海日記のペンを走らせて居りますと、俄かに舷窓が暗くなつて参り同時にドツと音して奔流が打込んで来たのです。もうこゝは黄海に近いので、波の色までが、少しく黄色を帯び、日本の内地で見た様な、美しい色ではなかつたのです。

たかい舷窓の一つから、打ち込んだ水ですから、そんなでなからうと思ふと、脚下三寸ばかりの深さは水となつて、艦の動搖するにつれて、水の動く有様の物凄さ。

三七 猛浪襲來

赤い腹

艦體の動搖は刻々はげしくなつて來ました、風も吹けば雨も亦時々降り、濁り切つた水が中甲板から突き出て居る大砲の頭を乗り越えて行く、艦は其の度に赤い腹の一部分を現して如何にも苦しげに見えます、室内に居ては自然心地も悪くなりませんから、時々上甲板へ出て、新しい空気を吸ふのですが、何のことはない、泥水に酔つた鮎か金魚の様なもの、しかも其の上甲板さへ、展望が思ふに任せず、支那特有のジャンクが、彼方此方に、此の猛浪にもまれながら、漂蕩して居るばかりです。

支那の海國男兒

日本人は海國男兒などと口では威張つて居ますが、支那人にだつてやつぱり海國男兒があると思ふと、私は自分で氣恥づかしもなりましたから、最早やどんなに浪が荒れても、恐れはせぬぞと、決心の臍を固めたのであります。今度の航海は、兎も角私が乗艦以來の難航海で、艦の速力も著しく減殺せ

られ、豫定の吳淞著も少しく遅れ氣味となつたらしいので、夫れを取り返す様に、汽力も聊か加はつたと聞きました。

三八 パイロット

大洪水の濁り水

佐世保を出てから今日で三日目、其の午前九時頃より、海水は著しく赤くなつて來ました、昨日は黄色でしたが、今日は赤いのです、夫れが全く大洪水の時の濁り水よりも、更に一層赤いのですから、見ても少しもよい感じが致しません。之は何故かと申せば、支那で著名の楊子江が、水と共に溶けた泥を運んでは、海の中へ注ぐからで、楊子江には、可なり上流までも、軍艦や汽船を通じ、下流の河口に近い所では、幅が八十里もあるさうで、實際私共は、楊子江中に来て居ながら、どうしてもそれが河だと云ふ感じが起りませんでした。

河ならば岸が見えませう、いくら廣くても、遠い所にでも、岸が目に入りさうに思はれますが、河幅八十里と云ふ大楊子江は、四面茫々として、只滂湃たる濁

★猛浪襲來

パイロット

楊子江

流が逆捲き立つばかりです。

さう云ふ風に楊子江は、絶えず上流から泥を運び、底は少しも見えませんが、水の流れる筋道は、殆ど毎日の如くに、多少宛變化をするから、どんなに熟練した航海者でも、こゝに艦を乗り入れることはどうしても出来ないのです、よし又さう云ふ大膽なことをしました所で、萬一座礁でもしたら、再び取り返しがつかれません。

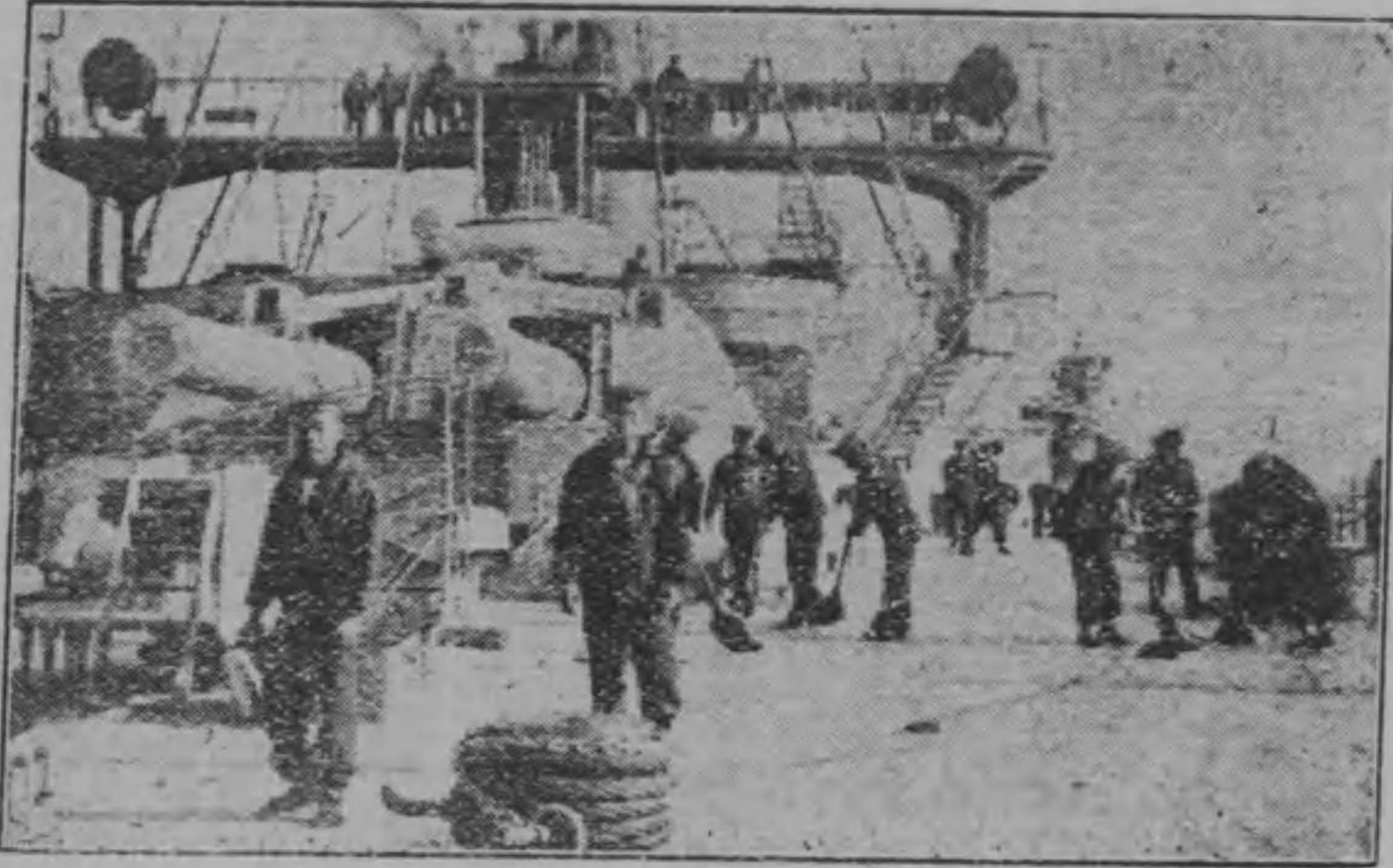
パイロット

夫れには又よい者が居るので、パイロット即ち水先案内者が、艦に乗り込んで来て、一々水路の指圖を致します。

楊子江に於けるパイロットは、専ら英國人が夫れに當つて居ます。極めて大膽な、かつ敏捷なる行動をするもので、主に英國人の老船長などが、其の職に當るのなさうで、之を雇ひ入れるには、豫めパイロットの會社へ入港の時刻を知らせて置きます。

するとどんなに荒天の日でも小さいパイロット船が漕いで來るので、私共は

ズツクの輪



(除 掃 板 甲)

其船が奔騰せる濁流を平氣で乗り越えて、本艦に漕ぎつける大膽な手際には、全く一驚を喫するの外ありませんでした。

三 公用使

横須賀、吳、佐世保、舞鶴、さう云つた土地に居る人は、必ず毎日の様に見かけるであります。白いゲートルをつけた水兵が、白いズツクの鞆をかけて、さも忙しうに、町の中を歩いてゐることを。

此の水兵が有つて居る鞆には、筆太に軍艦の名が記してあるから、一寸一目見たゞいで、何艦の公用使であるか、直に解ります、軍艦が豫め港灣に入港するまへ

★公用使

には、先づ以つて『入港用意!』の號令がかゝります。すると同艦の將士等は、夫れ夫れ自分の受持配置について、其の用意を致します。例へば舷門を築いたり、投錨の準備をしたり。

艦は微速力で以つて、目的の錨位にまで進行してゐます。併し波を蹴るクスリウの響きは、餘程物靜かに聞えます。山は近く迫り、市街の聲、人馬の行き交ひ、さう云ふ物象に、だんく近接して、浮世の風が、艦上の人々の耳に訪れて來る時の樂しさ、夫れは確かに海上生活者の、樂しみの一つに加へなければなりません。

さて舷門が未だ出來ないうちに、もう上陸の用意をして居る者があります。夫れは誰かと申しますと、今云ふ公用使で、公用使は誰よりも早く、一ばん最初に上陸し、又一番最後に歸艦するものです。

投錨の時間が近づきますと、公用使は既に用意を整へて、『公用使が出来ます』

と、各室を訪れて歩きます。航海中に認めて置いた手紙、陸地で買つて來て貰ひたいもの、夫れ等は何でも、頼むことが出來ますが、さて此の公用使が、一ばん最初に行く所は、其の土地の郵便局で、こゝには方々から出された手紙、新聞小包の類が、山の如くに止め置きになつて居りますから、公用使は夫れを受取つて歸艦するのが、最も重用の任務であります。軍艦と陸地とを接續する定期汽艇は、大抵朝六時頃から晩の十時半頃まで一時間半、若くは二時間毎に(其の土地の如何によつて多少の増減はありますが)屹度出るものゝ、公用使は普通一日二回と定まつて居るだけに、其の持ち歸る郵便物は如何ばかり全艦の人々の鶴首する所であるか、殆ど陸上の人には想像も及ばない事です。

四 艦内の郵便

長途の航海になりますと、新聞も來ず、郵便も來ませんから、何だか陸地の人から見はなされた様な感じが致します。併しいよゝく入港となると、逸早く公用

使が出来ます。公用使の出るのを待つて手紙を書いて居ては、艦内の第一便に間に合いませんので、私は何時も、航海中に手紙や葉書を認める事にしました。

郵便切手や葉書の類は、酒保に賣つて居りますから更に不便を感じませんが、同じことなら其の土地の風景繪葉書の類を出した方が、貰つた人も趣味があらうと思ひますから、上陸した毎に、其の土地の名所繪葉書を買つて出す様にして居りました。いつも入港の前夜に、郵便を認めて、士官次室備へ付の郵便函へ入れて置きますと、公用使が来て、夫れを纏めて行きますから、大層都合が好いのです。

繪葉書

先任衛兵伍長

艦内生活者にとつて、何が一ばん楽しいかと云つて郵便の来る程愉快なものはありません。第一の公用使が歸つて来る時には、いつも屹度大きな郵便物の包みを持ち歸るのですが、夫れは一旦上甲板の先任衛兵伍長の手へ渡つて、其處で各室に分配されることゝなつて居ます。『公用使はまだ歸らぬだらうか』かう云つた言葉が幾度も各室で交はされるうちに、やがて其の内の一人が上甲板からやつて

来て、

『盛んに來てるよ今撰つてるから、もう直に持つて來る』

と、報告しますと、

『ちやア行つて見て來よう』

と、わざ／＼先任衛兵伍長の所へ押しかけて行つて、郵便物分配のお手傳をする者があると云ふ有様。中には、

『何だ僕の所へは、たつた葉書一枚か』

と、失望して引き下る人もあれば、封書の二三通も受取つて、ホク／＼もので自分の室に引込む人もある次第、恐らく此の間の趣味は陸地の人には味ふことが出来なからうと思はれます。

郵便物分配

四 半舷上陸

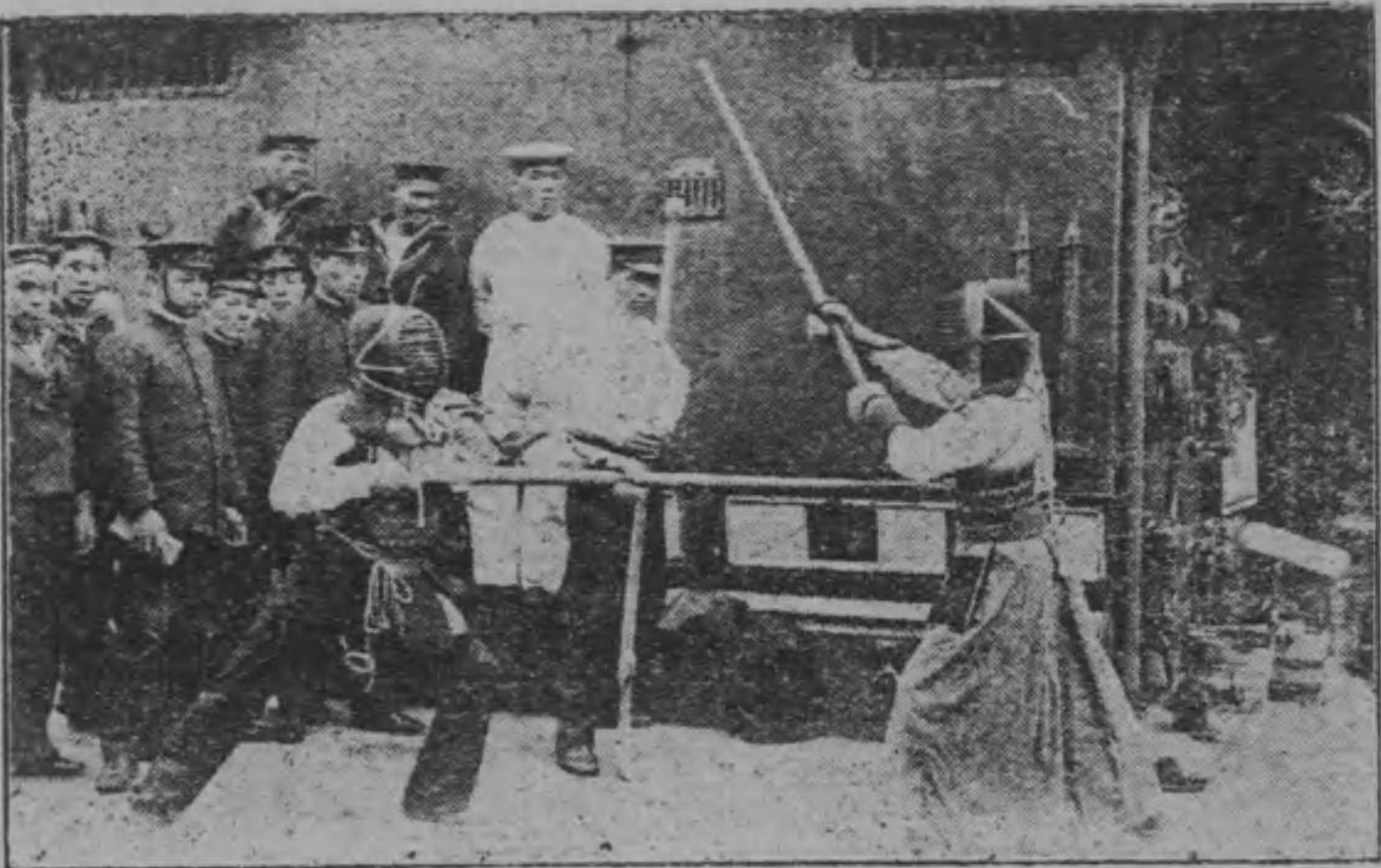
長途の航海をして、所定の港に入つた時には陸上の見學として、時々半舷上陸

陸上の見學

が許されます。一體軍艦の配置は、右舷直と、左舷直とに分かれて居ますが左右

の兩舷直が、同時に上陸してしまつては、艦内ががらあきになりますから、是非とも二度にわけて、所謂半舷宛の上陸をさせる事となります。

此の場合には、上陸員は後部上甲板に集合して、副長の訓示を受け、又場合によっては軍醫官の衛生講話などのあることもあります。長く海上にあつて、人間界の空氣に接しなかつた兵員等に、上陸！わけても親しい战友と、手を携へて上陸し、思ふままに數時間を遊び暮らす愉快は亦格別のもので、彼等の面貌には、皆一様に、云ふべ



(銃 銃)

からざる喜びの色を浮べ、いそぐとして、一刻も早く、陸地の土を踏み度さうです。かくて一應訓示が終れば、豫め用意されたカッターが、左舷の舷梯下に廻してありますから、夫れに乗つて上陸棧橋に向ふので、若しも鎮守府の所在地ならば、下士卒集會所の設けが御座いますから旨い料理に舌鼓を打つことも出来れば、廣い清潔な淡水の湯に、十分垢を流すことも出来るので、水兵の身にとつては、此の半舷上陸位愉快なことは、他に求め得られないのです。

三 荒天準備

支那東海を航海中に、俄かに天候が變つて、暴風襲來の兆候が現れましたから、艦内では既に其の前夜就寝前に、荒天準備を整へたのです。一體此の荒天準備部署の要旨と云ふのは、『碇泊中若くは航海中、荒天に際するか、或は荒天の虞ある時、迅速艦の保安に必要な事項を處置するにあり』と云ふのです。然らば其の必要な事項とは、果してどんな事かと云ふに、『航海中にありては、

★荒天準備

ライフライン

總て可動物を繫止し、舷窓、盲蓋、及び所要の昇降口、天窓並に中下甲板以下の防水扉、防水蓋を閉鎖し、甲板にライフライン（甲板を通行する時、之を保持して身を支ふる綱）を張り、人員滑走の虞ある所には砂を撒布し、艦内所要の個所に、監視當番を配し、火災に就て一層の注意を拂ふ」等が、其の重なる事柄であります。

勿論かう云ふ事は、平生から、夫れく受持を定めて、手落のない様に、訓練がしてありますから、一令の下ると共に、直に整備する様になつて居るので、尤も今度行はれたのは、荒天準備の全部ではなく、其の一部分に過ぎなかつたのですが、夫れでも可動物は繫止せられ、舷窓は密閉され、中甲板の砲門なども、鐵扉を閉してありますから、何所よりも漏水の憂ひ更になく、艦は怒濤と戦ひつ、西へ西へと進みました。

四 北馬鞍島

水と天との外には、一物も目には入らない支那東海の海上も吳淞から南東七十海里ばかりの沖合に北馬鞍島と云ふ島山の影が見え出して、はじめて目を遮るものが出来ず、一月十四日の拂曉には、此の島影が雙眼鏡裏に映じて来るべき筈なのに、一向島らしいものがないので航海長の心配は並大抵でなかつたらうと思ひます。

夫れは何故かと云ふに、楊子江の淺水部を通過するには、一定の時刻がありますから、若しも其の時刻に遅れようものなら、更に或時間だけは、洋上に漂泊しなければなりません。で午前七時頃からは、從來の原速八節を、九節とし十節とし、更に十二節まで出して、只管前途を急ぐと云ふ有様、殊に佐世保出發以來、一度も天測が出来ないために風壓や、潮流の作用や、羅鍼の誤なども、推測によるの外なかつたのです。

夫れに此の航路の北の方には、五六箇の暗礁さへあるので、此の際如何様にもして、出来るだけ速かに、艦の位置を確める必要がありました。が、濛氣深く立ち

★北馬鞍島

荒天準備の一部

航海長の苦心

北馬鞍島

罩めて、殆ど執るべき方法さへなかつたのです。既にして午前十時頃になつて、愉快なる島影は人々の雙眼鏡に映りました。しかも夫れは首さし延べて待つた北馬鞍島であつたので、豫定の時刻よりは、三時間ばかり遅れたことが、はじめて解りました。けれども幸ひにして、艦は思つたほど北にも流されず、殆ど豫定の線上を航過した譯で、夫れより楊子江の濁流を溯つて、十一時半頃には、水先船の居る航路浮標にまで達しました。

四 吳淞錨地

パイロットは、我が艦隊の漂泊しつゝある間に、早くも乗艦しました。濁流漲つて、底さへ知れぬ楊子江の秘密も、此のパイロットに出逢つたが最後、ドシドシ観破られて、其の魔力を揮ふことも出来ないのです。實にパイロットの熟練なる技術は、只々驚くの外ないので、海圖を見るのでも

江中の秘密

東沙

なく、羅鍼盤を覗かうともせず、更に又目標となる様な山も島もないのに、或は面舵、或は取舵と命じ、巧みに淺瀬をよけて、とうとう危険多き東沙を通過しました。しかも艦は十四節の速力で、愉快なる溯江を續けたのです。

此の様に午後三時半には、早くも吳淞錨地にまで達しましたが、パイロットは此所が最もよい錨地だと云ふまゝに、艦は吳淞燈臺の東約一公里突の江心に、兩艦揃つて錨を卸したのであります。

私共は艦橋に立つて、四方を見渡しましたが、只赤く濁つた急流が、威勢よく舷側に激して流れ行くばかり、左舷遙かに、一帯の陸地が、雲か霞かと思はれる程、幽かにく横はつて居りました。港へ入つたのでもなく、人家が見えるでもない、大きな河の中心に、私共はかうして一夜を明すことになりました。

明日は此の錨地から、水雷艇に乗つて、上海へ見學に行く筈なので、ハンモックへ入つてからも、よくは眠られませんでした。

午前七時艦發と云ふので、番兵に頼んで、いつもの起床時間よりは、ずつと早

七時艦發

く起して貰ひました。洗面所へ行くと、いくらか艦が動揺して居ます。錨地に著

いて居ながら、かうして揺れるのは、あまり心地よいものでは御座いません。

士官室の舷窓から、外の景色を見るに、

ただ霧が深く立單めて、殆ど一寸先も見えぬと云ふ有様、これでは今朝の航海も一寸

困難に思はれました。

本来ならば滬甯鐵道によつて、吳淞から

行けばよいのですが、少尉候補生の水路研

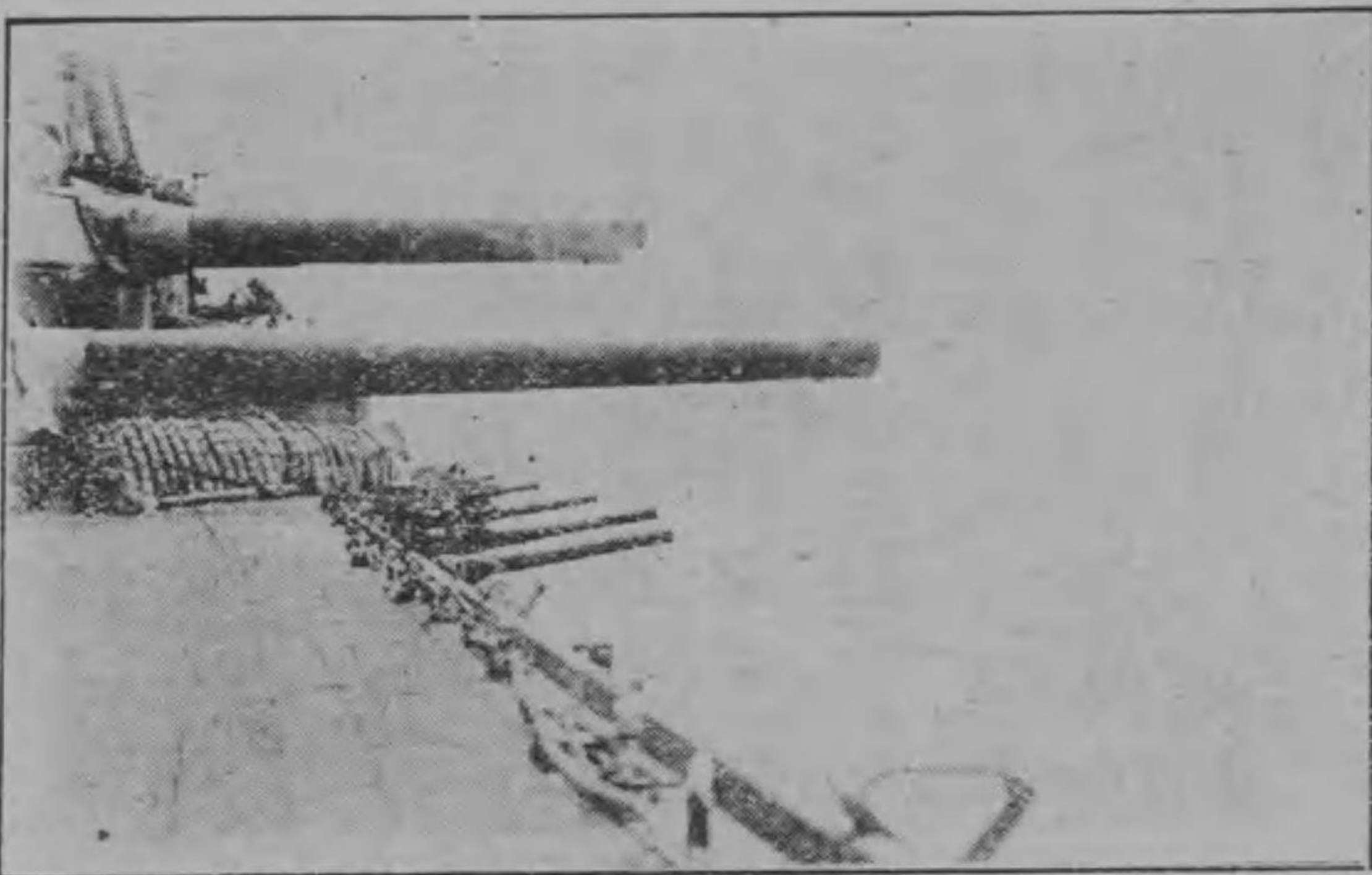
究と云ふ譯で、わざ／＼水雷艇に撓艇を繋

ぎ合せて、旗艦と吾妻とから各々一艘宛出

したので、私共も其の水雷艇に、便乗を

許された次第です。

滬甯鐵道



(比叻公試發射の景)

望 黄浦江

楊子江の濁つた水は、滔々として船側を打ち、流れ逆く有様は、見るからに物

凄い光景で、しかも一面濃霧に閉ざされ、身邊五十尺を距つれば、何物をも見るこ

とが出来ません。午前七時淺間の艦載水雷艇は分隊長黒羽根大尉の指揮下にある

少尉候補生の撓艇を引ッ張り乍ら、艦側を離れましたが、何分にも霧が深くて、

展望もきまませんから、頻りに汽笛を鳴らしつゝ、徐ろに進航するので、前後に

も、左右にも、のべつ幕なしに、霧中警鐘が耳を破つて、至難の航海を續けまし

た。

折から『取舵一杯!』の號令がかりますから是は一大事とよく見れば、直眼

の前に大きな海坊主!と思つたのは三菱の大治丸:其の船の腹を擽つて危く衝

突を免れ、猶も前路を辿りましたものゝ、到底此の霧では御先眞暗で手の出しよ

うもないので、最早や前進を思ひ止り河心に錨を投げ入れて、霧の晴れるのを待

サイレン

大治丸

ジャンク

つばかり、其の心細さはありません。けれども此所は、もう楊子江の支流の黄浦江であるだけに、川幅も餘程狭く、對岸も近い故でありませうか、犬や鶏の聲までが、霧の中から手に取るやうに聞き取れます、また支那特有のジャンク、たゞ一口にジャンクと云へば、あまり大きくもない様に聞えますが、中には大砲を備へた様な、大きなものもあります……夫れが二つも三つも、霧の中から浮び出て、私達の前を通つて行く、中には美しく彩つたのもありますし、又特別に大きな帆を張つたのもあつて、何のことはない活動寫眞を見てゐる様で、寒い川風に吹かれながらも夫れほど退屈を感じることはなかつたのです。

吳 上海見物

吳淞バー

約一時間ばかりかうして待つて居るうちに、さしもの濃霧も次第に晴れ、日の光さへ見えて來ましたから、再び錨を巻いて進行を始めたので、有名なる吳淞淺瀬を過ぐる頃からは、殆ど霧も收まり、西岸の陸地の影を望むことも出來まし

軍艦マルコ
ホロ

税關棧橋

た、支那の詩に江畔の楊柳だの、或は江南の梅だのと云ふことが、よく歌はれて居ますが、實に此の黄浦江上から見た兩岸の風景はどうしても、支那の詩文を思はずには居られませんでした。だん／＼湖江するうちに、世界各國の軍艦や汽船が澤山目に這入つて來ます。伊太利の軍艦でマルコポロと云ふのや、英國や獨逸の河用砲艦や、我が第三艦隊の新高や支那の軍艦や、夫れ等が河の中に碇泊して居たり、或はジャンクや支那の舊式汽船などが、宛然織るが如くに往來して居ます。其の中を我が二隻の水雷は、鮮かなる軍艦旗を、河風に翻しつゝ、意氣揚々として、進み、やがて十二時近く税關棧橋へと上陸しました。

私達は此處で候補生一行と別れて、五六人の士官次室士官と共に、まづ公園から、順次上海の名所を見學して廻りました。

上海の公園

蘇州河が黄浦江に合流する所、右岸三角形をなし、水中に突出して居る極めて静かな場所、左岸には宏壯なるアスターハウス、獨米の領事館に隣りした日本

★上海見物

公德心

の領事館を望み、流れに沿うては雄大なる日本郵船會社、同倉庫、及び世界各国の艦艦巨船を眺め、上海としては一番よい位置で、亦風景に富んで居ります。公園の中央には音楽堂があります。其の右には噴水があり、左には四季の花壇があつて、人の心を慰めますが、此の園内へは支那人は、外國人に伴はれた雇人の外は、一切入ることが出来ず、日本人も婦人か子供の外は、洋服か袴を着けなければ、入園が出来ませぬ、夫れと云ふのは、東洋人の中には、往々にして、公德心を辨へぬ者があつて、醜態を演じたりする事があるからだと云ひますが、如何にも残念な話では御座いませんか。

バンドの記念碑

公園を出て南に向ふと、黃浦灘に沿うた芝生の中に、千八百九十六年八月十三日上海の海岸に於て、暴風のために難破し、七十七人の乗組員を失うた、獨逸の砲艦イルチス號の記念碑があります。記念碑と云つても折れた鐵の艦橋で、之を見ると當時の慘憺たる光景が、眼の前に見ゆる様です。

イルチス號

パークス氏

こゝから南一町餘の、南京の江岸にも、一箇の偉大なる銅像が、屹立して居ます。之は當時の外交家として、敏腕を揮ひ、東洋諸國に英名を轟かしたサー、ハーリー、パークス氏の記念像なので、氏は明治初年より十二年間本邦に駐劄した人、此の縁深き偉人の像に接すれば、誰しも四十年前の事を思はずには居られませぬ。

上海城内

上海の市街は全く歐化して、支那人は只歐米人のために、勞働して居る者として思はれませんが、足一度城内に轉ずれば、こゝでは十分に支那趣味を味ふことが出来ませぬ。

支那趣味

勿論城内と申しましても、城壁らしいものもなく、狭くて雑踏せる所に、唐木細工店、陶器店等が軒を並べて客を呼び、汚らしい乞食が、旅客の跡を追かけて來ます。夫れに豚を煮る臭氣が、ブン／＼と鼻を襲うて、逆も永くは居られませぬ。

★上海見物

尤も其の一部分には、汚いながらも池があつて、湖心亭と云ふさも美しい名の付いた建物が其の池の真中にあつて、旅人に茶を吞ませて居ります。

四 物騒な上海

私達は日本人の經營して居る旅人宿で、一夜を明しましたが、夜になつたが最後、著流しなどでは決して屋外へ出ることが出来ません。宿でも注意して必ず洋服をお召しになる様にと云ひます。

蓋し此の地の警察は、たゞ歐洲人に對して、特別の保護をするだけで、東洋人には何の保護もしませんから、夜の市街は所に



(比叡公試發射の景)

よつて極めて物騒で、車夫などにも十分に注意を拂はねばなりません。長く此の地に住んで居る人は、様子も分つて居ますから、危険なものと思れば、用心してかゝりますが新來の人になると、矢張り日本に居る様な考へで、比較的暢氣に構へ、却つて賊のために痛い目を見ると云ひます。東京ではむかし生き馬の目を抜くと云ひましたが、上海では車にのつて走つて居る旅客の帽子を、横合からヌツと猿臂を延ばして、掠め取ると云ふ、早技を演じます。

四 沈没したら

或日のこと、四等水兵が、士官次室へやつて来て、士官から何かと説諭を受けて居ました。此の兵は新たに乗艦した者で、艦内に於ける作法も、まだ十分に知らぬらしく、其の點に至つては、私とあまり大差ない者らしく思はれました。士官は彼に對つて、

『コラ、貴様は若し此の艦が沈没したらどうして逃げるか、知つてるか。』
と、問ひかけました。四等水兵は此の間に、只顔を赤らめて居りましたが、實は私にもよく解りませんでした。

所が其の翌日の事、艦長に用事があつて行つた歸りに、何心なく途中の壁を見ますと、其所には艦長はじめ各分隊員が、最後に處する方法手段が、一覽表になつて明かに掲げてあります。

夫れによりますと水雷艇、撓艇、小蒸汽の類をはじめ、最後に有り合ふ木片を以て、筏を組んで避難する事までありましたから、私もギョツとして、胸に釘を打たれた様な感じを起したのです。

夫れは又何故かと申しますのに、私は元々乗組員ではありませんから、どの分隊にも屬して居らず、随つて配置と云ふものを有つて居らぬだけに、平常何の教練にも、どの點檢にも殆ど出る必要はありませんが、萬一沈没の場合には、逃げる手段に於ても、何等の權利をも有たないのです。

丁度支那東海を航海中でありました、可なり波が高く、艦の動搖も烈しかつたので、軍醫長が私に對つて、尤戲半分に、

『沈没するかも知れない、こんな所でやらうものなら先づ一人も助かるまいよ、君の如きは定員でないから、萬一の時には外一人と云はれる組だね。』

と云つて笑つて居ました。私は別に深く氣に止めも致しませんで、

『左様！さうなると甚だ幅が利きません。尤も陸地につけば、大いに威張りますよ。』

と、笑つては居たものゝ、實際の所あまりよい心地はしなかつたのです。

四 スウインギング、ブーム

軍艦が入港しますと、小蒸汽や水雷艇や、カッターや、ビンネースの類を續々ポートデツキから下します。小蒸汽の如きは、入港前からドン／＼石炭を焚いて、下すと同時に、活動の出来る様に、ちやんと用意をするのであります。

所が是等の小艇は、夫れを使用せぬ場合には、艦の附近に縛つて置かなければ、波のために掠はれたり、或は舷側へぶつけられて粉微塵にされるような恐れが御座いますから、そこで此のスウインギング、ブームと云ふものが必要になるのです。

スウインギング、ブームは、軍艦の横腹から突張出て居る、太い鐵の棒なので、其の棒からはジャコブス、ラダーと云ふ繩がぶら下つて居まして、小艇類を繋ぐ様になつて居るのです。

さて此のスウインギング、ブームは、航海中には何の役にも立たず、却つて邪魔になる位ですから、すつと奥の方へ引込んで居て、寝て暮しますが、入港すると俄かに飛び出して、御用を仰せつかるのです。そこで此のスウインギング、ブームと、最もよく其の性質の似てるのは、私等如きものであります。私は海國男兒などと威張つて見た所で多年海上の事に慣れた軍人と、どうして伍を一にすることが出来ませう。まことや航海中の浪の高い時にはかのスウインギング、

ラダー
ジャコブス

弱蟲

ブーム同様中の方に引つ込んで、滅多に上甲板へは出られないのであります。

所がやがて入港用意の號令もかゝり、陸地の繁華な景色が見えだし、波も全く收つてしまひますと、弱蟲の便乗者が眞先に上甲板に走り出して、もうはや上陸の用意をするので、其の時には例のスウインギング、ブームも亦、細長い體を、左右の兩腹に突き出すことゝなります。

かう云ふ譯ですから、軍艦では『スウインギング、ブームの様な奴だ』と云つて、非常に馬鹿にされます。併し夫れも乗艦二三日の間で、時日が経つて、海に馴れて了へば、敢て斯る冷笑を蒙るまでもなく、寧ろ怒濤狂亂する折から飛沫を浴びつゝ、高き艦橋上に、其の半身を委せるだに、少しも心地の悪き事なく、却つて云ひ知れぬ愉快を感じ、満身の勇氣が張り裂けんばかりに起り來るものであります。

吾

吳淞出發

★吳淞出發

★海上生活

一月十九日英國巡洋艦ニューキヤツスルと、吳淞の沖で禮砲を交換して、艦隊は之より、北へくと向ふのです。渤海灣では必ずや氷點下何度と云ふ、恐しい



(號 信 旗 手)

大切なものは、みんな防寒準備が出来ました。士官や水兵も、當直や其の他で上甲板以上に立つ人は、何れも丈夫な重い外套を給與されました。聞けば其の外套は過ぐる三十七八年戦争の時のださうで、之を著て旅順へ向ふ……まるで此の前

の戦争を繰り返す様な氣が致します。

楊子江の濁流を凌いで艦はだんく北へ向ひます。刻一刻寒氣が加はり、夫れにつれて海の水が、次第に澄んで來ました。

試みに艦橋に立つて見ましても、最早や目に入るものは、二番艦の吾妻が、物凄く艦首に白波を立て、進行して居るだけで、一鳥飛ばず、一木の縁なく、四方たゞ漫々たる海洋の水、其處を例によつて原速八節で、悠々と進行して居る、私達は今更の如くに、宇宙の廣大なのに、驚かぬ譯には參りませんでした。

五 山東岬角

三日目頃から、急に寒さを覺えました。吳淞沖に居た頃には、ストーブの戀しい様なことは、更になかつたのですが、今では夜中二枚の毛布だけでは、寒い！と云ひたい位、夫れも陸上の家と違つて、隙間も風さへないのに、かく寒さを感じるからには、餘程其の度が激しいのでせう。

★山東岬角

威海衛

丁度午前十一時頃でした、前艦橋に居られる艦長から、『午前十時半頃より山東岬角の山が見ゆる』と、通信されましたから、私は直に後部の艦橋へ登つて見ますと、果して左舷遙かに鋸の齒の如き島山が、薄ぼんやりと見えて居ります。英國の威海衛、獨逸の膠州灣、さう云つた所が、みんなあの岬角の地続きにあるかと思ふと、序に其所へも立ち寄つて見たいと不圖心に思つて見ました。なせならば歐洲列國が、東洋方面に於ける策源地が、皆そこにあるからです。

二日半陸地を見ぬのでも、既に陸がなつかしい、漫々たる海上で、遠いこの陸地を見てさへ、何となく嬉しい感じが致します。私は寒い風に吹かれながら、大陸の一角の見ゆるまで、いつ迄もく見送りました。そうして此の日は暮れてしまつたのです。黄海の濁浪は、夜に入ると共に、刻々其の威を振はうとします。

黄海の濁浪

三 旅順入港

老鐵山沖

目を覺してみると、今朝はいつになく遅いので、漸く起床時刻に起き出して、衣服を更め、特に防寒の準備もすつかり調へましたから、大層體が重くなりましたが、夫れでもおかげで上甲板に立つても、脊中に汗が出る位、夜はまだ全く明け放れません。前面を見ると艦は首尾よく五百七十哩を突破して、老鐵山沖に来て居ります。一時速力を緩まして、各種の教練を行ひ、再び波を蹴つて、悠々と目的の錨地に著かうとして居ます。

間接射撃

老虎尾半島の燈臺は、猶海面に光を放つて居ます。赤く禿げた旅順の山々は、寒風と戦ふものの如く、已にして入港用意の號音は高く全艦内に響き渡り、やがて黄金山低砲臺下の錨地に、兩艦艙を揃へて錨を入れ、旗艦は當鎮守府司令長官に對する禮砲を發射しました。轟々たる大砲の響は、山に應へ海に響き、往年旅順の間接射撃もかくやあらんと思はるゝばかり、砲煙天地をこめて、旅順の山も一時全く私達の視界から、離れ去つた様に思はれました。

併し旅順の氣候は、思つた程でもなく、實戰の經驗ある人々も『旅順らしい氣

★旅順入港

分がしない』と云つて居ましたが、夫れはつまり寒くないと云ふ事なのです。

五 白玉山参拜

表忠塔

白玉山は旅順市街の直ぐ背後にあるので、頂上には納骨堂もあれば、東郷乃木兩將軍の發起で建設された見事な表忠塔もあります。艦内の將士等は、午後から上陸して、納骨堂へ行きましたから、私達も一緒に行きました。

此の日は至つてよい天気でしたが、夫れでも波は可なり高く、小さな汽艇は、其の波に揉まれながら、一上一下、今にも轉覆するのではないかと、是迄しばしばさう云ふ目に逢ひながら、随分肝を冷したのです。

黄金山砲臺

渤海灣の波は、此の通り高く物凄いです。一度港内に入つて見ると、殆ど池の如き有様で、鷗の夢を破る程の波も御座いません。左に見ゆるは黄金山砲臺、右は老虎尾半島で、其の先には老鐵山が、雲に聳えて立つので、過る日露の海戦には、廣瀬中佐等の閉塞隊が、十文字に閃く探海燈の下に、港口閉塞の難作

業に従事したので、私達は今、實地にかう云ふ場所に臨み、更に其の感慨を深うしました。

旅順八景

白玉山の納骨堂は、旅順戦に於ける海陸の忠死者を祭つた所で、其の前面には、石造の大塔が、屹然として雲際に聳え立ち、一陣の下に旅順の市街を見渡し、八景の勝さへ擇ばれてある位、振り返つて背後を見れば、日本軍苦戦の痕が、歴々看取されます。

私達が旅順へ行つたのは、寒い時節であつた爲かも知れませんが、其のあまりの淋しさに先づ一驚を喫しました。立派な煉瓦、石造等の家屋は、櫛比して居りますが、人の住んで居さうもない家が殊に多く目につきました。でたま／＼歩いて居る者は、支那人の労働者か、或は我が兵士で、此の地特有の二頭立の馬車が、時たま激しい音をたてるばかり。

警備艦

港の中にも警備艦の秋津洲が一隻居るだけ、戦争當時に較べますと、一體に港内が浅くもなつて、大きい船が入れないのかも知れませんが、委しい旅順の便りは

別欄で致しませう。

入合の鐘



(大 砲 發 射)

私は今でも能く記憶して居ます。十二歳の春に、父母の膝下を離れて、故郷から四里ばかりの、親戚の家へやられました。其の日の暮れ方に、近くの山寺で入合の鐘が、ゴーンゴーンと鳴り出した時、私は今更の如くに、故郷の家の事が思ひ出されて、獨り人なき窓に倚つて、臉に露が止めどもなく湧いて、頬にまで傳はり、胸を掻きむしられたことを。所が夫れから約二十年を過ぎて、再び同じ思ひを重ねなければ

吾 日没の淋しさ

一種の臭氣

なりませんでした。尤も目に涙を浮べたのではありませんが、心の淋しみを感じたことは、十二の春に獨り他家へやられた時と、更に變りはないのです。私かはじめで軍艦生活に入つた日、何となく艦内に一種の強烈な臭氣があつて、胸がむか／＼する所へ、やがて日没の『軍艦旗下し方』になつて、私は上甲板の所定の位置に立ちました。

日は山陽の山に入つて残光天の一方を染め、陸上の民家には、既に電燈が點つたらしい。私は此の嚴かな儀禮が濟んでからも長く甲板を去らうとはしませんでした。私の頭には、昨日東京を出て、東海山陽の鐵路數百哩を経て來たこと。女々しい様ではありますが、追懷の長い絲が夫れから夫れへと引き續いて、私は人もなき甲板に、いつまでも立ち盡して、過去の思ひに耽つたのです。

さる程に、残光全く山背に没して、山徒に勤く、舷窓を漏る電燈は、波上に幾百の金蛇を躍らせ吹く風も一入の寒さを覺えましたので、強て淋しい胸を抑へながら、士官次室のソハーに身を託して苦しい一夜を更かしたのであります。

★日没の淋しさ

東海山陽

五 戦歴板

日本の軍艦は殆ど何れも幾度かの戦歴を有します。現に我が浅間の如きも、北清事變にも従事すれば、日露戦争の時には仁川港外の第一發から講話談判の終りまで、各種の勤務に服したのですが、此の名譽ある戦歴は、後部シエルターデツキの海圖室の側に、大きな真鍮板に彫刻されてあります。試みに其の事歴を記して見れば、

- 明治三十三年八月三十日 清國太沽著以後北清事變に従事。
- 明治三十七年二月六日 佐世保出港以後日露戦役従事。
- 明治三十七年二月九日 仁川港外の海戦に参加。
- 明治三十七年二月廿五日 第一回閉塞隊掩護。
- 明治三十七年三月廿七日 第二回閉塞隊掩護。
- 明治三十七年四月十三日 敵の主力艦隊と旅順港外に於て海戦。

- 明治三十七年五月三日 第三回閉塞隊掩護。
 - 明治三十七年八月十日 黄海々戦に参加。
 - 明治三十七年五月より十二月まで 旅順口の配備に就く。
 - 明治三十八年一月より五月まで 北海道千島方面海峽監視。
 - 明治三十八年五月二十七八日 日本海々戦に参加勇戦す、捕獲艦アリヨール(石見)を捕獲し、舞鶴に回航。
 - 明治三十八年七月より九月まで 對島海峽哨戒。
- 附記 本艦は上記の如く、我が海軍中最も譽ある戦歴を有せり、諸子は如何なる場合に於ても之を忘れず、益々本艦の名聲を發揮し、他艦の模範たる様、奮勵努力すべし。
- と記されてあります。

所が此の戦歴板には、猶十分の餘白が残してありますが、果して同艦は先年獨逸の絶東艦隊を驅逐するために、山屋中將の南遣艦隊の一艦として、遠く南米方

面にまで出動し、常に他艦に先んじて、其の特有の武力を發揮して居りました
が、哀れやメキシコ沿岸に擱座して、現に修理中であります。併し恐らく近く再
び其の勇姿を見ることが出来ませう。

五 深夜の歸艦

軍艦に起臥する者は假令非番で上陸しましても、翌日の軍艦旗掲揚時には、必
ず在艦しなければなりません。陸上の知人の家などに、夜の更けるまで、語り續
けて、其所に宿泊しようものなら、翌日の陸發第一番の定期艇の間に合ふ様に、
埠頭まで来てゐると云ふことが困難です。

なせならば艦内には、ちやんと起床時間がありますが、陸上の知人の家などで
は、あまり早く起すのは却つて失禮の様に思はれてか、さう云つて頼んで置いて
も、起して貰へませんから、つい陸發の定期艇に乗り遅れる恐れが御座います。
夫れ故大抵は夜更けてから、寒い風に吹かれながら歸艦する人も少くありませ

ん、所が大抵十一時過になりますと、もう定期艇は歸つてしまつて、例のヌウイ
ンギング、ブームのヤコブスラダーにぶら下つて、眠つて居ますから、どうして
も通船を頼まねばなりません。

通船と云ふものは、小さな短舸で、軍港地には澤山居ります、即ち定期艇は專
ら軍人の乗用になるもので、通船は軍艦に出入する商人や面會人の乗るものゝ様
になつて居ります。で通船の船頭は、何艦は何所、何艦は何番のブイにかゝつて
居ると云ふ様なことは、よく心得て居ります。

けれども船頭だといつても日中働いて、もう寢ようとする時に、又沖中まで
漕いで行くのですから、夜更けてから通船を雇はうものなら、市中の車夫と同じ
様に、方外な價を吹くことがあります。陸ならば歩いて行く……と跳ねつける
ことも出来ませうが、海の上だけにさうも云はれず、みすく高い價を拂つて、
獨り淋しく歸艦する様なことも、少くはないのであります。

七 砲臺廻り

一月十三日早曉艦發、渤海の高濤を、微々たる艦載水雷艇に蹴破つて、再び旅順に上陸しました。此の日は殊に北の烈風凄じく、私達は幾度も覆没しはせぬかと、手に冷汗を握るのでした。夫れでも洋上に於て盆大の旭日が、東海の波を蹴破る壯觀に接した時は、思はず一同が萬歳を叫んだのです。

先づ旅順の水交社で、某陸軍將校から、要塞戰の經過に就いて、最も趣味ある講演を聞き、夫れより淺間艦長、水雷長、大軍醫と私との四人は、二臺の馬車を仕立て、戰跡廻りを致しました。

最初に記念陳列館に参りまして、こゝで要塞の概念を得、繪葉書や記念品を求め、更に支那町を疾走して、鶏冠山、東鶏冠山北砲臺、二龍山、望臺、松樹山などを見て廻りました。就中、東鶏冠山北砲臺は、望臺の前面に突出した、極めて堅固な砲臺で、我が軍はこの砲臺を化物砲臺とさへ呼んで居りました位、多

盆大の旭日

化物砲臺

大の肉弾を放つても、容易に奪取することが出来なかつたものです。

又露軍の猛將コンドラチエンコ將軍が、我二十八珊の榴彈砲のために、幕僚と共に、花々しい戦死を遂げたのもこゝで、同將軍の没後には、露軍の士氣が著しく沮喪したと云はれます。私共はそこで記念の撮影を致しました。望臺にしても二龍山にしても、亦松樹山にしても、殆ど人力以上堅固に出来て居ます。夫れを肉弾の強襲で奪はうとした我が陸軍の猛勇に至つては、實に鬼神の壘を摩すとも申しませうか。

榴彈砲

肉弾

五 二〇三高地

二龍山の掩蓋部で、艦から持つて來た行厨を濟ませ再び馬車を駈つて、二里餘の先にある二〇三高地へと志しました。二〇三高地は、同じ背面でも、遙かに西方に偏在して居ります。

露軍は此の高地の至る所に、十重二十重に塹壕を設け、手投げ爆薬を備へ、機

★砲臺廻り、二〇三高地

致命點

★海上生活

(二六二)

關砲を据付けたりして、要塞の致命點として死守しただけに、我が軍も幾度か失敗を重ねた上で、やつと奪ひ取つた所、今は砲弾形の記念碑が建てられ、乃木大將の筆で爾靈山の三字が刻まれてあります。

爾靈山嶮難攀。男兒功名期克難。鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。と、將軍が賦せられた通り、十年後の今日でも、猶當年苦戰の跡が、歴々として指點されます。頂上に立てば、背面も港内も一目に見えます。黄金山砲臺の外洋には、我が淺間と吾妻とが、丁度玩具の舟でも浮べた様に、私共の目に映じました。

しかも其の爾靈山の頂上には、二龍山や鷄冠山や松樹山で見た様に、永久的堡壘はありませんが、私共は何となく其所を去るに忍びず、寒い風に吹かれながら、いつ迄も立ちつくして居たので、やがて歸りの途で、枯れ果てた野菊の間に、當年勇士の枯骨を拾ひました。連れの大軍醫に尋ねますと、露人の大腿骨であらうとの事でしたから、なるべく人の足に踏まれない、安全の地に置いて、わ

高地の頂上

野菊の中の枯骨

中學校



(室事炊官士)

ざと持ち歸らうとはしませんでした。いくら敵でも、勇士の遺骨をなんで等閑に取扱ふことが出来ませう。

北朔の空つ風が、ビュー／＼と吹いて、咽が乾くのを、携へて来た支那蜜柑で我慢して、漸く山を下り再び馬車に投じて、宏壯なる旅順の市街を一氣に馳せましたが、關東都督府中學校の學生等が、公園の池の面で、スケートをして居るのも、時にとつての一興でありました。

かくて私達一行は、水交社に歸つて湯にも入り、又汁粉の御馳走にもなつて、再び埠頭からカッターに乗つて、本艦に歸著しました。

★二〇三高地

(二六三)

五 旅順出港

旅順の見學は、私にとつては、殆ど一生中忘れることの出来ない、大きな印象を残したのです。餘程以前から時機が来たならば、戦跡を一巡して、彼我兩國勇士の忠魂を慰めたいものだと思つて居ました所が、思はぬことで、詳細此の地の現状を視察することが出来て、包みきれぬ愉快を感じ、俄かに肩の重荷を下した様にも覚ええました。

中三日の旅順碇泊も、殆ど夢の如くに過ぎ去つて、一月二十六日午前九時には、此の思ひ出多き旅順を後に、大連港へ向ふことになりました。甲板に立つて見て居りますと、黄金山砲臺も、老鐵山も、其の雄偉なる姿を、思ふまゝに見せて、私達を送つてゐます。今日は空も長閑に晴れ、波も亦高からず、水も美しいのですが、夫れでも身を切る様な寒風は、何の容赦もあらばこそ無遠慮に吹きつけて來るのです。

肩の重荷

小平島

現地講話

巖氣樓

日露の戦役に、水雷艇や驅逐艦の根據地であつた、小平島錨地を近く眺めて、艦は悠々進行しました。本艦乗員の士官の中には、十年前の戦鬪に参加した勇士も決して少くはないので、思ひ出多き當年の實戰談に、何れも腕を鳴らして居ました。

かう云ふ勇しい戦争の話は、たゞ聞いただけでは愉快ですのに、夫れが現地講話であつて見ると、聞く者の印象は一層深いのであります。

旅順と大連とは、殆ど隣り合つて居るだけに、其の日の午後〇時三十分と云ふに、早くも大連港の沖合に艦隊は一齊投錨をしました。大連港は可なり廣い立派な港ですが、艦隊はわざと防波堤外に碇泊しましたから、棧橋までは例のベゼツトを用ゐねばなりません。随つて大連へ著いたと聞いても、夫れらしい模様は一向に見えず、只遙か彼方に、高い煙突や煉瓦石造の建物などが、宛然巖氣樓の如くに、私達の目に入るばかりでした。

★旅順出港、車中の觀察

六 車中の観察

二十七日午前七時上陸、大連驛から汽車に乗つて金州まで行きました。司令官も候補生もみんな一緒ですから、可なり賑かな旅でした。尤も金州驛までは、汽車で一時間ばかり、沿道の山々は、何れも眞裸で、樹木一本もなく、極めて殺風景で、所々に支那人の家屋が見えるばかり、夫れすら豚小舎同然の哀れなもの、勿論其の生活も、豚と何等撰ぶ所がないらしいのです。

あゝ可哀想に、彼等は折角此の世の中に生れて来ながら、自分の住んでる天地の外には、世界あることを知らず、空しく醉生夢死して、田畔一片の土饅頭と化し、弔ふ人もない有様、私達は満鐵沿線から、かゝる荒涼たる天地を眺むるに際して、自分が日本帝國に生れたことを、衷心から神に感謝を捧げざるを得なかつたのです。

豚小舎

六一 金州城外

大連を發して一時間ばかり、汽車の窓から沿道の光景を眺めながら、やがて金州驛に著きました。停車場の附近には、僅に五六軒の家屋があるばかり、其の淋しさは一通りでありません、私達は此の荒涼たる、滿洲の野に寒い風に吹かれて、南山へと志したのです。

あゝ南山！ 有名なる南山！ こゝは金州驛を距つる數町の地點で、勾配の緩かな一丘陵、標高二百米突と云ふのですから、一寸見ただけでは、我が軍苦戦の跡とも思はれぬ位です。

所が此の關東半島の南部は、金州灣と大連灣とが、兩方から入り込んで居て、其の一ばん狭い部分に南山があるので、山其の物よりも地形が防ぐに都合よく出来て居るからで、鹽太澳から上陸した我が軍が、背面より旅順に迫るには、どうしても此の狭い部分を通過しなければなりません。

南山

鹽太澳

★金州城外

海陸協同

此の邊一帶が、平野でありますのに、只僅の狭い部分に南山がポツリと峙つて居る、敵に取つて之位の好位置の場所はないのです。願れば三十七年五月二十六日、我が軍は海陸協同の策戦で、苦戦難關の末に、數千の勇士を犠牲にして、漸く奪ひ取つた所、其の思ひ出多き戦場を、私は僅に三十分ばかりで頂上にまで達しました。

金州城

見ると頂上には、鎮魂碑、表忠碑があり、露人の墓地、砲臺掩堡の跡なども残つてゐて、満目の見渡す所、實に荒涼たる景色で、又眼下に近く金州城が見えます。乃木將軍の有名なる七絶、山川草木轉荒涼、十里腥風新戰場、征馬不前人不語、金州城外立斜陽は、實に此の邊の模様を歌はれたものであらうと思ひました。

三 黄海の波上

華麗なる大連の町に別れを告げて、艦隊は一月二十九日、午前九時と云ふに、

聯合艦隊の
根據地

大連港を抜錨しました。大密口と小密口とを左舷に見て、だんく進む愉快さ、日露戦争時代に、我が聯合艦隊の根據地であつた、有名な裏長山列島にまで達した時、特に其の戦跡を見學するために、艦を灣口より進めて、靜かに灣内を一週せしめたのです。

海洋島

私達は旅順の海戦に於て、此の裏長山列島が多大の便宜を與へたことは、其の當時戦記でよく承知をして居りますが、今度實際に其の山姿水影に接しては、一種云ふべからざるなつかしさを感せずには居られませんでした。夫れより午後三時半頃には、之も有名なる海洋島を近くに見て過ぎました。海洋島と云へば明治二十七年の、日清海戦の時の戦跡で、島は裸にして樹木なく、赤褐色の岩が恰も切り棄てた様に、立壁をなして居る他には、何の趣味もないのですが、之も亦前の裏長山列島と同様の感に打たれざるを得ぬ所です。

日は黄海の一角に、其の名残を止めて、しかも波更に高からず、乗員一同後甲板に集合して、黄海の戦の軍艦を合唱しました。曲は赤城艦長の戦死と、勇敢

なる水兵と、共に諸君の御承知のものばかりですが、之等の人々が血を流した舊跡で、弔意を表したことゝて、靈あらば當年の戦死者も、彷彿として來り享けたことでありませう。

三 仁川沖の一夜

空は晴れ渡つて、星のまたゝきも清く、風は絶えて波静かに、珍しい平穩の航海を續けて翌日の午後一時には、早くも仁川沖の東水道へと入りました。

今の東郷元帥が、まだ浪速の艦長であつた時、吉野秋津洲の二僚艦と共に、坪井少將に率ゐられて、此の邊を通過して居た時、牙山に送る敵兵を搭載した、敵の高陞號に對して、第一の砲弾を浴せかけた、あの名高い豊島、その豊島を目前に眺めて過ぎ、やがては八尾島の遠影さへ、既に雙眼鏡裡に見ゆる嬉しさ。

八尾島！こゝは又わが淺間に取つて、忘れることの出來ぬ印象を止めた島で、淺間の當時の艦長八代大佐（今の中將）が、露艦ワリヤーグ（今の宗谷）を撃沈

豊島

八尾島

して、日露戦争の血祭にした、其の目出度い古跡であります。あゝ淺間よ、若し汝に一道の氣息が通ふならば、定めし艦首に微笑を湛へて、喜びもしようと云ひたくなる位。

艦隊は一夜を漂泊のままに送つて、三十一日午前十一時を以て、仁川港外月尾島を距る、南方約一哩の點に投錨しました。一體此の仁川と云ふ所は、世界第二の潮汐の満干の大なる土地で、其の最も差の大きい時は、優に三十尺にも及ぶと云ふことです。さう云ふ譯で自然潮流も強く、水雷艇や小蒸汽が、いつともなく沙濱にこびりついて、動きがとれなくなると云ふ、意外の變事が出來たことは、之までも何度もあつたと云ふので、指揮たるべき候補生の苦心は並大抵のことではなかつたのです。

月尾島

四 淺間よさらば

あゝ愛する淺間よ、私は今君と別れねばならぬのです。私が始めて吳軍港で、

★仁川沖の一夜、淺間よさらば

君の姿を見てより、或は江田内に、あるは有明に、さては佐世保、吳淞、旅順、大連と夜も晝も、我が家とした浅間よ、私は今君に別れを告げなければなりません。こゝからは獨り旅の、朝鮮半島を縦断して、對島海峡の波路を分くる頃君は鎮海に向つて又新らしき航路に就くであらう、まさきくあれや浅間！

司令官、艦副長、參謀、士官室各員、次室各員に、私は夫れぐ暇乞をして、いよく汽艇の中に下り立ちました。後甲板のハンドレールで、見送り呉れるは、誰れ！ 彼れ！ 私は浅間が島影にかくれるまで、じつと見つめて居りました。雨も降らず、霧もないのに、私の睫には、不覺の露が宿つたのであります。

下編 海事雑話

一 軍艦の禮砲

十四時

水雷艇防禦

軍艦には、いろいろの大砲があります。近頃出来た金剛、比叡などは、十四時と云ふ大きな大砲を、四門宛前後の甲板に積んであります。又日露戦争の時に、東郷大將の旗艦になつた三笠艦などは、十二時砲を四門積んで居ます。

私が曾て乗つて居た浅間艦などは、本來が巡洋艦ですから、戦争の場合にも、第一線に立つて、敵の主力と戦ふのではなく、其の速力を利用して敵艦を發見したり、或は夫れを追かけたりする役目を有つて居るだけに、大砲なども重砲が八吋砲で、副砲が六吋砲、夫れに水雷艇を防ぐために、三吋砲が前後の艦橋甲板に三門宛備へてあります。

浅間の例で申しますと、四門の主砲の外に、副砲が六門あります。六吋砲の副

★軍艦の禮砲

砲は人の力で弾丸をこめることが出来

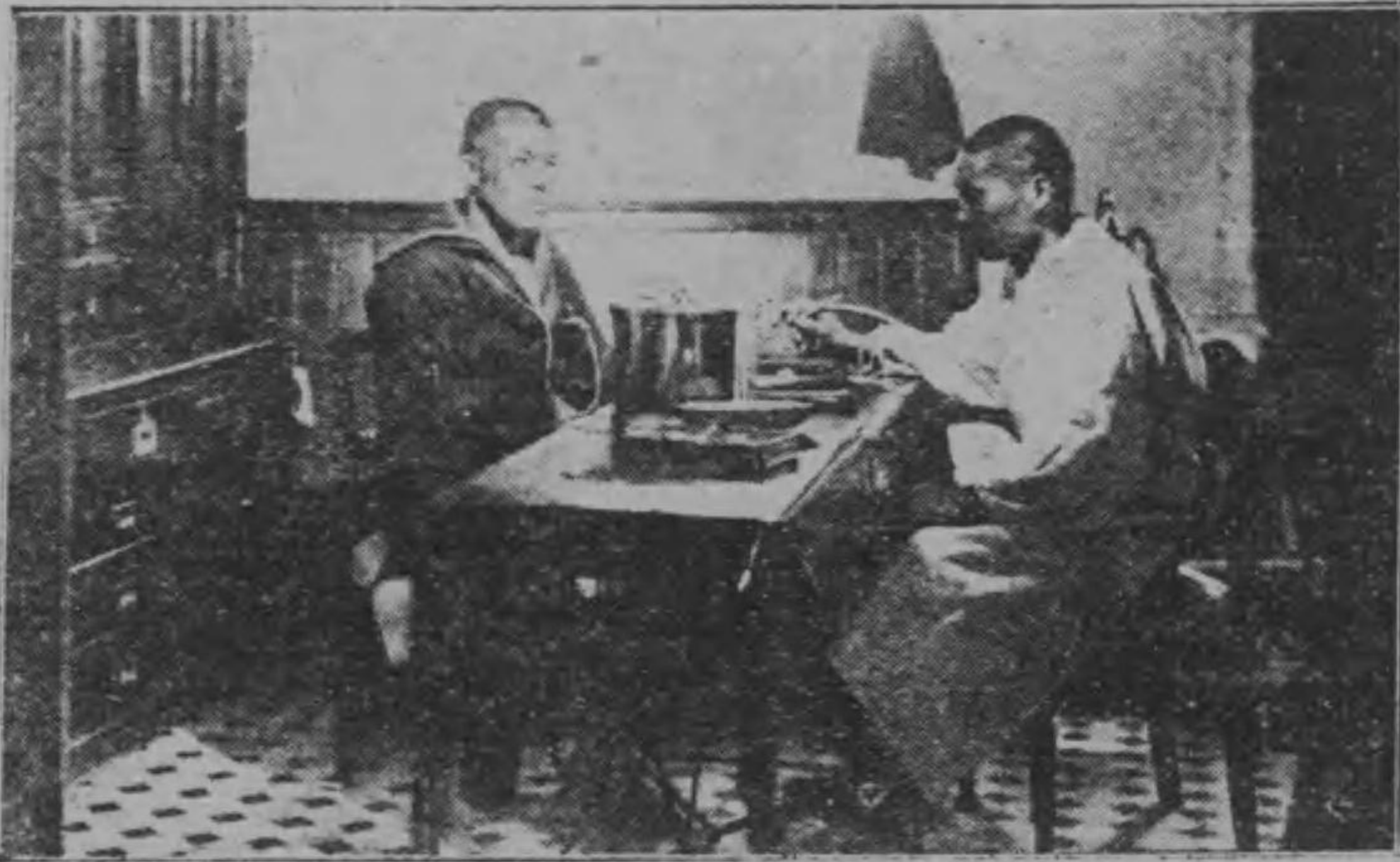
ますが、夫れ以上になると、もう電氣力か
水壓力を用るなければ、動かすことも出来
ないのであります。

三大節には、軍艦に於て禮砲を發射しま
す。御艦式の時に、數十隻の大艦が、同時
に火蓋をきる有様は、實に壯觀極りなき
ものです。

(室 療 治)

軍艦では平時は殆ど主砲の發射を致しま
せん。なせかといふのに、主砲を一發打て
ば、何千圓と云ふ金が、煙になつて散つて
しまひますから、どうしても打つことが出
来ないので。

併し主砲を打たなくても、其の上に別に



三時砲

小さい大砲が備へつてありますから、其の小さい大砲を以て、十分に練習して
置けば、いざとなつた時にも、よく狙ひを定めることが出来て、至つて都合がよ
ろしい。

禮砲を發射する大砲は、どんなものを用ゐるかと申しますと、三時砲でありま
す。三時と云へば十二時や十四時に較べたら、まるで玩具の如きものですが、近
くに居てこれを聞けば、實際耳を破る様な恐しい響を立てます。

禮砲を發射する場合には、先づ、
「禮砲員禮砲用意！」

と、云ふ號令がかかります。すると、禮砲員は前部の禮砲のある所に位置しま
す。禮砲は左右兩舷に一門宛と、其の中央に一門と、都合三門ありますが、重に
左右交るぐ打ち續けます。

又中央の一門は、豫備砲と申しまして、萬一其のいつれの砲か、巧く發射し
ない時には、直に豫備砲を打つので、禮砲を打つには、ドーンドーンドーンド

豫備砲

砲手

ンと云ふ様に、ちやんと一定の時を置いて、規則正しくやるので、夫れがドーンドンドンドンドンと云ふ如く、調子の揃はない様なことがあつたら、禮砲を受ける人に對しても失禮ですし、又其の艦の砲手が、いかに不規率であるか、解りませう。

私は幾度も禮砲の傍で、其の打出す所を見ました。打てッ！との令が下ると共に、海にさしでてゐる筒口からは、赤い火がバツと迸つて、後からむくくと煙が出ますが、其の煙は見る／＼うちに、海一面を閉してしまひ、更に三發四發目からは、白い煙の中に赤い火の柱が横はると云ふ壯觀、耳の破れる様な響きを聞きながら、此の光景を見て居ますと、胸がすき／＼して來るのです。

私は大砲のひびきが大好きです。どんな心地悪く、胸がむか／＼して居るときもこの大砲の響を聞いたたら、勇氣を起さずには居られません。

二 旗艦の話

艦隊

軍艦が二艘以上一所になつて、航海する時には、其の一艘は旗艦になります、一つの軍艦には大佐が艦長で、すべて艦長が命令をしますが、一艘以上になると艦隊ですから、司令官が出來ます、司令官は少將で、其の艦には司令官の旗を掲げますから、それで旗艦といふのです。

司令長官

日本には平生三つの大きな艦隊があります、第一艦隊と第二艦隊と、そして第三艦隊とです、其のうちで第一艦隊は、一ばん立派なよい軍艦が六隻から成立つて居まして、之を指揮する人は、司令長官であります、即ち第一艦隊の司令長官は海軍中將で、其の下に二人の司令官があります。又第二艦隊は、平常四隻の巡洋艦から出來て居りますが、戦争の時には、どの艦隊も軍艦が多くなつて居ます、第二艦隊の司令長官も矢張り海軍中將で、其の下に二人の司令官があるのです。

次に第三艦隊は、割合に小さい巡洋艦で、平時には専ら南支那の方に置かれてありますが、今は何處に居るか分りません、之は海軍少將が司令官として其の旗

大砲のひびき

艦に乗つて居られます。

艦隊の指揮命令は、すべて旗艦から出るので、平時でも戦時でも、旗艦は一ばん先にたつて、他の艦を導くので、旗艦の次に付するを二番艦、其の次のを三番艦更に其の次のを四番艦と云つた風に呼ぶのです。

陸軍の司令部

陸軍の司令部は、戦場よりも遙かに距つた所に居て、野戦隊に命令を下すのですが、海軍の方は全く之と反對に司令部がまづ先に進むことゝなつて居ます。夫れで敵の方でも、なるべく旗艦に多くの弾丸を送つて、其の戦鬪力をなくしようと思ふのです、旗艦を打ち沈めてしまへば、二番艦以下は盲目になつたも同様、手も足も出なくなつてしまひます。

スワロフ

此の前の日本海海戦の時にも、東郷大將の旗艦三笠は、一ばん多くの弾丸を受けました、其の代り此方も又敵の旗艦スワロフに、最も多くの弾丸を食はせましたから、其のためスワロフは命令の信號を出すことも出来なくなり、二番艦以下はみじめな最期を遂げ、スワロフ自身もやがて沈没して、敵は散々の敗北をし

司令官の旗

たのです

旗艦のマストの上には、屹度司令官の旗があがつて居ます。少将ならば少将旗、中將ならば中將旗があがるのです。けれ共旗艦でない艦には、其の旗がありません。

又長梳と云つて、細長い糸のやうな旗が、ひらくマストの上から垂れて居ることがあります。之は艦長の在艦を知らせるためのもので、其の旗の見えない時は、其の艦の艦長は上陸して不在であると知らねばなりません。

立派な艦

日本の各艦隊は、今や夫れく役務に就いて活動して居ります。日本には金剛だの比叡だの、或は攝津だの、河内だのと云ふ、世界のどこの國もが、東洋の方面には有つて居ないやうな、立派な艦が少くないのは、何と頼もしいことではありませんか。私達は國のために、大いに力強く、安心して居ることが出来ます。

三 軍艦の禮式

★軍艦の禮式

私達が目上の人と一緒に、電車や汽車にのる場合には、先づ自分が、其のつれの目上の人に對つて、

『さアお乗り下さい』

と、道を譲つて、其の後から乗るのが禮儀であります、所が軍艦の乗降りは全く、これと違つて居るので、皆さんも御承知の通り、軍艦は吃水の深いものですから陸地に接近することは稀で、港へ入りましても、かなり沖の方に錨を下し、其所から艦載水雷艇や汽艇で以て、陸へ通ふことゝなつて居ます。

一時間又は二時間毎にちやんと時を定めて、艦からと陸地の棧橋からと交るに定期艇が出ます。艦を出る十五分前になりますと、一人の水兵が、

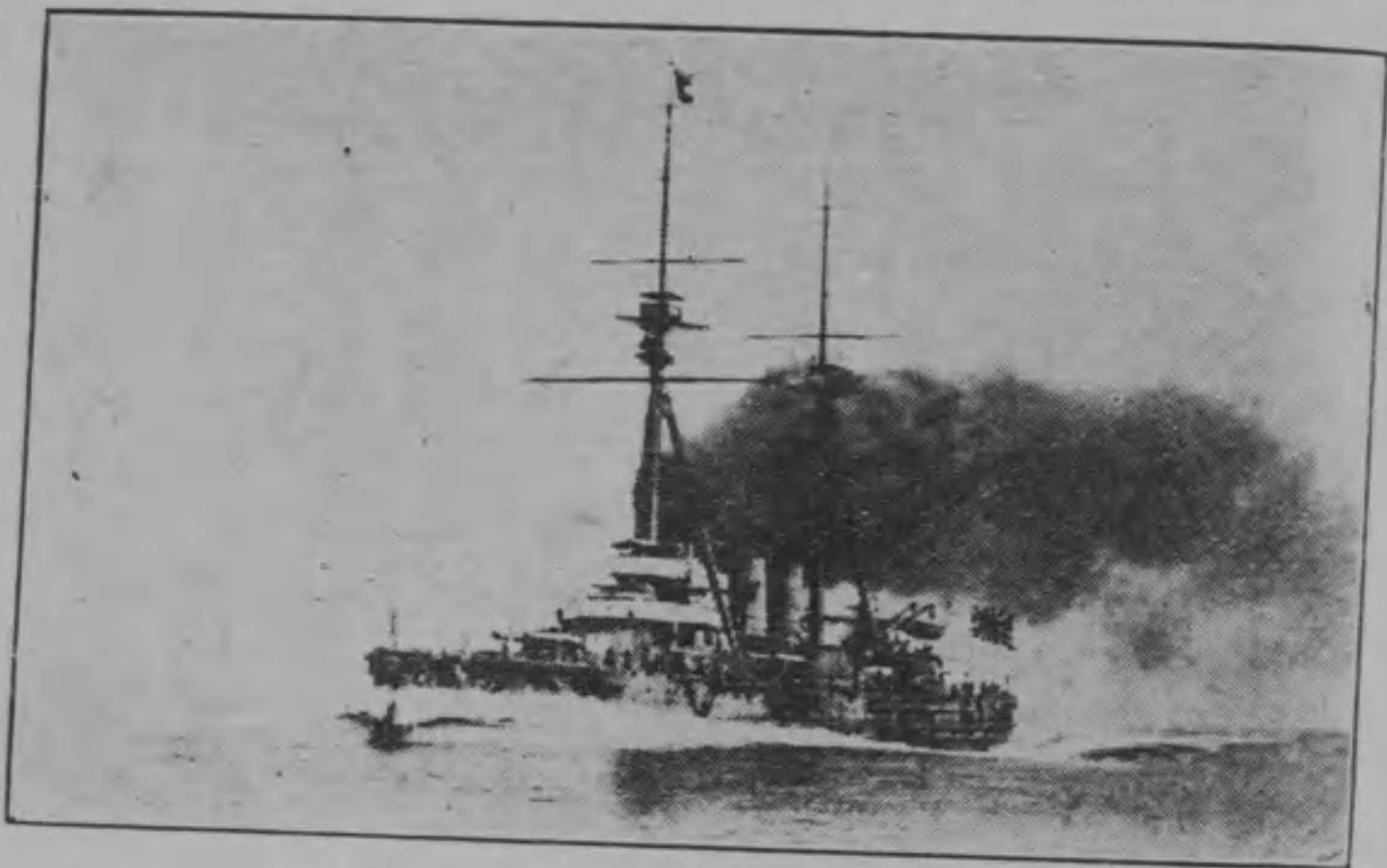
『定期十五分前であります』

と、鈴をふり乍ら、方々の室をふれ廻ります。もう其の頃には、ちやんと定期艇の用意が出来て、右舷の舷梯下に横づけになつて居ます。艦長以上司令官、司令長官などの上陸の場合には、右舷から出ますが、副長以下の上陸員は、左舷

吃水

十五分前

左舷
右舷



(津 攝 艦 戦)

から出ることゝなつて居ます。尤も左舷が他の船のために閉がつてる時には、右舷から出るのです。

さて此の場合に、陸上ならば、目上の人に『どうぞお先へお乗り下さい』と、道を譲るのですが、前に云つた通り、軍艦では全く反對ですから、目下の者より順に先へ乗つて、目上の人に乗艇を待たねばなりません。

例へば艦長が上陸される場合ならば、中尉や少尉は、まづ先に乗り、そして艦長の乗られるのを待ち受けます。艦長はいろいろの用事がありますから、大抵汽艇の出る時刻一分前位に乘られ、特に立派な敷

★軍艦の禮式